

ウルトラのキセキ ～  
One More Sunshine  
Story～

がじゃまる

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

正義と平和を守る光の巨人

太陽のような輝きを魅せる九人の歌姫

叶わないとわかっていても、それでも捨てきれない夢があった

そんな現実の壁にぶつかる少年少女に襲い掛かる虚構

破滅と絶望が迫る中、彼等の夢見る想いがキセキを起す

——心の光を、取り戻せ今

※この作品はハーメルン内にて投稿されている複数の「ラブライブ×ウルトラマン」小説のクロスオーバー作品となります

【完結しました】

# 目次

1話	遠い夢	1
2話	運命の邂逅	12
3話	出会った者	30
4話	英雄の名は	46
5話	輝きとその陰で	60
6話	追憶と予感	72
7話	集いの帳	86
8話	もう一人の勇者	100
9話	眩しいもの	116
10話	フェスティバルの夜	129
11話	抱くものは	148

12話	孤独な旧懐	158
13話	決壊	169
14話	暗雲の序曲	186
15話	陽が沈む	205
16話	心の在処	218
17話	隣り合う者	227
18話	光立つ時	240
19話	日々の	262
20話	約束の焰	273
21話	無限の光と影	292
22話	願いを繋ぐ	310
23話	ウルトラの奇跡	323
24話	未来の輝き	339

エピソード 太陽へ掛かる虹 |

350

One More Chaos Sym

posium

特別編1 暇を持って余した 創造主た

ちの 戯れ |

365

特別編2 何事もノリと勢い |

383



# 1話 遠い夢

——夢を見た。

昔——まだ幼かった頃の記憶だ。

夢の中で、自分は目を輝かせていた。

憧れていたんだ。テレビの向こうから現れる、赤と銀のヒーローに。

平和を乱す怪獣や宇宙人を倒し、人々の笑顔を守る正義のヒーロー——ウルトラマン。

その必殺の光線が戦いに終止符を打つたびに、何度も、テレビの前で歓喜の声を上げた。

カッコよかった。感動した……自分もそうありたいと願った。

派手な必殺技は使えなくても、怪獣は倒せなくても。

いつか自分もウルトラマンのように、誰かにとつてのヒーローになりたい——  
そう、思っていた。

「——ん」

　　瞼の外から差し込んでくる陽の光と共に、耳元を擦る小さな声が夢の中にあつた意識を引き戻す。

「——みらいくーん？　未来君ー」

「んあ……？」

　　寝ぼけまなこの先でみかん色の髪が揺れる。

　　まだ胡乱の中にある思考の中、それが幼馴染のものであることと、今の自分の状況を理解すると——日々ひびのみらいの未来は弾かれたように机に突つ伏していた身体を起き上げた。

「よーう日々ノ……いい夢見れたか？」

　　だが見るからにご立腹の笑みがこちらに向けられているのを確認し、既に遅かつたことを悟る。

　　一樣に自分を向くクラスメイトの視線と書きかけの黒板は、今自分のいる空間が教室であり、なおかつ授業中であることを物語っていた。



「この俺の授業サボって寝るくらいなんだ。そりやさぞいい夢をご覧になられたんでしようねえ……?」

「…ええまあ、懐かしい気分にはなれました」

「そうかそりやよかった……それはそれとしてお前居残りな」

「……へい」

隣にいる幼馴染達も含めクラス中から笑いが沸き起こる。

妙な気恥ずかしさと居心地の悪さから見上げた窓枠の外では、夏の太陽が燦然と光り輝いていた。

ウルトラマン。

M78星雲——光の国からやってきた正義の味方であり、怪獣退治の専門家。

そんな彼が俺にとつてのヒーローだった。

傷付き、時には倒れても戦うその背中で大切なことを教えてくれる。

そんな彼の姿に、幼心ながら惹かれた。

俺にとつては単純なエンタメ以上の何かがあったんだ。

でも、そんなものは所詮テレビの中の絵空事。

この現実には存在し得ないものだということもとつくの昔に理解している。

それがわかつていてもなお俺が彼に焦がれ続けるのは……一体何故なのだろうか。

「……残したのは他でもねえよ」

昼間見た夢の続きに浸りお説教をやり過ぎしていると、いつの間にか目の前に空欄ばかりのプリントが突き出されていることに気が付く。

遅れてそれが何を意味するかを理解するや否や、未来は顔を顰めた。

「進路希望表……もう出してねえのお前くらいだぞ日々ノ。今ここで書け、さつさと書け」

逃がさねえ、気だるげながらも双眸はそう訴えてくる。

ものぐさなくせして珍しく居残りを命じてきたと思っただらこういうことか。大方教

頭か何かに早く提出させるよう催促されたのだろう。

「……」

しぶしぶ取ったペンが走ることにはなかった。

漠然とイメージだけは蟠っているが、それをどう形にすればいいのか、そもそも進路として掲げていいものなのか。そんな疑義が書く手を止めさせる。

「……なあ日々ノ。お前なんかやりたいこととかないのか」

それに対しても答えることは出来なかった。

恥ずかしいとか外聞的なものじゃない。まだ自分自身でもどう伝えたらいいものかわからないから。

「……今のところ何も目的がねえってんなら出来るだけいい大学入っとけ。今の時代何になるにしろ学歴は問われるし、少しでもいいところ入っとくのがお前のためだ。俺の評判も上がるしな」

「最後の一言で台無しです先生」

「うるさいよ。俺だつて今後の俺の生活のために少しでも功績残して評判上げにやいかんのですよ。つー訳だちよつとでもいい大学行って俺の評判上げる日々ノ」

「もう私情しか残ってないです先生」

「今になってちよつと饒舌になるんじゃないよお前は。その元気を少しでもペンに乗せ

なさいな」

それができたら苦勞しないと、抗議の意も込めて息をつく。

考えていない訳じゃないんだ。むしろ世間一般の高校生よりよっほど考え悩んでいると思う……その上で答えが出ないから。

「……まあ、お前は俺等大人と違つてまだなんにでもなれる高校生だ。将来に悩む時間も大事だたあ思うけどな」

幾らかの悔いも含み零される。

「とりあえず今日のところは帰してやる。夏休みまでには提出しろよ……間に合わなかったらお前に夏は来ないと思え」

将来について悩める高校生という時間にも、少しずつ終着点が見え始めている。いつまでもウジウジと悩んではいられないのに、その先のビジョンがどれだけ考えても見えてこない。

「はあ……」

再びついたため息と共に込み上げてくる幼い頃からの情景。

いつから抱いたものなのか、そんなことはとうの昔に忘れたけれど、少なくとも今日この日まで捨て切れていないのだけは事実だった。

改めて、自分自身に問う。

俺は一体……何になりたいのかと。

\*\*\*

ようやく校舎から解放された時には既に陽は傾き始めていた。

普段ならば下校する生徒でそれなりに賑わっている帰り道もこの時間ともなれば閑散としている。

「……今日はもう無理か」

携帯電話に入っていた友人のメッセージに返信しつつ自宅へと通ずる坂道を下る。居残りさせられている時間があつたならその手助けができたと思うと少し申し訳なかった。

「はあ……」

今日何度目かもわからないため息。

夏休みの間にある☒とある催し物☒に幼馴染が携わっている。その手伝いをしなければいけないのに、自分一人その夏休みにも突入できない可能性があるとは何とも情けない。

とりあえず明日は土曜、休日だ。

その手伝いがてら、恐らく顔を出してくるであろう親友に相談でもしよう——そんなことを考えながら坂を下りきったその先。

——『思い出して』

「……………んあ？」

澄んだ声が耳朶に、そして頭に直接響いてくるような感覚がし、未来は思わず周囲を見回した。

——『お願い……………時間がないの』

「何言って……………」

今しがた自らが下ってきた坂を見上げた先にあつた☒何か☒に視線が縫い留められる。

麻色の髪を揺らす、妖精のような衣服を身に纏った少女。幼さを感じさせる顔立ちだがその瞳には強い意志が宿っているように見えた。

だが注視すべきはそこではない。

どこか不思議な雰囲気醸す少女だが、それもそのはず。淡く光を発するようなその身体は半透明に透けており、更に赤い靴を履く足は地面に着くことなく浮遊している。幽霊かたまたまた何かの立体映像なのか、目の前の現象に混乱する未来に考える暇すら与えず、その少女は二の句を継いだ。

『あなた達じゃないとこの世界は……あの子は救えない……!』

少し焦った様子で弱々しく告げる彼女。

不思議と引き込まれるようなその声に聞き入っていけば、不意に手が差し伸ばされ――

『思い出して……あなたの――を……!』

白く染まってゆく視界。

その中で輪郭すら覚束無くなってゆく少女の顔が完全に見えなくなる刹那、一瞬、その表情が渴望と寂寥に、揺れた気がした。

荒廃した街並みの真上に暗雲が広がっている。

世界の終わりを連想させる光景の中に暗黒の巨人が佇むその様は、まさしく絶望をそ

のまま絵に描いたかのようだった。

—— 『……いこう、私達……九人も！』

そんな絶望に抗うように、重なった□十□の声と光が上がる。

これは夢だ。

そう気付くのに時間は掛からなかったが、それがわかっていても目を離せないものがそこにはあった。

—— 『これが究極の光……即ち、無限の輝きだ！』

絶大な輝きを放ち、暗黒の巨人と対峙する黄金の巨人。

九人の少女と共にその巨人へと姿を変えた少年は、確かに——、



「ツツ……いー」

弾かれるように飛び起きた。

寸刻前にあつた夕暮れの道は薄暗い自室へと変わり、身体に押し掛かる感覚が今自分がベッドの上にあることを告げてくれる。

意識を失っている間に何があつたのか、そもそも一連の出来事は全て夢だったのか……そんな疑念に頭を悩ませるよりも早く□その名□を口にする。

あの夢の中。

見知った顔の少女達と共に光の巨人へと変身していたのは、紛れもない未·来·自·身·であつた。

「ウルトラマン……メビウス……？」

## 2話 運命の邂逅

「ウルトラマンメビウス……ねえ……」

真上から照り付けてくる太陽の光が真夏の到来を予感させる。

普通ならこれから来る学生時代最大級のイベントに胸を膨らませているのだろうが、今眼前にある苦笑いはそんな期待すらも削いでくるものだった。

「未来、お前疲れてんのか……?」

哀れみと、出来る限り触れまいとする優しさを内包した表情をする親友——  
仙道陸。  
せんどうりく

どちらかと言えばガサツな方の彼にすらそんな気遣いをさせてしまうほどの話だったらしい。

「……ここはハッキリと言ってあげるのが優しさなんじゃないですか？ 高校生にもなってそれは痛いつて」

「お前頑張つてオブラートに包んだ俺の努力返せよ」

「言うほど包めてなかったけどな」

年下にすら呆れられる始末。けどまあそれも仕方のないことだろう。

この年にもなつて自分がウルトラマンに変身する夢を見た友人に話すのみならず、あろうことかそれを現実のものではないのかと疑っている。傍から見なくても痛いことこの上ない。

「まあ、遥が言い切りやがったから俺もハッキリ言うけどよ……夢は夢だろ。それを現実と思う方がどうかしてる」

「…俺も最初はそう思ったけどさ」

改めて言うが未来だつて高校生だ。こんな年になつてあんな夢を鵜呑みにするほど幼稚じゃない。

けど、昨日の出来事自体は確かに起こつていたことなのだ。教師から手渡された進路希望表は鞆の中にあつたし、あの少女と邂逅する前に届いたメールも携帯に記録されていた。

そして何より音もなく帰ってきていて気付けば未来が自室で寝ていたという母親の証言。けれど当の未来にはそもそも昨日帰宅した覚えがない。

今未来にとつて確かなのは、あの少女と出会つてから家で目覚めるまでの記憶が抜け落ちていることと、その穴を埋めるようにあの夢が存在しているということだけだ。

「…白昼夢つてやつですか？」

「……なんだそれ」

「現実で起きてることのような空想を夢のように映像で見たり、非現実的な想像に耽ったりしてる状態……まあ要するに未来さんは起きながら夢を見てたんじやないかってことですね。大体はその人の願望を空想してることが多いそうです」

「へー……」

「おい陸、その本気で憐れんでる目やめろ」

「そもそも、ウルトラマンっていうのが非現実的です。あんなもの存在するはずもないのに」

「お前はもうちよつと夢見てもいいと思うぞ最年少」

「フィクションとかそう言う話以前に生命として存在し得ないものにどんな夢を抱けた？ ウルトラマンは身長40メートルに体重3万5000トンの人型生命体って話でしたけど、まずこれが生命の構造としてあり得ませんし、仮に存在していたとしても地球の重力場じゃ直立はおろか自重を支えることもできませんよ。それに質量保存の法則から言っても——」

「空想を現実の物差しで測るな。てか頭痛くなってくるからやめろ」

「……まだ半分も話してませんけど」

少しでも謎を解明できればと相談したのだが……なまじ頭の良すぎる奴を相手にし

ているため思った方向に話が進まない。

その天才によって片割れの脳回路がショートを起こし始める程度には小難しい単語が羅列されるが、どうにも未来にはそんな言葉で片付けられるようなものとは思えなかった。

「遥の言うことは尤もだと思っけどさ……なんかこう、そう言う科学の定理とかで説明できるものじゃない気がするんだよ」

「つつてもなあ……、流石にそればかりは肩も持てねーぞ」

そんな旨を伝えるも、二人揃って難しい顔を向けられる。

「ウルトラマンだのなんだの……それならまだあのバカみかんの方が希望も現実味もあるってものだ」

気だるげな声と共に向けられた視線の先では女子三人。

言い合っているのか盛り上がっているのかは知らないが、その様は姦しいどころか騒がしくすらあった。

「む……、なんか馬鹿にされた気がする」

「気のせいじゃねーのバカチカ」

「いや思いつきり言ってんじやん！」

その騒がしさの八割を担うみかん髪の少女——たかみちか高海千歌が頬を膨らませながら陸

へと突撃。ポカポカという効果音が似つかわしいパンチを連続で浴びせ始める。

千歌自身容姿が幼く見えるためか、揶揄いながらその額を押さえつける陸とのやり取りは兄妹のそれにも思えた。

「こーら、あんまりいじめると千歌ちゃん拗ねちゃうよ」

「この際とことんしよけてもらった方がいいんじゃないの？ マイナスにマイナス掛けりゃプラスになるんだし」

「意味わかりませんしそれ数学の世界でしか成り立ちませんからね？」

そこにグレーの髪をポプカットに整えた少女——わたなべよう渡辺曜が混ざり、より一層の澆刺さが投入される。

陸、千歌、曜、そして未来。幼馴染達が生み出す賑やかさは今も昔も変わらない。

「……で、何をぎゃーすか騒いでたんだよお前等」

「大体想像つくでしょ？」

そんな幼馴染の輪に最近加わったのが疲弊した様子でため息をついたのがさくらうちりこ桜内梨子と、その弟のさくらうちほろか桜内遥

少し前に東京から越してきた二人だったが、千歌がいたく梨子を気に入って以降はこの六人であることがデフォルトとなりつつある。

「漁港祭で披露する演舞の内容でちよつとね……」

「まーだ揉めてんのかよ……」

最近こそようやく馴染んできた感覚はあるが、それでも都会つ子で会った桜内姉弟に静岡の田舎町である箱内浦での生活にはまだまだ驚かされることが多いのか。

ある催し物に加わることとなった千歌、曜、梨子の三人だったが、段取りは思うように進んでいないのが現実だった。

「第一私はステージに出るなんて一言も……」

その催し物というのが内浦、そして沼津を跨ぎ開催される漁港祭という祭り。

港町として栄えたこの地で豊漁や海での安全を込めた願い、そして自然への感謝を伝えるこの祭りはこの地で毎年行われている。

そしてこの祭りではその年で十七歳になる少女三人が海の神へと捧げる舞いを踊る演舞がある。

その演舞に登壇する踊り子として今年選ばれたのがこの三人なのだが……、

「まあ、私と千歌ちゃん、何年か前から今年の踊り子やるのは決まってたし……」

「今年コイツ等と仲良くなっちゃまったのが運の尽きだな。まあ決まっちゃったもんは仕方ねーから腹括るしかねーべ」

「そんなあ……」

曜の言った通り、古くから内浦に旅館を構える家系の娘である千歌は今年踊り子を務めることが決まっていた。

準じてその千歌の親友であり自身も船長である父を持つ曜も踊り子に抜擢されたのだが、千歌と曜の二人では本来三人であるその役を務めるに一人足りない。

そこで千歌が最近仲良くなった梨子を勝手に今年の踊り子としてエントリーさせる暴挙に出たことで今に至る。

「でも歴史ある行事なんですよ？ 私地味だし、それに最近こつちに引越してきたばかりなのにこんな……」

「だからもう決まっちゃったもんはどうしようもないって言ってるだろ……」

「そうそう。それに梨子ちゃんなら大丈夫だよ、とつても美人さんだもん！」

「うう……じゃ、じゃあ！　せめて演舞の内容だけでもいいから変えて！」

踊り子に決まってはや数週間。それにも関わらず未だ抵抗を見せるのはあまり人前に出るのが得意でない彼女の性格もあるのだろうが、今年の演舞にはとんでもない爆弾がある。

恐らく、と言うか間違いなく、梨子が舞台上に立つのを嫌がる理由はそこにあるのだろう。

「曜ちゃんだっと思って思うでしょ？　大勢お客さんがいる前でアニメのキャラの真似をして



踊るなんて何の拷問!？」

「まあ……それはちよつと私も思ったけど……」

継るような、必死の形相が向けられる。

その鬼気迫る視線を集中させるように、全員の顔がこうなった全ての元凶たる高海千歌へと向けられた。

「えー？ 私はいいいと思うけどなー？」

☒ラブライブ!☒というアニメがある。

未来も詳しくは知らないが、所謂アイドルものなどと言われるジャンルである記憶している。確か廃校の危機に瀕した母校を救うべく主人公達が☒スクールアイドル☒という架空の道を進む物語だったか。

そしてそのアニメにひどく感銘を受けたのが千歌であり、歴史と伝統ある祈禱祭の舞台でスクールアイドルの真似事をしたというのが彼女の主張だった。

「千歌ちゃんがただやりたいだけでしょそれ!」

「やらされるよりは自分がやりたいって思ったことをやる方がいいものができると思うけど」

「コイツ尤もらしいことを……」

で、まあ当然周り（主に梨子）から不満と反対の声は上がっているのだが、千歌は頑

として譲ろうとしない。

傍から見れば小学生レベルの我儘なのだが、その意志の裏には彼女なりの理由があるように未来には思えた。

「伝統あるお祭りでそんなことして大丈夫な訳ないでしょ!？」

「割と毎年自由にやってるよ！ 去年の果南ちゃん達とか」

「あれは自由というより無法地帯だったような……」

「ていうか文句ばかりで二人共全然案出してくれないじゃん!」

「う……そこを突かれると弱い……」

「少なくともそれだけはないっていうのは確かね」

「もー！ 未来君もなんか言ってるよ!」

それを知ってか知らずか、半ば四面楚歌となりつつある千歌が救いを求めるような視線を向けてくる。

最も彼女との付き合いの長い未来から見れば、千歌が何かに熱中するのはかなり珍しいことだ。

例えばそれがあまりにも現実離れたものであろうと背中を押したくなるのが正直な気持ちだった。

「ま、まあ、確かに突拍子もないことだけども……二人としてはアニメの真似事をして

るって知られたくない感じだろ？」

だから我ながら甘いとは思いつつもつつい、助け舟を出してしまおう。

「見てる人達に直接それだとは伝わらない訳だしさ、俺達が言い触らさない限り問題はないんじゃないのか？ パフォーマンスとかもそこまでこう……アイドルっぽい作品じゃないし」

「未来くん……！」

子犬のような千歌の視線が少し照れ臭く目を逸らす。

もう何年も付き合いがあるはずなのに、これだけは未だに慣れる気がしなかった。

「ほー……さっすが、ウルトラマンがどうか言える奴の言葉は違うな」

だがそんなドギマギした感覚に浸るのもつかの間。続いて向けられた別な視線と声に軽い悪寒を覚えることとなる。

「あの……陸……？」

さながら悪魔のような顔が見えた。

先程の気遣いは何だったのか、見るからな悪人面をする陸は意地悪い笑みを作ると――

「ウルトラマン……って、あの昔やってたヒーロー番組だっけ？ 未来君が好きなの？」

「それがどうかしたの？」

「いやそれがこいつがよー」

「おいバカやめろおおお!!!」

必死の叫びと、それに伴う笑い声が海風に溶けてゆく。

年を重ねそれぞれ昔とは変わった。新しい面々だつてこの輪に加わつた。それでもこの関係性だけは昔から変わらない。潮の匂いの香る日常が自分達にとつての当たり前だつた。

だからこそ、なのか。

こんな当たり前を脅かす危機がすぐそこにまで迫っているなんて、この時はまだ、思つてもみなかつたんだ。

結局いつも通り駄弁つただけでその日は解散。祭りの日までそう時間はないという

事実がじわじわと危機感をせり上げさせてくる。

「お前覚えとけよ……!」

「ははは、わりいわりい」

夕刻となり暑さは和らいでも、未来の顔に充満した火照りが覚めることはなかった。原因は隣歩く不良染みた幼馴染。コイツの暴露から始まった未来弄りが解散となつたつい先程まで続いたからだ。

「お前等揃つて似たようなこと言いやがつて、幼馴染つてやつは似るもんなのかね」

「全然嬉しくないけどな……」

未来が千歌の肩を持ったのに背中を押したくなつた気持ちがあつたのは確かだが、自分もウルトラマンがどうか言つてしまった手前否定しづらかつたのも事実。

まあ結果的に陸が裏切つたせいで踏んだり蹴つたりだったが。

「けどまあ、これでわかつたろ。夢は夢だ」

曜達にも、未来がした不思議な体験の話はあまり良い反応はされなかつた。

本当にただの夢なのか。そんな疑念はまだ残つているのに、周囲の反応がそれを急速に現実へと引き戻してゆく。

「そんなこと考えるのに割いてる時間があんなら将来のこと考えろよ。進路希望表、提出急かされてんだろ」

「……知ってたのか」

「千歌と曜から聞いた」

嫌味で言っている訳ではないし、むしろ陸が自分を思つての言葉だ。それは未来が一番わかっている。

そんな親友の姿に、少しずつ思考が冷静になつていく。

「俺が言えるようなことでもねえけどさ……後悔してからじゃ遅いぜ」

「……」

そもそも、メビウスなんてウルトラマンは存在しない。

数十年前、テレビの向こうで降り立った光の巨人。後にも先にもウルトラマンと呼ばれているのは彼だけだ。

それに共にそのメビウスへ変身した少女達。A q o u r sと叫んだ面々の中にあつたのは千歌達の顔だった。

円陣を描き、番号と共に自分達の冠する名を上げる少女達……自分でも理由はわからないが、あれは今千歌が追いかけているスクールアイドルのように思えた。

存在しないウルトラマンに、存在しない偶スクールアイドル像となる幼馴染達……冷静に振り返れば痛々しく思える。

白昼夢だという遥の言葉が反芻する。

彼の言う通り、あれは進路という壁にぶつかった未来が見た願望に過ぎなかったのだらうか——、

「俺は……」

だがそれでも。

理由も根拠もないのに、まだ心のどこかでそれを捨てきれずにいるのを自覚した、その時だった。

——『……手放しちやだめ……!』

また声が出た。

空耳でも何でもない、未来へと投げかけられた声。そんな確信を持つて周囲を見回すが、声の主である少女を見つけるよりも早く次なる異変が起きる。

「陸……? 陸ッ!!」

一瞬にして立ち込めた霧が辺りを白一色に染める。

それ自体はすぐに晴れ視界は開けるが、消えたのは霧だけでなく刻前まで隣にいた幼

馴染の姿までもが影も形もなくなっていた。

「今度はなんなんだよ……………」

自分がいた場所自体は変わらないが、沈みかけていたはずの太陽はまるで時間が巻き戻ったかのように高い位置にある。

それに陸含め、辺りに人の姿や気配が一切ない。未来しか存在しない世界かのように静まり返っている。

「な——んツ……………!?!」

立て続けに起こる異変は未来に状況を整理する時間すらも与えてくれない。

体感したことのないような揺れが地面を震わせ、唸り声のような騒音がどこからか聞こえた。

「……………!?!」

直後、再度大地を揺らした存在するはずのないソレに絶句する。

六十メートルはゆうに超えた黒い体躯に、それを覆う深紅の装甲。



頭部の二本角から長い尾にかけ生えた無数の刃を備えたその獣は、今まで自分がテレビの中で見ていた存在で――、

——  
サイキョウジュウ  
 最凶獣

キングヘルベロス

『ツツツ——  
 !!!!!』

轟々と咆哮が上がり、**☒**怪獣**☒**にして他ならないその巨大生物が進行を開始する。

それが自分に向かっていることを理解した未来は、震える身体を必死に前へと突き動かした。

「うあっ……い……！」

眼前に着弾した巨大な刃によって衝撃波と粉塵が巻き起こり、小柄ではないはずの身体が容易く吹き飛ばされる。

それでも何とか走ろうと痛む身体を起き上げるが、既に自分が巨大な影の中にあつたことが全てを悟らせた。

「あ………」

低い呼吸音と共に怪獣の腕に備わった刃に集約していく赤黒い波動。

それが自分の生をここで終わらせるものであることは想像に難くなかった。  
「……………」

すぐそこにまで迫った死を前に想起する。

親の顔、友人の顔……そしてずっと憧れたヒーロー。

散々言われはしたが、ここまで非現実的なことが立て続けに起こっているんだ。こんな時くらい縫ったっていいはずだ。

『ツツツ——  
!!!!』

祈るように目を瞑る。

厄災や理不尽に襲われた人々が願った時、その祈りに応えて現れる。

自分の憧れたヒーローとは……そう言う存在だったから——……、

『シューアアアツ!!!』

炸裂音や突風こそすれど、一向に訪れない最後の瞬間。

そして直前に聞いた怪獣のそれではない声を訝しんだ未来が恐る恐る目を開けば、そこには――、

「え……」

立て続けに本日二度目の絶句。けど今度は恐怖や絶望を孕んだものではない。

驚きという感情こそ同じだが、漏れた声の大半を占めるのは――感嘆。

『……』

転倒した怪獣を見下ろす、赤と銀の巨人。

頭部の二本角や肩から掛かる装甲は自分の知る姿とは大きく異なるが、その胸に宿る蒼い輝きが教えてくれる。

今日の前にある巨人が――本物のウルトラマンだということ。

### 3話 出会った者

『シユアッ!』

『ツツ——!』

二体の巨大生物が衝突し、寸刻前までであった静けさを完全に打ち壊す。

その戦いに沸いているのか、はたまた怯えているのか。海面の荒立つ波や度々揺れる大地は両者の衝突の凄まじさを物語っていた。

「…なんだよ……これ……」

夢でも見ているかのような光景だった。

怪獣に……ウルトラマン。

これまで画面の向こうでしか触れることのできなかつた存在が、憧れた存在が、今日の前で戦っている。

『ツツ——!』

『フッ!』

だがその戦いはテレビで見るよりもずっと苛烈かつ激しい。

怪獣の背に生える幾つもの刃がミサイルの如く発射されたと思えば十字に組まれたウルトラマンの腕から放たれた光の刃がそれを打ち消す。

『デエエアツ！』

すかさずウルトラマンが突撃。

立ち込めた黒煙を切り裂くようにその巨体から打ち出される拳が怪獣の側頭部を捉えた。

「ウルトラマン……なんだよな……、本物の……！」

脳の思考回路は未だ情報を処理し切れていない。

それでもただ一つわかるのは、今日の前で繰り広げられている戦いが紛れもない現実だということ。

『タアアアツ！』

「よし……！」

ドロップキックが炸裂し、転倒した巨獣の体躯に思わずガッツポーズ。

自分の知っている彼と差異はあれど、目の前にいるのはウルトラマン。

焦がれ続けたヒーローの存在に、こんな状況にも関わらず未来の心に確かな高揚感を生んでいた。

『オオオ……！』

「そこだ……いけ！」

頭上で両腕が重ねられた瞬間、全身に集約してゆく七色の光。

やはり形こそ違うが、それがウルトラマンの☒必殺技☒であることはすぐにわかった。

平和を乱す怪獣や宇宙人を倒し、その戦いに終止符を打つ——必殺の光線。

『ツツツ——!!!』

だが、戦いの行く末だけは未来の思い描いたものとは違うようで。

七色の光が放たれたその瞬間、振るわれた怪獣の両腕から生み出された鎌鼬のような刃。

それは光線を真つ二つに切り裂きながら猛進してゆくと、そのままウルトラマンへと直撃し——、

『グアアアアアツ……!?!』

着弾と共に吹き荒んだ爆風がウルトラマンの身体を薙ぎ払ってしまう。

直後に赤く点滅を始めた胸のランプは限界に近い証。つまりもうウルトラマンに残された時間は少ないということだ。

『ツツ——!』

『グ……アア……!』

見るからに動きが鈍り始めたウルトラマンを怪獣の剛力がねじ伏せる。

力負けしていることも、このままいけば敗北の結末が訪れることも明らか。

何か、何かないのかと、紛いなりにもあの作品を繰り返し見続けた頭で必死に考える。

「そうだ……!」

閃きが灯る。

差し込んだ希望の光に導かれるように、恐れも忘れた未来はその声を届けるべく巨人の下へと走った。

『どうなってんだ……エネルギーの消費が馬鹿に早いぞ……!?!』

「ほんとだ……なんかいつもより疲れる……」

一体化する相棒の身体を通して疲労感や脱力感、焦りが伝わってきた。

眼前には自分が彼と出会い、初めて倒した相手——ヘルベロスと酷似した怪獣が唸りを上げている。

コイツが以前の個体よりも格段に強いこともあるが、それでも今の状況が異常だとい  
うのは自分でも勘付くところだ。

『ぐッ…、スワローバレットッ!!』

相棒——ウルトラマンタイガの言う通りエネルギーの消費が尋常じゃなく早い。

既に活動時間の限界を警告するカラータイマーは点滅を始めており、牽制に放った光  
の刃は奴の装甲に容易く弾かれてしまう。既にエネルギーが足りてないんだ。

だがまだ変身して一分も経っていないはずだ。いくら地球上では活動時間が限られ  
ているとは言っても早すぎる。

『ッッ——!!』

『うあああッ……!!?』

その理由を考える余裕すら与えられず地面へと押し付けられ、頭部の二本角から発生  
した雷撃が身体を打ち付ける。

逃れようにも被弾により更に脱力感の増した腕に力は入らず、それどころか更に拘束  
が強固になってゆくばかりだ。

「つ……、タイガ、力比べじゃ不利だ……タイタスに——」

力自慢の彼なら。

そう思い腰元に手を伸ばし——更に違和感が加速することとなる。



「え……?」

『どうした春馬!? 早くタイタスに……!』

「タイタスのキーホルダーがない……フーマもだ!」

『はあッ!』

いつもそこにあつたはずのものが忽然と消え去り、いつも共にいてくれたはずの彼等の気配もない。

呼びかけに答える声もなく、徐々に膨らんでいった違和感がいよいよ確かなものとなる。

「どうなってるのタイガ……エネルギーの消費が早いのと関係あるの?」

『そんなの俺に聞かれても——ぐああッ……!』

ただでさえ混乱する頭の中がヘルベロスの追撃によりぐちゃぐちゃになってゆく。

点滅を加速させるカラータイマーが更に焦りすらも加速させ、打開策はおろかこの状況切り抜ける術すらも見失ってしまう。

『ツツ——!』

そんなタイガにトドメの一撃が突き刺さろうとした——その時、

「ウルトラマ——ンツツ!!!」

ヘルベロスの咆哮すらも掻き消すような叫び声。

それが自分達に向けられたものであると理解したタイガが目線を向けた先では、一人の少年が何かを口にしながらこちらへ駆けてくるのが見えた。

「その怪獣は首元に装甲がない！ 狙うならそこだツツ!!!」

耳に届いた彼の声からは、ウルトラマンの力になろうとする強い意志が伝わってくる。

見やれば確かに首元の装甲が薄い。このヘルベロスは全身に堅くまた凶器を備えた鎧を持つが、動きや生命活動の維持そのものに支障をきたす間接部位までもは覆えないのか。

「いや、それよりも……、」

「タイガ……」

『ああ……!』

その声が清涼剤となるように、ショートしかけていた脳内回路がクリアになってゆく。

ウルトラマンに怪獣。巻き込まれれば命の保証はないそれらの衝突を前に逃げ惑う人々を大勢見てきた。

けどあの少年は自らの危険を顧みず自分達の力になろうとしている。

その勇氣に、自分達が応えないでどうするんだ。

「『う……おお……!!』」

不思議と湧き上がってきた力を糧にヘルベロスを押し返す。

何が起ころうと自分達のやることは変わらないはずだ。

今はただ、あの声に応えることだけを考える。

『ハ……アアアツ!!』

地面に背を預けたまま真上へと両足を突き出し、ヘルベロスを全力で蹴り飛ばす。

転倒こそさせられなかったが後退させられただけで十分だ。それだけで随分余裕ができる。

『ツツ——!!』

『フツ!』

再びあの巨大な刃が迸るが、同じ手を二度は食わない。

上体を屈め空間すら切断するそれを回避し、瞬時に大地を蹴って奴へと肉薄。

『今だ春馬! 行くぞ!』

「うん……！」

大技の反動で反応動作の遅れたヘルベロスの両腕を弾き、潜り込んだ懐の中で思いつきり拳を振り上げる。

身体は仰け反り両腕も開いた状態にある。首元という弱点を晒した奴に今一度決めた技を叩き込むべく、タイガは両腕を天へと掲げた。

『☒ストリウム——！！』

気力も、残されたエネルギーも、この情動も。

ありったけの力を全て込めて——ぶちかませ。

『☒プラスター——☒ツツ！！！！』

T字に組んだ両腕から虹色の光線が放出され、その断末魔ごとヘルベロスに首元から焼き払ってゆく。

やがてその肉体は爆発四散し、それに伴った轟音と凄まじい閃光が視界を白く染め上げていった——、

「——い！ 未来ッ！」

「っ……………」

爆発と共に視界を満たした白。

その純白が徐々に色彩を取り戻していった世界は差した夕陽に染まって見えた。

「陸……………」

「やっと反応しやがった……………。急にぼーっとしだすからビビってたぞ……………」

揺れる紅をバックに親友の顔が視界の中央に映る。

その様子が直前までであった二つの事象を思い起こした未来は、弾かれたように辺りを見回した。

「そうだ怪獣は…………ウルトラマンはどうなった!?!」

「はあ……………」

だが巨大な影などどこにも見つからず、映るのは陸の怪訝な顔だけ。

「未来…………お前ホントに大丈夫か?」

平穩の息衝く内浦の景観に巨大生物はおるか戦いの跡すら見る影もない。

それらは憂慮と呆れの混じった陸の表情と共に何事も起こっていないなかったことを示しているかのようだが、未だ身体に残るこの感覚が今しがたの体験が現実であることを教えてくれる。

「——うわわあっ!?!」

そんな未来の勘が呼び寄せたことなのか。

短い悲鳴に遅れ、どきりと何かが地面へと落下した鈍い音がする。

「いっ……たた……って、あれっ!?!」

引き寄せられるようにその方を見やれば、一人の少年が腰を擦りながら困惑した様子を見せていた。

特別変わった特徴は見受けられなかったが……何故だか、彼の姿があの人と重なって見えた。

「……ひよつとして」

「ちよ……、おい未来!」

天啓を受けたかのように動いた身体が陸から離れ、焦燥を伺わせながら独り言を言い始めた彼へと駆け寄ってゆく。

雑多な憶測が頭を行きかう中、その奥で高鳴る期待が、心を弾ませていた。

「ねえタイガ、ここって……」

高所から落下した身体が痛む中、ぐるぐると見回す景色に既視感を覚える。

忘れもしない。自分の魅せられた輝きの跡を追い、大切なものを受け取った……ここはそんな場所だ。

『俺達がフォトンアースの力を手に入れた場所か……』

「うん……でもどうして？ 俺達さつきまで……」

人気のない穏やかな海岸通りには、どこかノスタルジーな空気が流れていた。

けれど先程まで自分がいたのはそれとは真反対な建設物の立ち並ぶお台場の街。今この地を踏んでいるのはおかしいはずだ。

「タイガ……、やっぱりおかしいよ。何か変だ」

『そんなこと俺もわかってる。けど今の状況じゃ何も——』

「ねえ君！」

消えた二人の仲間に、突然飛ばされた□内浦□の地。それに戦闘中に抱いた疑念も数多くある。

様々な異変が頭の中へ押し寄せてくる中、明確に意識を射止めたのはそのどれでもない背後から掛かった声だった。

「え……？」

振り返り、またも既視感。

似ている。その少年の第一印象を一言で言い表すならばそれだった。

「突拍子もないこと聞くけどさ……さっきのウルトラマンって、もしかして君？」

髪型がそれだったならば女子と見紛うような中性的な顔立ち。

遅れて先程の戦いで自分達に力をくれた少年だと理解するが、改めて見る彼の顔はどことなく□とある先輩□を思わせる。

……いや、注視すべきはそこじゃない。

「怪獣を倒した時にさ、一瞬見えたんだよ。あのウルトラマンが人間に戻るとこ」

また別の焦りが浮かび上がってくる。

期待の含まれた声と視線にたじろぐ余裕もない。

自分がウルトラマンである。バレてはいけない秘密にあっけなく迫られているのだ





全神経を言い訳の探索に集中させていたその時、漕ぎついてきたのは救い船か。

少年の背後から振り下ろされた手刀がその脳天へ直撃。ごすつ、という音から鑑みるに相当重いと思われる。

「いい加減にしろよお前！ 俺等ならともかく知らん奴にまで迷惑かけてんじゃねえ！  
ほら、困つてんだろうが！」

友人なのか、諫めの一撃を振り下ろしたもう一人の少年によつて彼が引き剥がされてゆく。

今にも口論に発展しそうな雰囲気には少々ハラハラさせられるが、まあとにかく、助かったと考えていいのだろうか。

「わりいな馬鹿が迷惑かけて。オラ行くぞ未来」

「ちよつと待て陸！ これだけは本当に……！」

「問答無用じゃ！ いいから帰るぞ」

駄々を捏ねる子供とその母親のやり取りを彷彿とさせながら、陸と呼ばれた少年が彼を引き摺りながら歩き去ろうとする。

その中で耳朶に触れた単語は、自分の中にいる相棒も含めその意識を射止めるには十分だった。

「未来……？」



## 4話 英雄の名は

「追風春馬……ねえ……」

粗暴な印象を抱かせる双眸が向けられ思わずたじろぐ。

これまで何度も恐ろしい怪獣や宇宙人と対峙してきたはずなのに、こんな少年一人に気圧されてしまうのは何故なのだろうか。

「……お前等、なんか隠してねーか？」

「なんだよ……確かに一回も言ったことないけど、別に俺に親戚がいようが不思議なことじゃないだろ」

「いやまあ初耳だったってのもあるけどよ……親戚って割にはよそよそしくないかさつきまでまるで初対面みたいな感じだったし」

「お、俺も最後に会ったの随分前だったしな。顔見てもすぐには思い出せなかったんだよ。な？ 春馬！」

「は、はい……」

それにこの特異な状況も加味され、懐疑の視線を振りほどくため咄嗟に打った☒親戚☒という芝居もぎこちなくなる。

その中で何度も見やった彼の顔は、やはりある人の面影を重ねてしまうものだった。  
 (未来さん……なんだよね？ 俺達を知ってる)

『うーん………？』

表面上で受け答えこそしつつも、内心自分の置かれた不可解な光景の中で相棒と共に目を回していた。

世界を救った先輩とよく似た……それも同姓同名の少年に連れられるようにして並び歩いている。こんな日が来るだなんて想像した日があっただろうか。

(もしかして俺達、過去の世界に来ちゃったりする……？)

『………』

色々な考えが波のように押し返す中、最も合点のいく推察がそれだった。

☒日々ノ未来☒、五年前にウルトラマンとして戦い、エンペラ星人を退け世界を救った先輩。

丁度春馬と同年代くらいだと思われるこの少年は、高校生時代の日々ノ未来……と考  
 えていいのだろうか。

(………ね、ねえこれ、歴史変わっちゃったりしない……？)

『落ち着け春馬……まだそうとも限らないぞ』

(どういうこと……?)

『彼が本当に俺達の知る日々ノ未来だとするなら……不可解だと思わないか?』

歴史改変やタイムパラドックス……創作物でよくある展開を想像し戦慄していると、ようやく口を開いた相棒の声に諫められる。

自分よりも幾分か落ち着いたその声音は混乱する頭にも素直に浸透した。

『前にステラが五年前の戦いについて教えてくれたことがあっただろ? それを思い出せ』

そう言われ、想像するのは伊達メガネで知的に装った姉貴分の姿……ではなく彼女が行った特別授業。

多次元宇宙論や過去の戦い……その内容を思い起こす春馬の記憶をなぞるようにタイガは続けた。

『確かに未来はメビウスと一体化してエンペラ星人から地球を守った……けど、お前達の地球に初めて降り立ったウルトラマンはメビウスじゃないだろ』

(ああそういうえば……ベリアルさん、だったっけ)

『ああ。ベリアルはメビウスが来るよりも前に地球に降り立っている。☒ウルトラマン

☒という存在が地球人に認知されたのはその時はずだ』

完結に纏められた問答の中でタイガの抱いていた違和感の正体を悟る。

『……だとしたら、彼がまるで初めてウルトラマンを見たような反応をしているのはおかしくないか』

かつてベリアルが降り立った地もここ内浦だったはずだ。

人類にとって初めての光の巨人や怪獣との遭遇。いくら幼き日の出来事とはいえ、それを内浦に住まう未来が知らないはずがない。

(じゃあここはベリアルさんが地球に来るより前の時代ってこと?)

『……その説も捨てきれはしない』

先輩方や仲間達からある程度の情報は得ているとはいえ、それでも知識不足は否めない春馬に反しタイガはある程度状況の整理ができているのか。

まだ少し迷いを含むものの、それでもある一つの結論には辿り着いているようだった。

『これは、あくまでも仮説だけだな——』

「まあ親戚かどうかはこの際どうでもいいや……未来」

捻りだすように春馬の頭の中でだけ響いた声は、また彼によって遮られた。

仙道陸とか言っていたか。ステラの話の中には出てこなかったため知り得ていなかったが、この不良染みた彼は未来の幼馴染らしい。

「何度でも言うけど、別にお前がウルトラマンに憧れようが俺の口出すことじゃねーし、その気持ち自体は尊重してる。けど、現実と空想の区別くらいつけろよ」

「え……？」

そんな彼が口にした言葉は、自分達の抱いていた疑念に答えを出すようなものだった。

「追風も親戚だつてんなら何か言つてやつて——」

「あの……ウルトラマンが空想つてどういう……？」

「え？ なに？ お前もそう言うクチ？」

未来に変なこと吹きこまれたか……などと氣遣わしげな顔で陸は手早く取り出したスマートフォンで何か操作を始める。

『……やつぱりな』

直後に差し出されたその画面に映されたものを見て固まる春馬と、腑に落ちたように零すタイガ。

『春馬、こっちは過去の世界なんかじゃない』

今度に紡がれた声は先程のそれとは違い確信に満ちたものだった。

スマホに表示されたテレビ番組としてのウルトラマンのページ。それはある一つの事実を示しており——、



『……俺達のいた世界とは別の宇宙——ウルトラマンが、物語の中にしか存在しない世界だ』

—— 『あなたの力が必要なのに』

普段通り……それでも少しずつ変化しつつあった日常に差したのは知らぬ声だった。

—— 『今、とある世界に危機が訪れようとしている。もし今度の世界も☒奴等☒の手に落ちたら、あの子は……』

雪のように白く透き通り、触れれば溶けて消えてしまいそうな弱い響き。

そんな声に引き寄せられるように身体はその主を探すが、目に入るのは自分達の部室とその仲間達だけだ。

(…タイガ、何か言った?)

『ん? 別に何も言っていないぜ?』

(じゃあタイトスカフーマ?)

『いいや、私も違うな』

『俺でもないぜ……けど、何か聞こえたのは確かだな』

体内に宿る相棒達に問い、今の声が聞き間違いでなかったことを改めて認識する。

だが同じ部屋の中で談笑する少女達は誰一人として反応を見せていない。決して大きな声ではなかったが、それでも聞き取るには十分だったのにも関わらず、だ。

まるで春馬達だけに直接語り掛けてきているような……そんな感覚がする。

——『お願い、勇者達を目覚めさせて……それができるのは、あなたしかいないの……!』

「っ……!」

最後に顔を出した誰かが閉め忘れたのか、開かれたまま放置されている部室の扉。

その奥から春馬達を見つめるのは、今間近にいる少女達がステージに立つ姿を連想させるような衣装を纏う……一人の、少女だった。

『なんだアイツ……』

『少なからずこの学校の生徒ではないのは確かだな。かすみ達にも認識されていないよ  
うだ』

『どちらにせ怪しいってことに変わりはないねえな。どうする春馬』

タイガ達は揃ってその少女を警戒しているようだったが、春馬にはどうも、少なからず彼女が敵意を向けるべき相手ではないように感じられた。

縋るような、何かを願っているような……そんな表情は、あの日の☒妹☒と重なった。

「つ……、待って!」

「ハル君……!?!」

「ちよ……、先輩?! どこいつちやうんですかあ?!」

まず何をするにも一先ず対話だ……そう思い一步を踏み出した途端、逃げるように遠ざかってゆく少女。

見失っちゃいけない。天啓のようなそれに突き動かされるように廊下へと飛び出した春馬は、幼馴染や後輩の声も余所に彼女を追った。

「全然追い付けない……」

教員の持つ書類を吹き飛ばし女生徒のスカートを巻き上げ、至る所に二次被害を生みながら突風のような速度で校内を駆けるが、眼前にいる少女との距離は全く縮まらない。

遠ざからず近づきもせず、一定の距離を保ったまま繰り広げられる追いかけっこは不気味の一言だった。

『こうなったら挟み撃ちに……ステラ達はどこだ?』

「姐さんなら何か考え事があるからパフエ食べに行くつて……」

『肝心な時に限つていねえなあ姉貴分は！』

「まあ、未来さん達と再開してからなんか様子変だったし……」

『言つてる場合じゃねーぞ春馬……アイツの足元見てみる』

フーマの呼びかけに応じ彼とシンクロさせた視線の先には少女の赤い靴。

これほどの速度で移動しているのにも関わらず、その靴を履く足は全く動いてはな  
い。

「浮いてる……?」

『なんだ……ユーレイつてやつか?』

『敵意があるようには思えんが無視もできんな。このまま追おう』

仮面の悪魔や袂を分かつた兄妹達とはまた違った得体の知れなさがある。

けれどその中で微かに瞬く光の気配。感じ取ったそれに引き寄せられるまま、春馬は  
四肢を動かした。

「え……霧……?」

『妙だな……先程まで快晴だったはずだが』

追いかけるまま校舎を飛び出し、その刹那に感じ取った別な違和感にようやく足を止  
める。

視界を白が満たしている。自分達の学び舎を覆うように発生していたのは周囲に立ち並んでいるはずのビルの群れすらも目視できないほどの濃霧だった。

『これもあの少女の仕業なのか……?』

「そうだ……あの子は!？」

一拍遅れてここまで来た理由を思い出すが、その時には既に追っていた彼女の背中は見ると影もなかった。

代わりに視線が射止めたのは、その少女よりも遥かに巨大な、白霧の向こうで揺らめく巨影だけで――、

『ツツツ――!!』

爆音の如き咆哮に痺れるような感覚が肌に走る。

直後に揺れる大地。間違いない、あの存在が出現する時のものだ。

『今度は怪獣かよ……次から次へと……!』

『あの少女の事も気になるが迎撃が優先だ……行くぞ春馬』

「うん……タイガ!」

『ああ!』

「『バディイイ……ゴ——ッ!』」

\*\*\*

「……この後、気付いたらタイタス達ともはぐれてて、こつちの世界に来了ました」  
迎え入れられた未来の部屋の中で、ここに至るまでの顛末を語る。

ここが別世界である以上正体を隠す意味は薄い。ウルトラマンであることを悟られているも同然の彼には手っ取り早く素性を明かしてこの世界の情報を得た方がいいだろう……というタイガの判断だった。

「……って、聞いてました?」

だが当の未来は上の空と言うべきか、興奮冷めやらぬ様子で春馬に視線を注いでいる。

「ああいや、本当にいたんだって思うとなんか感慨深くってさ……」

『本当も何も……さつき実際に俺達が戦つてるところを見たばかりだろ』

「うおおおッ!」

『うわっ!? な、なんだよ急に……』

零体となつて春馬の肩に現れたタイガに対しまたも一リアクション。何とというか忙しい人だ。

「ああ悪い悪いまた……まあとにかく、春馬達は別の世界から来た、つてことでいいのかわかんない?」

「俺達もまだよくわかつてませんけど……多分そういうことかと」

「……あと敬語じゃないくていいぞ。同い年なんだろう?」

「いやいやそう言う訳には……! まあ俺の気の持ち用なので気にしないでください」

「いや気になるんだけど……まあいいや。それより聞きたいことがあったんだ」

「聞きたいこと……?」

「うん……春馬達はさ、メビウスつてウルトラマン、知ってるか?」

『「っ……!?!」』

一転して切り替わった未来の雰囲気になんかと思えば、いきなり飛び出したその単語にタイガと揃つて驚愕する。

『なんで、この世界のアンタがその名前を……』

「っ……、やっぱり知ってるんだな!」

抱く疑問はタイガと同じだった。

この世界においてウルトラマンはテレビの中のヒーローに過ぎない……それもこちらの世界でもウルトラ兄弟の一人として数えられている。ウルトラマン。ただ一人。

そんな彼がメビウスのことを、まして自分が別世界ではウルトラマンであったことなど知る筈もないのに。

「今春馬達の話に出てきたその女の子、少し前に俺の前にも現れたんだ。それからなんか、変な夢見るようになってさ、俺がメビウスっていうウルトラマンに変身する」

『ッ………』

「タイガ……これって……」

その後も続けて未来が語った内容は、暗雲に閉ざされた世界に、暗黒の巨人……そして未来と九人の少女の光が合わさって変身した黄金の巨人。

その悉くが、春馬が姉貴分やタイガ達から聞いた五年前の戦いと一致する。

『俺達の世界とこの世界の未来の記憶が繋がりは始めているのか……？』

「そう言えばあの子、勇者達を目覚めさせて……とか言ってたよね？ この世界に危機が迫ってるのかも！」

『ああどうやら……俺達がこの世界に飛ばされたのは偶然じゃなさそうだな』

改めてあの少女の言葉を反芻する。

まだ何もかもが不明瞭な現状だけでも、少なくともこの世界において自分がやるべ



きこことは……見えたのかもしれない。

「俺にしかできない、か。……タイガ」

『……もう止めやしないさ』

一旦は伏せておこうと決めたこの事実も明かした方がいいと揃って判断する。

どんな影響が出るかわからない懸念もあるが、少女の言葉に従うのならば伝えるべきことなのだろう。

「…ウルトラマンメビウスさんはタイガの兄弟子で、俺達の世界でいう五年前、とある人と一緒に戦って世界を救った英雄です」

『そのメビウスと一緒に戦ったのが日々ノ未来……俺達の世界の、お前だ』

「え……」

世界や時空の垣根すら超えて、点と点が線で結ばれる。

歯車は今まさに……動き出そうとしていた。

## 5話 輝きとその陰で

閉めたカーテンの合間から漏れる陽光に意識が呼び起こされる。

普段は全身に押し掛かってくるはずの倦怠感も、この日ばかりは沸き立つ情動に掻き消されていた。

「……」

床に敷かれた客人用の布団の中で未だ寢息を立てる彼を視認し、昨日の出来事、そして昨夜の言葉が現実であったと改めて認識する。

——ウルトラマンメビウスはタイガの兄弟子で、俺達の世界でいう五年前、とある人と一緒に戦って世界を救った英雄です

——そのメビウスと一緒に戦ったのが日々ノ未来……俺達の世界の、お前だ  
一夜を経てもなお、身体の奥底で燻る熱が収まらない。

この感覚を何と呼ぶべきなのか、期待、高揚、不信……そのどれでもあつてどれでもない、不可思議な感覚。

少なからず確かなのは、彼等にとってあの言葉が、紛れもない真実だということ——

（あの怖い人もいる……よね……？）

『お前がそんなでどうするんだよ……』

先行く未来の背中を少々委縮しながら進む。

とある行事に向けて友人達と集まりがあるから春馬にもついてきて欲しい、という未来の頼みが故だった。

『…元の世界に戻る方法、探さなくていいのか？』

（うん……今は、この人達といるべきだと思うんだ）

この世界と春馬の元いた世界とでどの程度時間の流れに差があるのかわからないが、戻った際の心配はしなくていいという確信が何故だかあった。

今はこの世界に留まり、迫る危機を退ける……それが自分がここに飛ばされてきた理

由なのならば果たしたい。

きつと☒あの人☒だつて、こうするだろうから。

「……………どうかしたか？」

「ああ、いや……………」

意図せず流してしまった視線の先で未来と目が合つてしまう。

胸の内で抱いていたことが思わず口から出かけたが、その直前で飲み込んだ。

『……………なんつーか、思つてたより落ち着いてるよなお前。もつと興奮するもんかと思つてたぞ』

「ちよつとタイガ、失礼だよ」

「いいよいいよ、気にしないから」

結局タイガが代弁してしまつたことによつて無駄に終わることになるが、受け答える未来には何か含みがあるように思えた。

「…落ち着いてる訳じゃないよ。実際、内心じや凄く興奮してるし混乱もしてる……………でも、だからといって蔑ろにしていい訳じゃないだろ？」

「え……………」

「約束したんだよ。夢とか、やりたいことができたら全力で応援するつて。アイツにとつては、今がその時かもしれないからさ。……………だから、昨日春馬が言つてたあの話、少

し待ってもらってもいいか？」

少しだけ頬に朱を差しながら向けられた真っ直ぐな瞳。

それをされるとNOとは言えないのが性なのは自分自身が一番わかっている。

「…それが、☒スクールアイドル☒…：…なんですか？」

「うん…：…バカみたいな話だとは思ったけどさ」

この世界において未来はウルトラマンでも何でもない一介の高校生。迫る危機を退けなければいけないとは言え、そのために彼の生活や日常を蔑ろにする気は元よりなかったが…：…一つ、何かに動かされるように問う。

そんな春馬に、俺が言えたことでもないけど、などと笑いながら未来は答えた。

「だからできる範囲でいいから、春馬の力、借りてもいいかな？ 注文多くて悪いとは思うけど…：…」

「悪いだなんてそんなことないです！ 手伝います！ むしろ手伝わせてください！」

食い気味にその手を取って応じた。

昨夜未来との話の中で、この世界ではスクールアイドルすらもテレビの中の架空の存在であることを知った。

同時に春馬が元いた世界ではスクールアイドル達の手伝いをしていることを伝えたことで未来から協力を依頼されたのだが…：…そういうことならば貸す力は惜しむまい。

「それでその子っていうのは……？」

「ああ、ここの娘なんだけど……」

「おお？　なんか騒がしいねー？」

未来の家から徒歩数分もない距離にあつた昔ながらの情緒を感じさせる旅館。

その正面口から顔を見せたみかん色の髪を揺らす少女を視認した途端、あれだけ燃え盛っていた思考と心が真つ白になる。

「つて、未来君。その子誰……？」

「俺の親戚。追風春馬つて言うんだけど——」

全てが動き始めた日……いや、再び動き出したあの日、自分は二つの運命的な出会いをした。

その一つがタイガとの出会い。彼との出会いがあつたから今自分が☒追風春馬☒としてここにいると言つても過言ではない。

そしてもう一つは——、

「で、コイツが幼馴染の高海千歌。話に出したのもコイ……つて、春馬？」

あの日幼馴染と見上げた巨大モニターの中で瞬いていた輝き。

その輝きに触れスクールアイドルに触れた。その中で出会った人達と色があつた。

その出会いをくれたのがスクールアイドルグループ☒Aqours☒——今日の

前にいるのがそのリーダーであった高海千歌であると理解した頭は、またも驚愕の叫びを全身から上げさせた。

「うおおおおおおおツツ!!」

「うええ!!? なになにいきなり!」

「ちよ………未来君? なんなのこの人!」

「あはは………」

曜に梨子、とんでもなく興奮した様子で彼女達の手を取っては上下に振る春馬を前に苦笑いする。

何でも春馬の世界において千歌曜梨子の三人は彼がスクールアイドルに興味を持つきっかけになったグループのメンバー……とのこと。本当にどうなっているのだろうか向こうの世界は。

「何言ってるのタイガ! これが興奮せずにいられる!」

「ちよつ……ちよつ……！　ちよつとこつち来い春馬」

タイガにも諫められているのか、遂には周りには認知されていない体内の相棒と語り始めた彼を慌てて曜達から引き剥がす。遠巻きから殺気を送ってくる野郎二人の視線が痛かった。

「落ち着けて、さつきも言ったけど春馬の世界の千歌達とは別人だから、別人！」

周りには聞かれぬよう耳打ちで繰り返し言い聞かせる。この説明をするのも何度目だろうか。

ともあれここらで一度落ち着かせないと春馬に振り回されているだけで一日が終わってしまう。

もうあまり時間もないのだ。早くしないと春馬を連れてきた意味がなくなる。

「興奮するのもわかるけど今は頼むよ、レクチャーしてればアイツ等とも話せるだろ」

「……そ、そうでした……！　つつい……」

「ん？　なんかやんのか追風」

「ああ、うん。実は春馬、ダンス部……みたいなもののマネージャーやってるらしくてさ。それでちよつと千歌達の演舞の練習手伝ってもらおうと思って」

昨夜春馬との話の中でそちらの世界ではスクールアイドルやラブライブすらも実在することや、彼が自身の学校で☒スクールアイドル同好会☒なるものに属していること



を知った。

そこで実際のスクールアイドルのすぐ近くにいる春馬なら、千歌達の手助けができるのではと協力を頼んだ次第だ。

「へえー……、どこの学校だよ」

「あ、えっと、東京の虹ヶ——」

「東京ッ!?!」

まだ陸が怖いのか、若干縮こまりながら答えた春馬の声を更に大きな声が遮った。

「東京ってあの東京!? 東にある都の!?!」

「何の説明にもなってるねえぞ」

「陸ちゃんは黙ってて! すごい……そんなところの人が手伝ってくれるなんて奇跡だよー!」

奇跡のスケールが小さくないか、と喉まで出かけたが陸同様何か言われそうなので黙っておく。

まあでも実際、春馬がここにいることは奇跡のようなものなのだが。

「…てか、桜内兄妹も確か東京からこっち来てたろ。なあ遥」

「…まあ、そうですね」

「そう言えば理由聞いたことなかったっけ。梨子ちゃん達はどうしてこっちに引越

てきたの？」

陸と曜に続き未来も桜内兄妹に視線を向ける。

千歌ほどではないが未来にも東京への憧れのようなものはある。そんな場所からわざわざこの二人が越してきた理由は確かに気になった。

「……」

「……遙？」

「お、お父さんの転勤！ だから家族皆でこっちに引越してきたの！」

が、直後に顔を見せた別なものにその興味は掻き消される。

梨子の返答に千歌と曜はへえー、だの勿体ない、だのそれぞれリアクションを見せるが、一瞬間に影が差したのを見逃していなかった陸と共に顔を見合わせる。

「こっちでは何かされてたんですか？ 梨子さんならピア——」

「あーもうそっちはいいから追風。とりあえず具体的にコイツ等が何すりやいいか教えてやってくれ」

「そうそう、さつきも言ったけどあんまり時間ないんだ」

一先ずこの話題は避けた方がいいと判断し、慣れたコンビネーションで春馬の言葉を遮っては元の話題へと戻す。

「あ、えーっと……、俺自身が歌って踊ってる訳じゃないのでハッキリとしたことは言え

ないんですけど、俺のいるところでは皆、何を表現したいとか、何を伝えたいとか、そういうテーマを決めるところから始めてました」

「テーマかあ……」

「はい！ 私はμsみたいな感じにしたい！」

「それがふわふわしすぎてから困ってるんでしょ……」

「あはは……。まあそれでテーマが決まったら、その後は曲とか歌詞、衣装を決めて……」

「曲……」

「そう言えば、曲って誰が用意するの？」

不意に浮上した曜の疑問に答える声はなかった。

全ては私が決める！と言わんばかりだった千歌すらもこの時ばかりは動きを止め、誰かが答えてくれるその瞬間を待っていた。

「……そこも決まっていなかったんだな」

「すまん……千歌が理想並べるばっかで具体的にどうするかを全く言っていなかったもんでな……」

てつきり未来が顔を出していない間にそれくらいは決まってるものかと思ってたが、まさかここまでだったとは。

千歌の無計画さは昔から知っているつもりでいたが……事態は思ったよりも深刻らしい。

「どうすんだよこれ。当日袋叩きにされんぞ」

「……とりあえずそこ決めるところから始めようか」

「じゃあ私が衣装作るであります！　ちよつと懂れてたんだこういうの！」

「だったら私が歌詞書くよ！　μsのスノハレみたいな作るんだー！」

殆どノリと勢いではあるが着々と役割が決まってゆく。

そして最後に残った役職は、自然と最後に残った彼女へと割り振られ……、

「という訳で梨子ちゃん作曲よろしく！」

「ちよつと！　二人ができないこと私に押し付けてきただけじゃない！」

「えーでも……、確か梨子ちゃんの部屋にピアノ置いてあったよね？　てつきりこつち

来る前は音楽やってたものかと思ってたんだけど……」

「っ……」

弟の次は姉か。

無理矢理すぎる千歌の采配に口を尖らせていた梨子だったが、そのことが指摘された瞬間に押し黙ってしまふ。

「……だったら、俺が曲作りましょうか？」

「え？」

不穏な臭いが漂い始めた空気を変えたのは春馬の一言だった。

流石に今度はその異変に気が付いたのか、留めていたものを絞り出したかのようなそれを逃すまいと未来は口を動かした。

「えっと、お願いしていいのか？」

「簡単なのしか作れませんけどそれでいいなら……。梨子さん、ピアノお持ちならお借りしてもいいですか？」

「え、ええ。構わないけれど……」

「ありがとうございます！」

取り急ぎ、不安定さが否めないまま築かれてゆく基盤。

一抹の不穏さと不安を孕みながら、滅茶苦茶な挑戦は次の段階に進もうとしていた。

## 6話 追憶と予感

パイプ菅の張り巡らされた薄暗い通路。

コンクリート製の壁や床に反響する警報音や赤い光は、この施設において非常事態を示すものだ。

『ハヤテ達が目標をそのポイントまで誘導している。確保はそちらのタイミングでいい』

「了解」

徐々に近づいてくる床を叩く音と銃声からそろそろと判断し身構える。

どんな奴かは知らないがよりにもよってここに侵入するとは運がないのか、はたまた能がないのか。どうであれ奴を確保するという自分の役割に変わりはない。

「行っただー！」

仲間の声と合図の発砲音。

同時に視認した影が真下に至ろうとしたそのタイミング。潜んでいたダクトの通気口を蹴り飛ばすと同時に奴へと降りかかった。

「だああらっ!!」

『ッ…………!』

死角からの強襲。

だが完全に不意を突いたと思ったその襲撃は、まるで予見されていたかのようにひらりと回避されてしまう。

『全く単純で能のない…………やはりこの世界を選んで正解でしたね』

「んじゃ、その無能連中のもんパクるお前はそれ以下か？」

瞬時に床を蹴り飛ばして再び取り押さえに掛かるが、またも触れることすら叶わず壁と衝突しかける。

「何に使うつもりだ、その☒スパークドールズ☒」

『貴方達を知る必要はありませんよ。無能な人類に変わり我々がこの技術を有効活用する…………悪い話ではないでしょう』

「ぞけんな! どうせろくでもないことに使うんだろうが!」

威勢よく返したはいいものの、人間の肉体だけでは奴を捉えることは不可能だろう。

スマートな甲冑を纏ったような外観に隙を伺わせぬ佇まい…………まさしく強者、と呼ぶべきなのだろうか。

「まあ、どうだっていいや…………ここで捕まえりゃいいだけの話だ」

『それは……!』

腰から特殊な形状を取るデバイスを手に取り、見せつけるようにして翳す。

「無能以下になる覚悟はできたか……? 行くぜ!」

『そうか……この世界にも——』

直後に溢れ出た眩い光。

機械的でありながらも全てを照らすような輝きが、闇の先へと伸びていった。

「すみません長居しちゃって。ピアノ、ありがとうございました」

「ううん。こつちこそ作曲任せちゃってごめんさい。千歌ちゃん、早く歌詞掛けるといいわね」

少し前まであつた喧騒と音色を遠ざかる足音が運び去つてゆく。

やがてそれが玄関口の向こうへ消えていくのを確認すると、桜内梨子は張り付けてい



た笑顔を解いた。

「……」

静寂の舞い降りた自室の中で一際目立つ黒いピアノ。

以前は張り付くように弾き続けていたことを思い起こしつつ、その屋根の表面を滑らせた指に付着したほこりを一吹きで払う。

「……楽しそうに弾いてたなあ」

腰を下ろしたピアノ椅子にはまだ少し温もりが残っていた。

その熱に突き動かされるように唯一埃の払われていた鍵盤蓋を開くと、触れることをやめた白い輝きがその姿を見せた。

久々に弾いてみようか。

どうしてそう思ったかはわからない。

ただ彼の演奏を見て聴いたあの時から、胸の奥で何かざわついているのだ。

「っ……」

指の腹に触れたひんやりとした感覚を込み上げてきた何かと一緒に押し込む度に奏でられる音。

ひどく懐かしく感じる演奏が、僅かの間部屋の中を満たした。

「思ってたより弾けた……身体は忘れてないのかな」

懐かしい感覚や驚きと共に浮かぶのは彼の演奏。

技術や演奏の質、弾いた曲の難易度だつてそうだ。その全てにおいて自分の方が上……けれど何故だか負けている気分がする。

表面的なものじゃない。もつと内面的な何かが、彼にはあつて自分にはないのだ。

「……姉さん？」

その答えはすぐに、いや、既にわかつていた。

けれどそれを口にするよりも早く、意識はいつの間にか部屋の入り口にいた弟へと向けられる。

「遥……どうかした？」

「いや……あの人達帰つたはずなのにピアノの音がするから……。もしかして弾いてた？」

「う、うん……なんかちよつと、弾いてみようかなつて思つて」

咄嗟に鍵盤蓋を閉じつつ遥の顔色を伺う。

廊下の窓枠から差すぼんやりとした後光のせいでハッキリとはわからないが、少なからずよいものでないのは確かだった。

「何か作業の邪魔になってたのならごめんね？ 今日はずもうやるから」  
「ううん。本当にちよつと、気になっただけだから」

姉弟間のものとは思ひ難い、ぎこちない会話と空気が続く。

互いに互いの秘めた何かを恐れている。こちらに越してきてから幾度か訪れたこの瞬間が、何よりも苦手だった。

そして、無限にも感じられた数拍の沈黙の後――、

「……姉さんは……ピアノ、続けたかったの……？」

遂に言ってしまったと思った。

答えなんてわかってるから、その上で姉がどう振舞うかなんてわかりきっているから。だから胸の内で抱えたままにしていたのに。

作曲を割り振られた時に姉が見せた顔、そして春馬の演奏を見る姉の様。

それを見て、やはりと確信してしまったから、いつそのこと、直接その口で言ってもらいたいのかもしれない。

けれど、言つてはいけないことだったのは確かなんだ。

これを聞かれれば、姉はあの時のことを想起しなければいけない。姉にとって甚しい記憶に他ならないあの時を。

そうなる事態を招いた自分にそれを掘り起こす権利はない。そのはずだったのに。

「…そう、見えた…？」

問い返してきた姉を見て、己の行為を呪う。

頷きも、首を振ることもしないまま、また沈黙が流れた。

「梨子—— お友達よ——」

「あ…、は——い——」

そんな苦しい時に終止符を打ったのは母の声。続けて聞こえたのは千歌の声か。

こんな時間に何の用があるのかは知らないが、一旦とは言えこの会話と瞬間から抜け出せて安堵する。少し苦手意識のある先輩だったが、今回ばかりは助けられたと言ふべきか。

「……」

薄暗い部屋の中でも黒を主張するピアノを見下ろしながら、先程聞こえてきた姉の演奏を思い出す。

同時に呼び起こされるのは、いつの日か絢爛な舞台の上で音を奏でていた姉の姿。

綺麗だった、美しかった……何より、楽しそうだった。

そんな輝かしい光景が蘇る度にそれを奪ってしまった痛みとやるせなさが込み上げてくる。

「遙く〜ん!」

「……?」

その過去から逃げるように部屋を出ると、丁度階段を駆け上がってきた千歌と視線が合った。どうやら自分にも用があるらしい。

たまに未来や陸、曜の幼馴染に対して向けられる甘えるような声は……どこことなく、嫌な予感を醸した。

「いきなり押しかけてきて悪いとは思っただけ……ちよつと頼まれてくれない?」

「……はい?」

「あらく、やつぱり似合うじゃない未来君」

「全つ然嬉しくないです……」

容姿通りのおっとりとした笑みを向けてくる千歌の姉——高海志満たかみしまに未来が向けるのは顔を赤らめた苦笑い。

幼馴染の姉とは言え大人の女性。未来だつて健全なる男子高校生なのだしこんな至近距離で身体を弄られればドギマギだつてするものだが……今この時ばかりはそれにも勝る何かが破裂寸前なほどに膨れ上がっていた。

「おおく、やつぱ可愛いじゃん未来——それに春馬君……だっけ？ 君も中々似合つてるよ」

「……どうも」

もう一人の千歌の姉——高海美渡たかみわたに弄られている春馬と互いに悲壮な視線を向け合う。彼の中でタイガが爆笑している声が聞こえるような気がした。

人手が足りないから旅館の手伝いをして欲しい。もしかしたらそんな千歌の頼みごとを聞き入れたのが全ての間違いだったのかも知れない。

「……凄くデジャヴが……」

「……春馬もか？」

「前に色々ありまして……未来さんも？」

「小さい頃の話だけだな。……まさかこの年になってこんなことする羽目になるとは思わなかったけど」

形や経緯こそ違えど、共に同じ傷を負った過去を持つ者同士心が通じ合うような感覚がした。全くもって嬉しくはないが。

「…まあ、陸の奴に見られてないだけまだマシか……。千歌に口滑らせないように言つとかないとな……」

「あら？ さつき板前さんが仙道さんのところにお魚注文したからそろそろ陸ちゃんが届けに来るとか言つてたけど」

「はいいッ!？」

こうなつてしまった以上は仕方ないと無理矢理抑え込んだ羞恥心が志満の一言で勢いを取り戻してしまふ。

そして噂をすればなんとやら、そういう奴というのは最悪の瞬間に現れるもので。

「ういーす。例のブツ届けに来ました」

「なんか運び屋みたいになつてるよ」

玄関口の方から聞こえてきた会話に血が凍るような悪寒を覚える。しかも声からして曜もいる。

予期せず訪れた事態に未来が戦慄きを見せていれば、美渡は意地悪い笑みを浮かべて





「まあまあそんなに照れることないじゃん未来君！ ほら、可愛いよ〜」

向けられた曜のスマホには未来が顔全体を真っ赤にした瞬間が切り取られていた。身に纏った簡素ではあるが色彩豊かな着物も、それっぽく見せるための化粧も志満に施されたものだ。

まあ、要するに女装させられているのである。

「くはは…腹いて…。んで、何がどうしてこうなってる訳よ」

「…千歌に頼まれたんだよ。晩飯御馳走するから旅館手伝ってくれって」

「あー、そういうや漁港祭の季節は毎年そんなだったな」

漁港祭は県外からも人が集まるため、夏というシーズンも相まって千歌の実家のような旅館にとつては繁忙期なのだ。

加え市役所勤めである未来の両親もこの時期は忙しく、数日家に帰ってこれないことも珍しくない。

よって食事や洗濯等は自分でこなさなければいけないという面倒事が付き纏う。勿論そのこともあつて春馬を泊められたので一概に悪いことばかりとは言えないが、今回はそれを千歌に利用された形になるだろう。

「こつちも終わったよー…って、曜ちゃん達も来てたんだ」

その千歌の声と共にガラリと隣の部屋に繋がる襖が開かれ、同じく女装させられた遥

が死んだ顔で現れる。

既に羞恥心の向こう側へと到達してしまったのか、最早陸達に目撃されてしまったということも気に留めていないようだった。

「遙……別に無理しなくていいのよ？」

「いや……いいよ、もう……」

未来が言うのもアレな気はするが、お揃いの着物を着た梨子と並ぶと遙は妹としか思えないというのが正直なところだった。

隣にいる春馬も中性的な顔立ちをしているし、かくいう未来も男らしい容姿をしているかと言われればそうではない。

残念なことに自分達は女装が似合う条件を満たしてしまっているのだ。

「まあいいんじゃないかねーの？ お前等は野郎にしちゃ可愛い面してんだしよ」  
「だから嬉しくないんだよ……！」

実を言うと少しコンプレックスなこの容姿。女装も含め弄られてあまり気分のいいものではない。

ただそれは陸も理解しているのか、特にそれ以上は言うことなく玄関口に足を向ける。

「とりあえずやるからにや頑張れよ。一回決めたらやり通すのがお前だろ」

「あれ、陸帰っちゃうの？ 私達も手伝って行こうよ」

「そ、そうだ陸！ お前も俺等と——」

「おい！ 陸来てるのか？ いるんなら厨房手伝ってくれ、手が足りねえ！」

今がチャンスだとばかりに曜に続いて陸もこちら側に落とそうとするが、忙しさゆえか罵声響く厨房から届いた声に早くもその目論見は打ち砕かれてしまう。

「つー訳だ未来……悪いな」

「ぐっ……！」

微塵もそう思っていないであろう邪悪な笑みを張り付けたまま戦場へと赴く陸の背中を見送る。

その始終を見守っていた春馬達の表情には、哀れみと同情の色が滲んでいた。

## 7話 集いの帳

戻れぬ道を進むほど、何か零れ落ちてゆく感覚がする。

それでも止まれない。壊れたブレーキを握りしめながら、ただ心を痛め続けるだけの旅だ。

暗く閉ざされた闇の中で、独り泣く少女がいた。

冷酷な世界を恨んだ、理不尽な現実を憎んだ……そして自分の非力を呪った。

旅の中で幾度となく見たその景色は、消えることなく私に刺さり続ける。

どうして夢など見てしまったのだろう。

どうしてそれを人は繰り返してしまふのだろう。

未だ答えは見つかからぬまま、願いは果たせぬまま、また私はその場所へ至る。

もう一度、あの時を取り戻すために――、

「……」

薄明な光の瞬きを感じ瞼を開く。

ひどく懐かしくもあり、また厭わしい。何にも勝る不快感が広がってゆく感覚。かつて抱いた羨望も今となっては煩わしきの塊でしかない。

ダメだ、冷静になれ。

込み上げてくる逆上の炎を堪えるように掌を絞る最中、また別の気配を感じ視線を上げた。

『……おや、お休みになられましたか』

その果てを伺わせぬ薄暗い縞瑪瑙の空間の中では最早その存在も異質とは映らない。

蝙蝠と甲冑が一体となったような様で佇むそれは手の中の何かを弄びながらこちらへと首を垂れる。

「……戻ってたのね」

『ええ。少々トラブルはありましたがいいものが手に入りましたよ』

そう言つて怪物の人形のようなものを掲げて見せられる。

どのような代物なのかにさして興味はないが、手渡されたそれからは微かに命の鼓動が感じられるようだった。

「……トラブルって?」

『なに、ただ想定外の出来事だったに過ぎません。我々の目的を脅かすほどでは——』

—、  
』

鷹揚に言つて見せるが、その言葉が耳に入り込むことはなかった。

その背後のさらに奥。自分達以外は存在し得ない空間で白く揺らめいた少女の姿。

見紛うはずもない。彼女は——、

「かえ——」

縋るように手を伸ばしたその刹那、焦がれ求め続けた少女の顔は波紋のように消えてゆく。

残響したその波は瞬く間に広がってゆき——やがて空間に穴を空けてはある者をこの場に召喚した。

『見つけたぜ蝙蝠野郎！ 盗ったモン返してもらおうか！』

喧しい声と共に姿を見せたのは一体の巨人。

サイバーチックなその身には似つかない白銀の鎧を纏い、鬼気立った様子でこちらへと猛進してくる。

『馬鹿な……、なぜこの空間にアクセスが……!?』

トラブルとは奴のことだったのか。だが仮に時空を超える力を持っていたとしても

ここに侵入できるのはおかしい。

まるで何かに導かれるように——その末に至るのは、直前までそこに見えた彼女の顔だった。

「……まさか……」

違う、そんなはずはない。

だって、あの子はもう——、

『ソードレイ・クロス・ゼロッツッ!!!』

『チツ……!』

思案する間に迸った眩い光の刃。

空間すらも引き裂かんそれは遅れて放たれた光弾と衝突し————やがて全てを白へと還した。

「皆ありがとー。おかげで乗り切れたよー!」

もう九時辺りを過ぎてしまった頃だろうか。とつぷりと暗くなった夜空を窓枠から眺めつつ、千歌からの労いの声を受けた春馬はようやくやく一息をつく。

(疲れた……色々と……)

『まあ、二度目ともなると中々様になってたぞ春美』

(うう……)

わざとらしくその名で呼んでくるタイガに縮こまる。

やるからには全力に、とあの時以上に女性になりきって振舞ったはいいものの……今思い返すとどうしてこう恥ずかしいものなのか。

「……なんか大切なものを失った気がする」

「……今更ですよ」

その感情は同じく女装させられた彼等とも共有しているらしく、三人並んで夜月を見上げる。

もう二度とするか。今だけは心の声が聞こえるようだった。

「お、終わったかお前等。お疲れさん」



気分と共に動きづらい着物から解放された身体を伸ばしていれば。休憩室の外から声に向けられる。

白い調理衣姿に一瞬誰かと困惑するが、その顔にまで視線を上げれば陸。どうやらこちらに続いて向こうの業務も終わったところらしい。

「お前よく顔出せたな……!」

「まあまあ落ち着けて未来。忙しさだけならこつちのが上だったんだし勘弁してくれや」

「楽しんでたお前と拷問同然のこつちじゃ訳が違うんだよ」

「むしろあの状況で楽しんでた俺を褒めろ。……それより千歌、コイツ等もう飯食ってるのか?」

「ああ忘れてた! ごめん、すぐ用意するから!」

そう言えば元々手伝うことを決めたのは夕飯に釣られてだったか。

働いてる最中は色々な意味でそれどころではなかったもので忘れていたが、それを思い出すと途端に空腹感というのは襲い掛かってくるものだ。

「おお待て待て、だったら丁度いいや。手伝ったお礼に余った食材好きにしていって話だったからよ、テキトーになんか作るから食ってけ。千歌、台所か厨房借りてもいいか?」

「ああうん、志満姉に言えば使わせてくれると思う」

「おう、サンキュ。んじゃちよつくら行つてくるわ」

本人も口にしていた通り、忙しきなら向こうの方が上だったはずなのに疲れを感じさせぬまま陸が再び消えてゆく。

初対面以降どうにも怖い印象が拭えなかつた彼だったが、その一瞬に伺えた表情にはむしろ親しみすら覚えた。

「…仙道さん、料理好きなんですか？」

「うん……繁忙期の厨房に進んで突っ込みに行くくらいにはな」

「ていうか料理できたんですねあの。目玉焼きを炭に変えるタイプだと思つてました」

「いや、アイツ普通に料理上手いぞ。なんか漁港祭で屋台出すのも許可されたらしいし」  
重ねがける未来の言葉に期待感と共に空腹が加速する。

それは訝しんでいた遙にすら胸を膨らませるような表情をさせるものだったが、そう言つた当の未来の顔はどこか浮かないものであり――、

「本当、上手いんだけどな……」

惜しむように、寸刻前まで陸がいた空間に向けて零す未来。

その表情が、次に陸が姿を見せる時まで頭から離れることはなかつた。

「「おお〜」」

数十分後、せつかくなると外に設置されたテーブルの上に並べられた料理に感嘆の聲が漏れる。

結論から言うとう陸の腕は中々のものだった。空腹も相まって身体に染みわたるその味はより美味に感じる。

「すごいや……俺見直しました！」

「なんだと思ってたんだよ俺のこと……でもまあありがとよ」

彼に対し向けていた若干の恐怖心などもうすっかり消えていた。

同好会のメンバーにも度々似た感情を抱くことはあつたが、やはり自分と近い年齢の間がこれだけのものを作れるというだけで感動するものだ。

「……人って見かけによらないもんですね」

「だろ？ このナリで料理趣味は想像できないだろ？」

「揃いも揃って何なんだお前等」

「ちゃんと正直に言いましょうよ二人共！ 確かにちよつと怖い感じはしますけどこの美味しさは本物ですから！」

「フオローになつてねえんだよオイ」

『お前興奮するとたまに訳わかんないこと言い出すよな』

ブツブツ言いつつも空腹には抗えないのか、女子陣含めものの数分で完食。

空きつ腹以上に満たされた心のまま、春馬は陸に輝きを散りばめた視線を向けた。

「ごちそうさまでした！ すごい美味しかったです仙道さん！」

「おーおー、ちよい大袈裟な気もするがさつきから嬉しいこと言ってくれるな追風。あと陸でいいぞ」

「じゃあ俺も春馬で大丈夫です。改めてごちそうさまでした陸さん！」

「すごい……陸ちゃん手懐けてる……」

周りが少しざわつく中、勢いのまま手を取って握手。

未来や千歌達にばかり意識が向いていたが、こうして触れてみると魅力的である。もし元の世界にも彼がいるなら会ってみたいものだ。

「俺、もつと話聞きたいです！ 将来はお店とか開くんですか!？」

だが少し、興奮しすぎて周りが見えていなかったのか。

何気なく口にしたその言葉により、周囲の空気が重くなるのを肌で感じた。

「あー……どうだかな」

途端に陰る陸の顔。

春馬にはそれを伺わせぬよう取り繕ってはいるが、予期せぬことだった故か隠しきれない何か泳ぐ視線を介して伝わってくる。

「あ、陸。もう遅いし、そろそろ帰らないとマズいんじゃないかな。ほら、私達ここから結構家遠いし……」

「……それもそうだな。わりい千歌、勝手に作つといてなんだが片付け頼んでいいか？」

「ああ、うん……」

咄嗟に曜が機転を利かせるが、この空気感は若干の重苦しさを保ったまま残留する。彼女を後部荷台に乗せたまま自転車に跨った陸がそのペダルを漕ぎ始めると同時に、隣立った未来はまた零した。

「……アイツんち、結構昔から続いている伝統的な漁法を受け継いできた家系でさ」

聞けば、本人の意思に関わらず跡を継ぐような期待や重圧が幼い頃から押し掛かっていたという。

料理が好きで、その道に進んでみたい。そんな内に秘めた想いを、未来達幼馴染以外には打ち明けることの無いまま。

「陸は俺等の夢とか目標を笑うことはあつても、否定は絶対しないんだけど……もしかしたら、それと関係してゐるのかもな」

少し前に見た未来の複雑な表情の理由を悟る。

遠く、夜の帳の中に消えてゆく彼の背中が……先程よりもずっと、小さく見えた。

自転車に跨り、昼の太陽が残した暑苦しさを風と共に切り裂いていく。

やはり遅い時間だけあつて海風は爽快感があつて心地いい。

最も、今の内心はそれほど穏やかなものではないが。

「……悪いな、氣い遣わせて」

「ううん、私はただ、本当にそろそろ帰らないとマズいなーって思っただけだから」

荷台に腰掛けた幼馴染と静かに声を交わす。

少し速度を出しているからか、腰に回された腕にはいつもより力が込められ、背中から伝わる柔らかさも増す。体温が上がるような感覚がするのはきつと気温のせいでは

ないのだろう。

「陸さん……」

「……さん？」

「ホントにもう、諦めてるの？」

点々と灯る光を伴った景色が車線に沿って流れてゆく。

しばしそれらを眺めた後、陸は口に仕掛けた言葉を直前で飲み込んだ。

「……お前にはそう見えてるか？」

「わかんない……ずっと一緒にいるのにな」

それが嘘なのはすぐにわかった……いや、互いに互いの意図も本心もわかりきっていると云った方が正しいか。

お互いに気持ちでは知れているのに、自分の言葉で伝えるべきなのはわかっているのに、口にすることが何故か怖くていつもこうやって誤魔化し合う。

結局、もどかしいようなこの感覚と関係にいつも甘えてしまう。

「……」

また無言のまま風と景色だけが流れてゆく。

今に始まったことではないこの無言の空気が何より苦手だった。

進む気はないが、この空気からは逃れたい。そんな身勝手な想いは——また別

な災難を呼び寄せることとなる。

「……んん？」

揃って夜空を見上げる。

別に急に星が見たくなつたからとかそんなロマンチックな理由じゃない。本能的な危機察知とでもいうべきか。

「うおおおおおおツツツツ  
!!!???

現に頭上から悲鳴に近い叫びを上げて落下してくるのは——陸達と同じ人間なのだから。

「なんか空から女の子が降ってくるそこから始まる映画あつたよね」  
「言ってる場合かッ!!!」

次の瞬間には派手な水飛沫を上げて海へと落下したその影を確認すべく、乗り捨てる形で自転車を飛び降り現場へとダッシュ。

一体何故あなつたのかは皆目見当もつかないがとにかく無事かどうか最重要だ。



「おいアンタ！ 生きてっか!？」

波を掻き分けるように進んではぶかりと海上に浮かぶ彼を救出。

年頃は陸と同じ頃だろうか。落下の衝撃で伸びてはいるが息はある。無事な証拠だ。

「何がどうなってるんだよ……おい曜、引き上げんの手伝ってくれ！」

「う、うん……！」

直前の微妙な空気すら忘れ二人で彼を引き上げる。

これがこの少年——後に天地翔琉あまちかけると名乗った彼との出会いだった。

## 8話 もう一人の勇者

深い海底にある意識を照らすように、うつすらと開いた瞼の合間から光が差し込んでくる。

眩しい。初めに認識したそれに続き、耳朶に触れた複数の声から人の気配を察知する。

「大丈夫そうだからまだよかったけど、どうしてここに連れて来る前に救急に連絡しておかなかったの？」

何が起こったのか。意識が暗転する直前までの出来事を呼び覚ましつつ気だるい身体を起き上げる。

その刹那に走った電撃のような痛みが、ここに至るまでの記憶を泥濘の中から引き吊り上げた。

「いやそれが……かなり慌ててたもんで着の身着のまま海に入ってしまった……」

「その……二人揃って携帯がお釈迦に……」

そうだ。X i o のラボから [X] スパークドールズ [X] を盗み出した宇宙人を追って時空

を超え、その衝突の末に落下し意識を失った……ここまでは覚えている。

「あー！ 志満姉え、起きたよー！」

「千、歌……？」

だが気絶していた間のことは何もわかりやしない。

少しでも情報はないかと完全に開いた眼が最初に認識したのは、いつだかに触れた少女の顔だった。

「あら本当？ 丈夫なのねえ」

動揺のままに周りを見回せば、女子らしく飾り付けられた部屋の内装と、ベッドに寝かすつけられた自分を囲うようにしていた数名が視界に映る。

見知った顔触れも見受けられるその中の一人——直前まで銀髪の少女と並び正座姿勢で説教を受けていた柄の悪い少年は……強く、翔琉の記憶に刻まれている者だった。

「陸……!?!」

その名を口にした自分に彼の顔が受けられる。やはりそうだ、見紛うはずもない。

A q o u r s r i ーダー高海千歌……初めに彼女の顔を認識した際は☒内浦☒にまで吹っ飛んできたものかと思つたが、それは少し誤つていたらしい。

だって彼は、自分達の世界の住人ではないのだから——、

「おいおい久しぶり……つてほどでもないか。ともかくまた会えるとは思ってなかったぜ陸」

「……………え？」

(一応)先輩であり戦友でもある彼との再会に少し高揚する気分のまま声を掛けるが、当の本人の反応は想像とは随分と離れたもので。

こちらに向けて首を傾げる姿はむしろ自分のことを知らないとでもいうようだった。

「…あり？ もしかして忘れてません…………？」

「……………かもしれん」

一瞬冗談でも言っているのかと思ったが、その瞳から嘘や悪気といったものは感じられない。つまり本気と書いてマジで言ってる。

「いやいやいや……………確かに人の顔と名前覚えるの苦手とか言ってた気はするけど流石に一緒に戦った奴忘れるのは嘘だろオイ、ウチのラボチームに検査頼んでやろうか？ 俺だよ天地翔琉！ 前こっちの世界に来て宇宙人ぶっ飛ばしただろ」

「なーんで見知らぬ奴にんな心配されなきゃいかんのじゃ……………てかさつちの世界だの宇宙人だの俺にそんなぶっ飛んだ経歴はねえ」

「え、突然時空超えて殴り込んで来たと思つたらまたいなくなつてその後宇宙人共ボッコボコにして組織ごと半壊させた生ける破天荒がお前等じゃねーの？」

「お前ん中でどうなってるんだよ俺せめて人間させろや」

「実質人間じゃねーし大丈夫だろ」

「何も大丈夫じゃねえんだけど!？」

波のような応酬の中で徐々に膨らんでいく違和感。

確かに容姿こそ同じだが、その口調や雰囲気は自分の知っている彼のものとは少し異なる。

「あつれー……、どうなってるんだ……？」

まだ自分と出会う前の彼がいる時間軸に飛ばされてきた可能性もあるがまだハッキリとしたことは何も見えてないのが現状。

ならばもういつそ、核心から迫るべきか。

「ウルトラマンエックスって覚えてないか？ 確か俺以外の奴とも会ったとか言ってたよな……ほら、大地とかいう」

「え……」

何故か視界の隅にいた野郎二人が反応を見せるが、コイツ等は別にいい。ともかくこの問いへの返答で全ての答えが出るはずだ。

「最近流行ってるのかあ？ どいつもこいつもウルトラマンだの怪獣だの……」

エックス自体は知らずとも、ウルトラマンという存在そのものは知り得てい

るような口ぶり。だがその中に緊張感は見受けられない。

そして彼の左腕に銀色の輝きがないことからもう、決まったようなものか。

「おい未来、その辺お前の専門じゃねえの？ エックスってウルトラマン知ってつか？」

「いやそもそも放送されたのはウルトラマンだけ……って、そうじゃなくてだな」

「……」

巡った思考の先で結論を弾き出した瞬間。

意識の他にあった少年の一人に手を取られ、そのまま部屋の外へと連れられようとする。

「……ちよつとついてきて。陸さんも」

自分よりも小柄な、どちらかと言えば愛嬌が勝る彼。

真剣味を帯びたその表情の奥からは、何やら自分と似た波動を感じるようだった。

「……何話してんだアイツ等」

言われるがまま春馬に外へ連れ出され数分。

当の春馬は少し離れた場所であの翔琉とかいう野郎と何か話し込んでいる。わざわざ人を外にまで引き摺り出しておいてどういう了見なのだろうか。

「しっかし何なんだアイツ……ウルトラマンだのなんだの。お前と仲良くできるんじゃないの？」

「……あはは、どうだろうな……」

揶揄い気味に真横へ声を流せば微妙な顔で返される。

「ここ数日奇妙なこと続きた。春馬に翔琉……思えば未来がおかしなことを言い始めた辺りからだったか。」

「……お前、なんか隠してる？」

そんなことを考える折、どこかよそよそしい彼に目線を向けた。

陸の弄りが気に障ったかとも考えたが、未来が自分に向けているのはそれ以外の何かだと幼馴染としての勘が告げている。

「…別に何でもないよ」

「何年の付き合いだと思ってるんだ。今更見抜けねえ俺じゃねえぞ」

昔から未来が□なんでもない□と口にする時は、決まって何かある時なのを陸は知っている。

春馬との絡みも含めここ最近の彼がどこか普段と違うのは薄々察してはいたが、今の反応を見て確信に変わった。

そして恐らくだが、あの天地翔琉の存在が彼にまた変化を齎している。

「最近散々ウルトラマンとか言ってる気がすつけど、それと関係あんのか？」

「……お前俺に対してだけは察しいいよな……」

呆れるように溜息をつきながら、未来が降参の意を示す。

隠すことをやめたからか、その瞳には劣情がハッキリと映るようだった。

「……なんかよくわかんねーけどそっちも決着ついたってことでもいいのか？」

そんな未来が何か続けようとしたその時、話を終えたららしい翔琉の声が間に入る。

タイミング考えろやと視線だけで抗議の意を示すが、本人は察することすらなく己の話へと移ろうとする。一遍シメてやろうかコイツ。

「状況は大体春馬だっけ？に聞いてわかつたわ。やっぱ俺別の宇宙に飛ばされてたんだな」

そしてのっけからまた意味のわからないことを言い始める。さっきはこっちの頭を心配してきたがお前こそが病院に行けと強く思った。

「んでお前は俺の知ってる陸とはまた別次元の陸、と……つたくややこしいのは勘弁だっけの」



「勘弁はこっちの台詞だわ。訳わからん妄言に付き合わされる俺の身にもなりやがれ」  
「すみません陸さん。もう少しだけ怒らずに聞いてください……大事なことです」  
一ミリもこちらに話を理解させる気のない彼に苛立ち身を乗り出しかけたところを春馬に諫められる。

翔琉同様怪しいことに変わりはないのだが、少なからず悪い奴でないことはここ数日の付き合いの中でわかっている。そんな彼に真っ直ぐな目を向けられれば従ってしまうというものだ。

「まず結論から言ってしまうと、俺と翔琉くんはこの世界の住民じゃありません。経緯と形は違うけど、俺達はある脅威に対抗するためにこの世界に呼ばれたみたいですから……ウルトラマンとして」

「またそれかよ……揃いも揃って何なんだお前等。んなこと言われても信じられる訳——」

『信じるも何もないだろ。現に俺がここにいるんだからな』  
「うおおツ!？」

異論の言葉を遮るように眼前に現れた小人に思わず状態を逸らす。

手のひらに乗る程度の透けた身体を陸の目線の高さにまで浮遊させるその存在が人間……いやそもそもこの地球上に存在しないものであるのは明らかだった。

赤と銀の肌に、それを防護するように肩から胸元に掛かるプロテクター、特徴的な二本角。そして何より目を引くのは胸に灯る蒼い輝き。

それは確かにかつて未来に教えられた「ヒーロー」の姿と重なる。

「は？ え？ マジで本物？ なんか知ってるのと随分違う気がするけどマジモンのウルトラマン!？」

『だからそうだって言ってるだ……おいやめろ触ろうとすんな』

そのウルトラマンと思しき存在に手を伸ばしてみるも半透明の身体が示すように触れることができない。まるで幽霊かのようなだ。

「ごめんタイガ……せつかく出てきてもらったのに悪いけど話進みそうにないから戻ってもらっていい?」

『なんなんだこの扱い……』

タイガ。そう呼ばれた彼が若干不本意そうながらも溶け込むようにして春馬の身体の中へ消えてゆく。

「とりあえず……俺達がウルトラマン、っていうのはわかってもらえました? 厳密には一体化してるって言うのが正しいんですけど」

「あー……まあ、なんか現実味は薄いけど何となく合点はあったわ。最近の未来のこととか」

正直まだあのタイガとかいう小人が本物のウルトラマンなのかどうか信じられた訳ではないが、それもここ数日の未来と照らし合わせれば何となく理解できる。

どういった経緯で未来と春馬が出会ったのかは知らないが、春馬がウルトラマンと考えればあの頓珍漢に思えた行動や発言の数々も腑に落ちる。

「…んで、そのウルトラマン達が俺に何の用で？」

「まあ、どつちかと言うとそれが本題なんだけどな」

「さつきも言いましたよね？ この世界に迫ってるある脅威に対抗するために呼ばれたって」

本物のウルトラマンと言うだけで十分驚きだが、彼等の物言いからして恐らく本題はこちら。

「こうしてわざわざ接触まで試みてきたのだ。ただの自己紹介一つで終わるはずがない。」

「こつちの世界に召喚される少し前に、女の子に出会ったんです。その子が言うには、危機を退けるために勇者達を目覚めさせてって」

『その勇者つてのがお前等かも……って話だ』

身構えていれば、春馬の言葉を継ぐ形でタイガがそれを告げてくる。隣で未来が唾をのむ音が聞こえた。

伝わってくる重い雰囲気はそれが真実であるかのように思わせてくるが……にわかには信じ難い話だ。

「何度も疑うようで悪いけど、流石にそれはねえだろ。お前等がウルトラマンだとしても、俺と未来はただの一般人だぞ」

「この世界では……だけどな」

反論する陸に次に返したのは翔琉だった。

「俺もさつきこう言ったよな、俺の知ってる陸とはまた別次元の陸って。この意味わかるか？」

「……別の世界にも俺がいるってことか？」

「そうそう。まあその陸も俺とは別の世界の奴なんだけど……んで、その世界でお前は俺達と同じようにウルトラマンとして戦ってたんだよ」

随分と軽いノリでとんでもないことを言っただけだ。

別の世界などと言っただけじゃあ何でもアリな気がしてならないが、少なくとも陸以外は既にそれを事実として受け止めているらしい。

『そして俺達の世界で未来は過去にウルトラマンとして世界を救った英雄……もしあの少女の言う勇者達つてのがこの世界に存在するなら、別世界でウルトラマンとして戦ってるお前等だと考えるのが妥当……って訳だ。筋は通ってるだろ？』

「まあそれはそうなんだけどよ……」

「ちなみに前が一体化してたウルトラマンこんな奴な」

「またも軽いノリで翔琉が取り出した一枚のカード。」

☒ULTIMATE ZEROC☒と記されたそれには、頭部に二本の刃を備える白銀の鎧を纏った巨人の姿が描かれている。

「目付きわつる……ホントにウルトラマンかよ……」

差し出されるままカードを手にとった、その瞬間だった。

「ツツ……!?!」

「前触れもなく突如頭の中に響いた激痛。」

「割れるようなその痛みは、まるで記憶の奥底から呼び覚ましたかのように様々な像を脳裏に映す。」

「陸……?」

「未来達の顔や声を塗りつぶすように流れていく景色。」

「汗臭い日々に血染めの定め……その先で瞬いた輝かしい景色。」

「『俺達に……限界はねえッ!!』」

そして存在しないはずの☒相棒☒と重ねた、誓いの声。

経験も記憶にもないそれらが流れ去って行くのは文字通り瞬く間だったか、次に未来達を認識した時には頭痛も含めそれらは煙のように消え去っていた。

ただ一つ、陸の中に強烈な何かを刻み込んだまま。

「……お前、何しやがった？」

「え？ 別に何もやってないけど……」

「陸……、何か見たのか？」

純粹に陸を心配する心と、それとはまた違うものを孕んだ未来に対し一瞬考え、首を横に振った。

「……何でもねえよ。これ、なんかウルトラマンの力が込められてるとかそんな代物なんだろ？ 一般人の俺が触れたから拒絶反応か何か起こしたんじゃないの？」

まだ微かに残る余韻を振り払うように翔琉へカードを返却すると、そのまま彼等へ背を向ける。

「つー訳だからその勇者様とやらは他を当たってくれ。お前等がウルトラマンだってのは信じるけど、こつちの話は俺にや無理だわ」

「え……」

「ちよ……待てよ陸！ 話聞いてなかったのか？ この世界が危ないって言ってるんだ

ぞ」

旅館の中へ戻ろうとしたところを未来に引き留められる。再度その方を向けば寸刻前と打って変わった鬼気迫る顔がそこにあつた。

「…なあ未来、お前がウルトラマンに憧れてきてたのは知ってるし、春馬の話聞いて高揚するのもわかるぜ？　けど、それはあくまで別の世界の俺達の話だ。何の力もないこの世界の俺達がどうやってその脅威とやらに立ち向かうんだよ」

「それは……」

「別にお前がどうしようが止めやしねえよ。けどそんな確証も何も無い希望に縋るくらいだったら、初めから春馬達~~の~~本物~~の~~のウルトラマンに任せた方がいいに決まつてる。できること以上の背伸びしたところで何も実りやしねえだろ」

　払うまでもなく、そう言っているうちに未来の手は肩を離れていた。

その瞬間に見えた彼の表情から逃げるように背を向け、最後に言い残す。

「流石にもう帰るわ。翔琉……だっけ？　聞く分じや宿無しだろうしウチ泊ってけよ。お前の知ってる俺の話に興味はあるからな」

流れるように曜を呼び、彼女が腰を下ろした自転車に跨っては空を見上げる。

見慣れたはずのその夜空は、何故だかいつもよりくすんで見えた。

何も言い返せなかった。

元々自分より少し遠くにいるように感じていたアイツがまた遠くに行ったような気がして。

そんなアイツから放たれた現実の一言が何より痛くて、高揚していた自分が馬鹿らしくなってくる。

『言われてみれば……そうなのかもな』

陸に曜、そして翔琉の去って行った夜道の暗がりを眺めながら、春馬の中でタイガが零す。

『確かに俺達の世界では英雄でも、こつちの世界ではただの人間だ。何もできないとまて言わないが、それでもやれることなんて限られてる。元々俺達だけで何とかすべき問題だったのかもな』

「そうなのかな……俺は——」

「……いいよ、春馬」



何か言いたげな春馬の声を伝えんとしたことを考えもせず遮る。

別方向へ向けたままの顔は見せなかつた。見せたくなかつた。

「俺等も戻ろうぜ。もう結構遅くなっちゃまったしな」

平静を取り繕い、帰路を進む。

数日の間に見ていた夢が覚めたかのような重みは、足取りのみならず心の中までも浸透していくようだった。

## 9話 眩しいもの

「つー訳だ。今配ってるプリントにある通り、めんどくせーことに漁港祭は他の学校と連携して教職員で見まわることになった」

教卓に突っ伏したまま気だるそうに説明を読み上げる教師の声。

その内容に対し周囲の席から上がる反感の声も含め、ただただ意識の外へと流れてゆく。

「まあお前等も高校生だ。多少ハメ外そうが不純異性交遊しようが別にいいと思うんだがな、決まっちまったモンは仕方ねえ。お前等何か問題起こして俺に面倒掛けたら内申点はないと思えー」

換気に向けた窓枠から侵攻してくる熱気や蟬の合唱も今となつては気になりもしない。

針で突かれたように、心に生じた小さな穴。その穴に何もかもが吸い込まれてしまつたかのようだ。

「未来」

心地よい夢から目覚めた時の感覚と似ている。

まだ起きたくない。もう少し浸っていたい。続きが見たい。奥底から沸き上がってくる願望。

だがその感覚も夢と同じだ。眠りから覚まされるように、繰り返し背後から掛かった声がようやく現実へ引き戻してくれる。

「ちよつと未来、聞いてる?」

「…あ、ああ、ごめん。どうした?」

「プリント、回ってきてるわよ」

真後ろの席に腰掛ける少女に指摘され、ようやく二枚の紙束が自分に差し出されていくことに気が付く。

前席の生徒に謝りながら受け取ったそれを後方の彼女へと手渡すと、同時にその蒼い瞳が向けられる。

「どうしたのよ、今日ずっとぼーっとしてるわよ」

「……別に何でもないよ」

「ホント嘘ついてる時わかりやすいわね……」

抑揄うように悪戯な笑みが咲いた。

一年時に知り合って以降妙に絡んでくる彼女——ななほし七星ステラ。曜日く気に入られてるらしいが……未来にはいまいち理解できないものだった。

「まあ別に言及はしないけど……それより未来、週末って空いてるかしら？」

「週末……って、漁港祭の日か？」

「そ、ちよつと周ってみたいんだけど一人で行くのもアレだし付き合ってくれない？」

そんな彼女からの申し出もまた妙なものだった。

その雰囲気の通り一匹狼気質な部分はあるが別に友達がいない訳ではないはずだ。

それなのにわざわざ未来を誘うとなると何か含みを感じてしまう。

「なんで俺なんだ？　一緒に周るなら千歌達の方が……」

「どうせアンタも千歌達と周るのはわかってるのよ。だったら誰に聞こうが変わらない

わ」

「……なるほど」

遅れて口にされた理由を聞いて納得。そう言えばステラも千歌のお気に入りの人

だったか。

「ステラなら千歌達も大歓迎だと思うよ。千歌達以外にも何人かついてくると思うけど

いいか？」

「構わないわ。梨子の弟と、静真の不良っぽい幼馴染でしょ？　めんどくさいのに声か

けられなさそうでよさそうじゃない」

如何にも自信あり気といった得意顔の後ろで深い青の髪がたなびく。

まあ実際ステラは美人と違って差し支えない容姿をしているし、不埒な輩に声を掛けられたことだつてあるのだろう。

尤もその中身を知つたら裸足で逃げ出すとは思うが。

「……何ニヤニヤしてんのよ。気持ち悪い」

「別にそんな顔してねえよ……」

そうは言いつつ確かに緩みつつあった表情筋を引き締め直す。こんな奴とは言えやはり慣れた面と話すのは気が解れるものだ。

そうだ。元々漁港祭には全力で取り組むつもりでいたんだ。今は一旦ウルトラマンのことを忘れ楽しむことに専念しようじゃないか。

「おいコラ七星、デートのお誘いは結構だがまだHR中だ。余所でやれー」

「なっ……、別にそんなんじゃない!!」

教室全体に悪意を振り撒いた教師に触発され周囲から上がる野次や黄色い声。

それらに真つ赤な顔で反論するステラと共に気恥ずかしさを覚えつつ、未来達は高校生活二度目の夏休みへと突入した。

「あ、日々ノお前は進路表出すまで居残りな」

訂正、未来の夏だけはもう少し先になりそうだった。

「反応なしか……あの野郎もこの辺に落っこちてきてると思ってたんだがなあ……」

太陽から照りつける光と熱がじわじわと身体に染み入る。

幸いデバイザーに記録されていたあの宇宙人の生体反応を元に居場所を突き止められないかと探索していたものの……このままでは見つけ出す前にこっちが熱中症で力尽きそうだ。

「翔琉君の言う蝙蝠みたいな宇宙人があの女の子が言ってた脅威ってことでいいのかな？」

「別にそんな強そうな奴にも見えなかったけど……まあウルトラマンのいない世界じゃどいつが来ようと変わらねえか」

探索の同行を名乗り出た春馬から聞いた話で分かったことは三つ。

一つはこの世界はウルトラマン、そしてスクールアイドルが物語の中にしか存在しない世界。

次に別の世界ではウルトラマンやスクールアイドルとして活動している人物達が

一ヶ所に集中している。

そして最後に、詳しくは彼も把握していないようだがとある危機がこの世界に迫っている……ということだ。

『お前は俺等と違つて自力でこの世界に来た……つてことでいいんだよな?』

「まああの宇宙人追つてたらなんやかんやこの世界に来てたつて感じだけど、お前等は違うんだつたな」

半ば殴り込みに近い形でこの世界に来た自分と違い、春馬とタイガはとある少女の導きによつてこの世界に来た……とのこと。

その際に彼等に託した言葉の真意も気になるが、今は彼女についてだ。

「…そーいや、野郎のいた場所に女もいたよな……」

「え……?」

こちらの光刃と奴の光弾が衝突する寸前。ほんの刹那だったが、あの縞瑪瑙の空間に存在する少女の姿が確認できた。

それが春馬の言う少女と同一人物なのかを確かめる術はないが、この特異な状況から鑑みるに何かしらの関係があるようにも思える。

「そ、その人つてどんな感じだった……?」

「丁度俺等と同じ年頃に見えたつてのと……あと浮いてた」

『アバウト過ぎんだろ……けど、俺達の世界に現れたあの少女とも一致するな』

「……てこたあそいつもグルつてことか？」

その推論に至ったのはタイガも同様のようで、姿は見えずとも声音から警戒の色が伺える。

判断材料となるものが乏しい現状ではそう考えておくのが妥当な気もするが……反論する者がここに一人。

「……俺にはそう見えなかったけどな」

「いや、一応警戒するに越したことはないだろうって話なんだが……まだわかんないことだらけなんだしさ」

「だからだよ……わからないからこそ、一方的に決めつけたくないんだ」

あくまで仮定の話だと捕捉はするが、それでも春馬の瞳に映る意志に揺らぎは伺えなかつた。

何かと重ね合わせるような、それでいてどこか悲痛も含む底の知れない目。少なくとも今の翔琉には踏み入れることのできない領域の中にあるように思える。

「どんな行動をとるにも、そうするまでに至った理由がある。だからまずは自分がどう思ったかを大事にして、ちゃんと理解したい」



ふと、以前X i oのメンバーから掛けられた言葉が思い起こされる。

人類に危害を与えうる存在である怪獣との共存。今でこそそれも悪くはないと思っ  
てはいるが、具体的にどうだとかは考えてもみてなかったか。

「どうするか判断するのは、その後だって遅くはないでしょ？」

自分達が人々を守るために戦っているように、怪獣にだって暴れたりする理由があ  
る。その中には非難するにできないものだってあるだろうし、それを理解せずに手を下  
すことは理不尽に思える。

ふとしたことから一つの理想となつた怪獣との共存。

春馬の考えはもしかすると、その理想に近づくための一歩なのかもしれない。

「……わかつたよ。一応そう言うことにしといてやる」

そう言えば、世界線こそ違えどそうあればいいなどと思つたのもこの地だったか。

今回の相手は怪獣ではないが……それに反するような行動はできない。

「とりあえず戻ろつか。そろそろ未来さん達帰つてくる時間だし、千歌さんにも練習見  
てほしいって言われてるから」

「おお、だったら俺の専門分野じゃん。早く行こうぜ」

『なんだ？ お前の世界にもスクールアイドルあるのかよ』

タイガの一言から発展した新たな話題を交わしながら元来た道に引き返し始める。

「……なんで」

その傍ら、木々の影の中に潜む少女が零した声が風に消えてゆくのを、気付くこともないまま。

「はあ……」

吹き飛ばしたものと思っていた重苦しい感覚が再来するのを全身で感じ取りながら、今日何度目かもわからない溜息をつく。

補講等でまだ数日は学校にいるからそれまでには絶対に出せと念を押されて解放されたが、もう本格的に時間がないのは明白だろう。

「……」

傾いた夕陽の色に染まる進路調査票。相も変わらず指名以外の記入個所は悉く空欄のままだった。

未来は陸のように定まった夢も無ければ、遥のような才能がある訳でもない、何も無い普通怪獣。

それ自体は決して珍しいことでもないはずなのに、用紙の大半を占める空白はまるで今の未来を表しているかのようで少し嫌になる。

「……………」

そんな気分のまま自宅のすぐ前まで差し掛かった時、連続して耳朶に触れたタツ、タツ、と地面を蹴るような音。

何かと思いそちらに視線を流せば、見慣れたみかん髪の少女が音楽を口ずさみながらステツプを刻んでいるのが見えた。

「あ、未来君おかえりー！」

向こうも未来に気付いたのか、こちらを見るや否や駆けてくる千歌。

瞬間瞬間に舞う輝きの粒はこの暑さによるものだけじゃない。きつと何時間もそこで練習していた証拠だ。

「まだ練習してたのか…?」

「いやあく、なんか私だけ上手くできないところがあつて……曜ちゃん達が帰った後も練習してたんだあ」

そう言つてそのパートと思しき振り付けを披露してくれる。

まだ少したどたどしきはあるものの、まだ何も決まっていなかった少し前の状況から見れば著しい進歩だろう。

「…凄いな、上手くなってる」

「ほんとお!? えへへ……春馬君だけじゃなくて翔琉君にもアドバイス貰って練習した甲斐あったよ」

照れながらも確かな自信を伺わせるその笑顔。

眩しい。

彼女に対して、初めてそう思った。

「あ、それでね! 梨子ちゃんが作曲してくれるって言うてくれたんだ! やっぱ東京にいた時ピアノやってたんだって!」

同時に襲い掛かってくる、置いていかれるような孤独感。

普通怪獣。そんな風に自虐する千歌にシンパシーを感じ始めたのはいつからだったか。

自分と同じく己に自信を持ってない人がいる。始めは単なる共感に過ぎなかったそれも、年を重ね将来のことを意識するようになるうちに身勝手な安心感へと変わっていった。

だからこそ一つの目標を通し前に進みつつある千歌が、凄く、遠く感じるのかもしれない。

ない。

「漁港祭までに絶対完成させる——つて、今春馬君と頑張ってるよ……つて、未来君、どうかした？」

「え……」

千歌に言われ、はっと知らぬうちに険しくなっていた表情を解く。

「……なんでもない。ちよつと汗かきすぎで、心配になっただけだよ」

「心配ありがとー、でももう終わるところだったから大丈夫だよ」

「……そっか」

咄嗟に出た言葉から始まった短い会話も終え、未来はまた自宅の戸に手を掛ける。

早くこの場から去りたい。生じたそんな気持ち故か、開こうとする玄関戸はいつになく重く感じた。

「あ、未来君！」

それでも開いたドアの奥へ向かおうとした瞬間、千歌に呼び止められる。

再び向けた視線の先で、彼女は太陽のような笑みを咲かせると——、

「漁港祭での舞台、私頑張るからしっかり見ててね！」

「……うん。楽しみにしてる」

それが本心から出た言葉かどうか最早わからない。

ウルトラマンにスクールアイドル……憧れたものは同じ空想の産物であることになりはしないのに、どうしてこんなに差が生まれてしまうのだろうか。

どうして、こう自分ばかり置いていかれるような気分になるのだろうか。

「ッ……」

鍵を閉めると同時に階段を登り、自室へ駆け込む。

比較的簡素な部屋の中では幼い頃に集めた光の巨人の人形などが目を引く。

それらを視界に入れまいと机に座り込んだ未来はそこに進路調査票を広げると、突き動かされるようにいくつかの大学名を書き殴った。

「俺は……」

猛烈な脱力感と共に制服のままベッドへ寝転ぶ。

夏休みを阻む課題から解放されたというのにも関わらず、身体も心も、全く軽くなつた気分はしなかつた。

## 10話 フェスティバルの夜

「うおおおおおッ!!」

「ちよっ………! なんなんですの貴方!?!」

瞬く間に数日が過ぎ去り、気付けばその日は訪れていた。

漁港祭当日。ここいらで行われる催し事でも最大の規模を誇るこの祭りには全国から、とまでは行かずとも多くの人が来訪する一大イベントだ。

並ぶ屋台の灯りや行き交う人々の顔や声。どこか特別感のある光景を流れるように映しながら……未来は全力で疾走していた。

「お前学習しないな!?! 別人だつて言ってるだろ!」

「それでも興奮するものはするんです! ああ! 握手だけでもお願いできますか!」  
「もう既に手を握ってるように見えるのは気のせいでしょうか……?」

最近何かと沈みがちだった気分が紛れないかと少しふらついていたものの……生ける暴走特急追風春馬はそんな暇も与えてくれないらしい。

先程から彼の世界ではスクールアイドルであつたらしい者を見つける度にこうして突撃を繰り返している。いちいちその後を追いかけて言い訳をすることこの身にも

なつて欲しいものだった。

「すみませんダイヤさん！ コイツちよつと頭のネジ飛んでるだけなんであんなま気にしないであげてください！」

「酷い言いようですわね……………この人が千歌さんの言つてた方ですか？」

「ええまあ……………追風春馬つて言うんですけど」

若干引き気味ながらも優しく微笑んでくれる一学年上の少女——黒澤くろさわダイヤに春馬を引き剥がしながら頭を下げる。

和風美人をそのまま絵に描いたような彼女からはどこことなく高貴な雰囲気がある。ようであり、有象無象の野郎共は当然のこと、ある程度親睦のある未来ですら声を掛け辛い部分があるというのにこの男……………色んな意味で底が知れない奴だと思えばかりだった。

「遂に千歌さん達が踊り子、時が経つのは案外早いものですわね。調子はどうですか？」  
「春馬達が見てくれたのもあつて結構形になつてますよ。まあ少なからず失敗つてことはなさそうです」

「それは良かったですわ……………果南さんの影響で去年のわたくし達のようになつたらと思つと悪寒が止まらなかつたので……………」

「あはは……………」



反応に困る言葉に苦笑いで返す。実際そうなる可能性もあったのが少々痛い。

「…そう言えば、千歌さん達と一緒にではないのですね。貴方達ならつきり一緒にいるものと思つてました」

「ああ、なんか着替えてから行くとかそんなこと言つてたんで陸の様子見に來がてら先にふらついてた感じです。…ダイヤさんこそルビィちゃんと一緒にじゃないんですか？」  
「勿論一緒に來てますわよ。さつきりんご飴を買つてくると言つて屋台の方へ向かつたので、そろそろ戻つてくるとは思いますが……」

そう言うダイヤが見やつた先へ未来も視線を流せば、確かに赤毛の少女の後ろ姿が見えた。

注文に苦戦しているのか、しどろもどろになりながらも必死に屋台のおっちゃんと言闘した末、ようやく掴み取つた戦利品を片手に駆け戻つてくる彼女の笑顔は実年齢よりもずっと幼く思える。

些細なことだが確かに表れた妹の成長に安堵する姉……が、そんな雰囲気をぶち壊したのはまたしてもこの男だった。

「あ、あのー！」

気が緩んだ一瞬をついて未来の拘束から脱し、引き寄せられるようにしてこちらへ駆

けてくるルビイの元へと向かう春馬。

マズイ。一瞬遅れてそれを察知した時には既にルビイの手は春馬の手のひらの中にあった。

「多くは求めないので握手だけでも——」

「び——」

決壊を示す声が漏れる。

この直後に起こることを理解した未来とダイヤが咄嗟に耳を塞いだ、次の瞬間——

「びぎやあああああああツツツツ」

!?!?!?

貫くような高音の悲鳴がルビイを中心に生じ、未だ彼女の手を取ったままの春馬へと襲い掛かった。

「あらあ〜？ どうしたのりくつち、あんまり客足振るわないみたいじゃない？」

「ぐツ……！ 原価の二十分の一で高級食材出すのはずりいだろ……皆食いつくわ！」

「ノンノン♪ これがマリーのA b i l i t yよ。食材のせいにするのは仮にも料理人としてはいただけじゃないんじやない？」

「がああ……これだから金持ちはや……！」

「盛り上がってんなあ……！」

黒澤姉妹に謝り倒した後、そろそろ千歌達も来る頃だろうと足を運んだ先では盛大に火花が散っていた。

並び立つそれぞれの屋台に構えているのは陸と豪奢な金髪を持った少女。

おはらまり  
小原鞠莉。ダイヤと同様未来達より一つ上の先輩にあたり、同時にホテルチェーンを営業する経営者を父に持つお嬢様。

「りくつちが屋台出すって聞いたから期待してたけど……どうやらマリーの圧勝みたいね♪」

「わざわざ嫌がらせしに来たのかよ、悪趣味過ぎんだろ金持ちの遊び！」

「……お前大変だな」

そんな所謂お金持ちである彼女だが、どうしてか他校であるはずの陸をいたく気に

入っており時折ちよっかいを掛けて遊んでいる。

今回も陸が漁港組合の枠を一つ貰って屋台を出すことを許可されたと聞いて自身も出店してきたらしいが……相変わらずやること成すこと全てがぶっ飛んでいる少女だった。手伝いに駆り出されてる翔琉が憐れむのも無理はない。

「あら、未来に……さっきの D a r i n g   b o y じゃない。二人もシャイ煮が食べたくなつたの？」

「ああ？」

鞠莉が口にした通り彼女の構える屋台には☒シャイ煮☒の文字があり、その下に羅列された原材料は未来達庶民には簡単に手の出せない高級食材ばかり。

それを一杯五百円という破格のお値段で提供しているのだ。そりや皆食いつくだろう。

ただまあ、鍋をかき混ぜる鞠莉の姿や料理の色自体は魔女鍋そのものなのでこれでもが集まつてるのは謎と言えば謎だが。

「……まあまあ、気楽にいこうぜ陸。んな面してたら来る奴も来ねーぞ」

「イエース。翔琉の言う通りよ、営業のコツは S m i l e よ」

「誰もかれもアンタ等みたいにお気楽じゃないんだよ……」

「……あれ、そう言えばステラは？ さっきまでここにいたよな」

少し前に離れた時から何ら変わらない空気感にまた苦笑いするが、遅れて先程までその中であつた顔が見当たらないことに気が付く。

「あー、あの一人バクバク食つてたちつこいのなら千歌に呼び出されたとかそんなでお前等がどつか行つたすぐ後に千歌達のとこ行つたぞ」

「まだ来てないと思つたらそう言うことか……」

「あ、おーい！ お待たせ——！」

噂をすればなんとやら。人混みの奥から見知つた顔が並んで現れる。

普段ならば特異に思えるその装いも、祭りという状況下においては馴染んで見えるものだった。

「oh! it's beautiful! 似合つてるわよ皆——！」

鞠莉も絶賛の声を上げた彼女達が着込むのは浴衣。

先日皆で旅館を手伝つた際に着物姿は見ているが、それよりも彩りや装飾の鮮やかであることも相まつてあの時とはまた違つた印象を覚える。

「えへへー、せつかくなら着て行けつて志満姉が」

「私は普通の格好でよかつたのに……」

「まあまあ似合つてるからいいじゃん！」

元々容姿は整つている彼女達だ。淡い橙に桜、水色とそれぞれを表すような色彩の浴

衣姿には自分達のみならず行き交う雑踏の中にも視線を注ぐ人々が数名。

だが未来が最も視線を奪われたのは、その三人の影で縮こまるように隠れていた、深雪のような蒼に身を包んだクラスメイトだった。

「ステラ……？」

「ち、ちが……、これは千歌が勝手に……！」

「せっかくだからステラちゃんもお揃いで行こうと思って志満姉にもう一着だしてもらったんだ〜」

赤い顔をしたステラを背後に何故だか千歌が誇らしげに胸を張る。

こういうのは柄じゃないだろうに、哀れステラ。千歌に目を付けられたのが運の尽きか。

「……本当に姐さんじゃないんですよね」

「またアンタ……？ 私に弟はいないって何度も言ってるでしょ」

「いやすみません……俺の知ってる姐さんとあんまり変わらないから……」

「なんかよくわからないけど腹立つわねその言い方……」

頬に差した朱は恥ずかしさからか、はたまた初対面のその瞬間に詰め寄ってきては一人で騒いでいた不審者<sup>春馬</sup>と再び出会ってしまったからか。

詳しくは聞かなかったがステラも春馬達の世界では彼と関係のある……しかも慕わ

れるような人間だったらいい。本当に向こうはどうなっているのか。

「……なに、ジロジロ見て」

「……いや、なんと言うか……」

前にも言ったがステラは美形だ。大抵の服は着れば様になるだろう。

だが今回は何と言うか、単純に余ったものを着せられたのか小柄な彼女に合うサイズがなかったのかは知らないが……千歌が中学生の頃まで使っていた花柄の浴衣を着る様はこう……。

「……ここまで花柄が似合わねえ女もいたもんだなつて」

直後、ステラの拳が未来の鳩尾を打ち抜いたのは言うまでもなかった。

昔から人付き合いは苦手だが、人混みの中に身を置くのは嫌いじゃなかった。

行き交う人々の中で誰も自分を気に留める者がいない……そんな妙な孤独感が心地よい。

こちらに越してきてから殆どそんな機会はなかったが、この漁港祭は久々にこの感覚を味わうに丁度いい。

「こんなところで会うなんて奇遇だね。遙君もお祭り見に来たの?」

「……まあ、そんな感じかな」

だから、ここで彼女と鉢合わせしてしまったのは少々計算外だったか。

けれど不思議と居心地の悪い気はいない。そんな不可解な感覚にヤキモキとしながら、遙は同級生である国木田花丸くきにだはなまると並び歩いた。

「そういえばさつきお姉さん達見かけたけど、今日は一緒じゃないんだ?」

「うん……先輩ばかりでなんか居心地悪くて……」

「あはは、ちよつとわかるかも」

楽し気に浮かぶ笑み。

屈託のないその花は、小さな嘘をついた自分には眩しく思えた。

「…国木田さんこそ、今日は黒澤さんと一緒じゃないの?」

「さつきまで一緒に周ってたよ。けどダイヤさん、こつちにいられるの今年で最後だから、姉妹でお祭り楽しむのにまるはお邪魔かなって」

「…そっか」

自己本位で逃げた自分に他人を想って身を引いた彼女。形や本質こそ真反対だが、は



み出し者という点では同じらしい。

そんな歪な共通点が、感じてはいけけないシンパシーをより強く抱かせてしまう。

「……だから、もし遥君がいいなら、まるで一緒に周ってくれない…?」

数多の人に触れ、鉄のように冷えた心の芯から広がっていくこの熱。

そんな温もりが、また一步、奥底へと歩み寄ってくる。

「……」

この温度を初めて実感したのはいつのことだったか。

出会ってからそう時間は経ってない。転校して間もない頃、周囲に馴染めず図書室に籠っていた中で彼女に触れ、気が付けば話を交わすような関係になっていた。

そして抱いたこれがただの心を許した証明でないのも、薄々感じ取っている。

「……ごめん」

だからこそ、その温もりに触れるのを拒んだ。

この関係を心地よく思っているのは確かだ。さらに進んだ関係を想像している自分も少なからず存在する。

けど、それ以上にこの先にあるこれまでと同じ未来に辿り着くのが……怖かった。

「……実は明後日姉さん達の舞台上で使う機材とかの調整しなくちゃいけない……」

また嘘をついた。

偽ることには慣れたはずなのに、この瞬間ばかりは胸が痛む。

「……そつか。なら、また今度誘うね」

「うん……ごめん」

込み上げてくる蟠りごと置き去りにするように彼女から離れ、その姿が見えなくなる  
と同時に駆け出す。

過去からも、未来からも、誰からも逃げ続けている。

そんな自分の行き着く先には一体、何があるのだろうか。

「繋がらない？ 遥君」

「うん……さつきから何度か掛けてはいるんだけど……」

「こつちには来てるんだつたら探しに行く？」

「もう高校生なんだしそんなに心配することもないと思うけど……」

完全に機嫌を損ねたステラに色々奢らされ財布も軽くなった頃。

話題は未だに姿を見せぬ最年少に移り、心配とまでは行かずとも気に掛けるような空気が徐々に漂い始める。

「まあ、一応探しに行ってくるね。もしかしたら近くにいるかもしれないし……」

「あー、だったら誰か野郎一人連れてつとけ。さつきからちよいちよめんどそうな輩見かけるし」

「めんどそうな輩？」

「ほら、あつこにいる連中みたいなの。毎年現れるよなああいうの」

聞き返した春馬に答える形で陸が指さしたのは彼等が構える屋台群から少し離れた場所。

茂った木々によって暗がりになったそこで確認できるのは、一人の少女が複数の男に囲まれている様だった。

「お？ なんだ令和にもなって古典的なナンパしてんな」

「は？ 令和つて何」

「え、お前元号知らんの？」

「え？ 今平成だろ？」

陸と翔琉のやり取りの間を縫うようにして微かに聞こえる言い合うような声。

それを前に誰も助けに入らないのは元々人気が少ない場所というのもあるが、関わり

たくないと見て見ぬふりをする者が殆どだからということもあるだろう。

自分は関係ない。行き交う殆どの人に漂うそんな空気感が……どうにも気に食わなかった。

「……ちよつと行つてくる」

「は？ いやお前わざわざ首突つ込むようなことじゃ……」

「見たからには見過ごせないだろ！」

陸の制止を振り払い、迷わず直進する。

ダークブルーの髪を一部シニヨンに纏めたその少女も丁度高校生くらいだろうか。自分よりも背丈の高い男達に囲まれ、気丈に振舞いながらもどこかで助けを求めているように見えた。

そんな姿を見て見ず知らずのふりをするなど、未来には到底できなかつた。

「おいアンタ等！」

「ああ？」

少女を庇うような形で割つて入ると、男達の刺すような視線が向けられた。

遠目ではよくわからなかつたが、こうして対峙してみると年上だと理解する。

遅れて一人で飛び出してきたのを失策だったと悟るが。それでも構わず吠えた。

「無理矢理何やってんだ、この子嫌がつてるだろ！」

「ははっ……なんだよコイツ。見りゃわかんだろデートだよデート」

「何度も言ってるけどこのヨハネがアンタ等なんかと戯れる訳ないでしょ！ わかったらどっか行きなさいよ！」

「……つて言ってるけど？」

「チツ……うるせえな。お前には関係ないだろ」

未来が加わりより騒がしさを増した口論に無視を決め込んでいた周囲の人々も足を止めてこちらを見やっている。

その中に含まれる好奇の色。周りにはせいぜい見世物へ変わったに過ぎないらしい。

「関係あるとかないかそんなの関係ない。見過ごせる訳ないだろこんなの」

「何訳わかんねえこと言ってるんだコイツ……」

連中が徐々に苛立ちを募らせていくのがわかった。

これ以上は何が起ころかわかったものではないが、ここまで来て引き下がれるか」

「ああもうしつこいわね！ 警察呼ぶわよ！」

「だってさ。問題になるのはそっちも不都合だろ？」

「ああもうウゼエな……引っ込んでろよ！」

少女の一言を機と取って攻めに転じるも逆効果だったか。

苛立ちに耐え兼ねた男の内の一人が振り上げた足が脇腹へと刺さり、未来の身体が後

方へと舞った。

「未来君ッ！」

「ちよっ……アンタ大丈夫!？」

地面を転がった自分を心配するように遅れて飛び出してきていた千歌とシニヨンの少女が顔を覗き込んでくるが、男に腕を掴みあげられてしまう。

「おい……千歌は関係ないだろ……!」

「引ッ込んでろッてんだよ！」

起き上がってそれを止めようとするも、そうするよりも早く二撃目が迫ってくるのが見えた。

避ける術はなく、先程よりも力の籠ったそれはまたも未来の腹を捉え——、

「へぶらッ……!？」

——るよりも先に、男の方から情けない声が上がった。

「ああもうお前はいつもいつも！」

「まあまあいいじゃんかよ……俺もコイツ等ぶっ飛ばしたい気分だし」

見上げた先でその理由を悟る。

先程未来がしたことをそのままなぞるように男達と対峙していたのは陸と翔琉だった。

「こくなつちや流石に見過ごせねえわな……。おい未来、これで客来なくなったら責任取れ……。よッ!!」

激昂して突っ込んでくるが、陸はそれを軽々と回避すると瞬時に鳩尾へと拳を叩き込む。

それにより動きの止まった一瞬間の間に胸倉へ手を忍ばせると、そのまま掴み上げては繰り出した一本背負いで瞬く間に抑え込んで見せた。

「おんどらあッ!!」

そうする間に翔琉が前へと飛び出し、残った取り巻きへと突っ込む。

咄嗟に反撃してくるものの、既に予見していたかのように身体を翻した彼はそれらが当たるよりも早くラリアットを炸裂させ瞬く間に制圧してしまった。

「クソッ……。離せよ!」

「…待て、コイツ……」

ただ抑え込むことができたというだけで悪い状況なのは何も変わっていない。拘束から抜ければまたすぐに反撃してくるだろう。

春馬に起き上げられながらそれを不安視していた折、不意に男達の内一人が声を上げた。

「コイツもしかして鯨の舎弟じゃ……!」

「あ……広まつてんのかよそれ……」

陸に対して向けられた言葉を皮切りに男達へ広がっていく波紋。

それに対し陸が微妙な顔で頭を掻いた時……終焉は訪れた。

「……あ——！——陸ッ——!」

「げえッ……!?!」

騒ぎの渦中へドドドという擬音が相応しい勢いで突っ込んでくる影が一つ。

それが青い髪をポニーテールに束ねた少女だと認識した途端に陸の顔は引き攣り、野郎共の表情に恐怖が伝播していった。

「あ、淡島あわしまのしやちの鯨だッ!?!」

「クソッ……:よりによってそこに手えだしちまつてたのかよ……!」

「い、いいから逃げるぞ!」

必死の形相で拘束から抜け出し散り散りになってゆく男達。



だが突撃してきた少女はそれらに目もくれず、遅れて逃走を図った陸をとつ捕まえては目の笑っていない笑みで問うた。

「陸……？ これはどういうことかなあ？」

「いやあのその待って果南姉ちゃんこれには事情がありました……！」

「喧嘩しないって約束したよね？ 陸が喧嘩するとまた私の変な噂広まるからやめてっ  
てお願いしたよね？ てか何さ淡島の鯨って。私のことなんだと思ってる訳さ」

「いやそれどつかのどいつが勝手に呼び始めただけで俺関わってないしそもそもこの喧嘩  
嘩だって俺が始めた訳じゃ——」

「問答無用だよ」

一転して陸が情けない顔で弁明を図るが、果南と呼ばれた彼女は聞く耳を持たず、

「破愚……しよ？」

直後、何かが折れる音と共に今日一の悲鳴が夜空に響いた。

## 11話 抱くものは

「いっ……」

「(こらこら)じつとしてー。消毒できないでしょ」

消毒液特有の臭いと共に痛みが傷跡を駆け抜けてゆく。

頬に肘。蹴り飛ばされ地面を転がった際についた傷へ最後に絆創膏を貼り付けると、

淡島の鯨もとい松浦果南まつうらかなんは柔らかな笑みを作った。

「何があつたかは聞いたけど、無茶しちやだめだよ未来」

「……すみません」

「……まあでも、偉いね。よしよし」

ベンチに座らせた未来を胸元に抱き寄せると共に頭を撫でる果南。

ダイヤや鞠莉と同様三年生であり、未来にとつては姉貴分である彼女。このスキン

シップも昔からだが、流石に高校生にもなれば恥ずかしさが勝る。

「……俺より陸を褒めてやってよ。実際、解決したのはアイツだし」

その柔らかかさから抜け出すと共に火照りを誤魔化すために隣のベンチへ視線を向け

る。見やった先では陸が伸びていた。

「陸ちゃんも喧嘩っ早いところはあるけど……果南ちゃんも大概だよね」

「うんまあ……悪いことしたなあとは思ってるよ……」

「果南の悪評を広めた罰だ。一度痛い目に遭う方が丁度いいさ」

「ちよつと、その言い方じゃ私が元々不良みたいじゃんか」

「博樹の言う通りデース。小さい頃の果南は不良そのものだったよ？」

今でこそ未来達幼馴染組の姉ポジションである果南だが、幼少期は中々にヤンチャしていたらしく。

今でも地元の大人達に度々掘り返されるその話は広まるうちに肥大化し、最も果南を慕っている陸が一部で不良扱いされていることもありいつしか淡島の鯨などと言う二つ名が定着したそうなの。

「……んな騒がれるようなことあした覚えねえぞ……アイツ等が勝手に広めてるだけだろ」

「あ、蘇ってた」

「どうだかな。何もしてない奴にそんな噂が立つ訳ないだろう」

「……戻ってきて早々に嫌味つたらしいっすね博樹さん」

「俺は純粹に思ったことを口にしただけだ」

「曜に介護されながら身体を起き上げた陸の風貌はそんな噂を立てられるのも納得な覇気を孕んでいたが、博樹と呼ばれた青年は微塵も怯む様子もなく受け流して見せる。

そんな飄々とした雰囲気纏うのが湊博樹<sup>みなとひろき</sup>。未来自身はさほど関りのない彼だが、果南達三年生組とは縁が深く幼い頃はよく一緒にいたという。

「大体なんだ。高校生にもなつて果南を姉ちゃん姉ちゃんと……まだ姉弟ごっこでもしてるつもりか？」

「原因作つたアンタに言われたかねえんだよ！ そのくせたまにしか戻つてこないんだしいちいち口出ししてくんじゃねえ！」

「イエース。戻つてくるなら連絡くらい入れてよね。そしたらs c h e d u l eも空けてたのに」

「俺だつて暇じゃない。今回だつて果南に言われて無理矢理時間を作ってきたんだ。……顔を見せただけでも良しと思え」

「けっ……世界も注目のお天才様は重役気取りかよ。誰もアンタなんざ求めてねえつてんだ」

その口調や雰囲気から察せるが博樹はかなり頭がよく、今は小学校の時から声を掛けてきていたという東京の名門高校に通っているためこちらにはたまにしか顔を出さない。それも未来とは関りが薄い要因の一つだ。

ちなみに見ての通り陸との仲はすこぶる悪い。

「その言葉そっくりそのまま返してやる。たまの帰省にお前と顔を合わせる羽目に遭う俺の身にもなれ」

「そつちから顔見せといて随分な物言いだなオイ。向こうで勉強しすぎて脳味噌溶けたか？」

「お前こそその残念な知能を鍛えろ。そうすれば軽い頭も少しはマシに……まあネアデルタール人程度の知性にはなるだろ」

「退化してんじゃねーか！」

犬猿の仲、水と油、冷戦状態。この二人の関係をどう言い表したものでしょうか。

ある程度互いを信頼している部分はあるだろうし、何なら似た者同士とでさえ思うのだが……どうして上手く行かないものか。

「……たく、こんな幼稚なのに付き纏われてお前も大変だな」

「ああいや……俺も好きでアイツとつるんでるんで……」

終いには同情の視線を向けられてしまう。

秀才であるが故か、それとも不仲から来る偏見か、いずれにしろ博樹にとって陸は幼稚な存在らしい。

「それに……陸のがずつと、俺より大人ですから……」

最後のそれが誰に向けたものだったのかは自分自身わからない。けれど胸に抱くこの劣情だけは、確かなものらしい。

「わりいな後片付け手伝わせて。殆ど客来なかつたけど」

「まあ色々悪条件重なったしな……てか身体大丈夫か」

「伊達に何年もしばかかれてねえつつの。いくら姉ちゃんのパワーでも流石に慣れた」

「果南さんもだけどお前も大概人間離れしてるよな……」

不満そうに口を尖らせる陸の少し後を進む形で人の引いた夜道を歩く。

三日に渡って行われる祭りといえど催し物の時間が過ぎればこんなものだ。川の如く流れを作っていた人々も今は疎らにしか散見できない。

「しつかし、お前ホントに博樹さんと仲悪いよな。結構似た者同士だと思うんだけど」

「ああ？ 誰があんなのと……！」

条件反射のように反論しようとし、その途中で言葉を飲み込む陸。

代わりに紡がれたのは、未来にとっては少し、意外なものだった。

「……いや、案外そんななのかもな」

「……え？」

「実際のとこ羨ましいし妬ましいのかもしれない……どつか似てるからこそ、俺との差がハッキリしちまうというかなんというか」

「ダツセエ。小さくそう呟いた表情に映る自虐の色。」

「彼が見せた、つい先程自分も抱いたその色に……何かがずきりと痛んだ。」

「変に意地が邪魔して本人の前じゃ絶対言えないけどよ、実際すげえよなあの。頭いいとかそう言うのじゃなくてさ、なんつーかこう、迷いが無いというか……何にも言い訳せず夢や目標と向き合えるって……カッコいいよな」

「恐らく陸自身初めて言葉にしたであろう、博樹への劣情と羨望。」

「漏れ出るような吐露と同時に揺れた瞳は、どことなく己と重なった。」

「まあともかく、あの人見てるとどうにも自分が情けなく思えてよ……それでちよつと八つ当たりつぽくなってんのかもな。向こうがどう思ってるかは知らねーけど」

「それが嘘や欺瞞、まして忌憚でもないのは未来にはわかる。」

「幼馴染の勘が故か。少なからず、その言葉が彼の本心なのだけはわかってしまう。」

「……俺から見たら、お前も十分凄いいけどな」

「……そういや、さつきもそんなことばやいてたな。俺の方が大人だのなんの。……なん

か含みを感じるが」

「別に深い意味はないよ……ただ思った通りに言ったただけだ」

果南に貼られた絆創膏に視線を落としつつ続ける。

敗北の証の下に封じ込まれた傷跡は、今も痛むようだった。

「だってそうだろう？」

陸には才能もあるし、強い。漁港祭で屋台出す許可貰えたのもそう言うことだろうし、さつきだって、陸達がいなきや千歌がどうなってたか……」

勇敢と無謀をはき違え、結果的に地を舐めた未来とは違う。

最初は不干渉を主張していたとはいえ、結果的にあの場を収めたのは陸だ。

ウルトラマンである翔琉と比べても遜色ない強さで奴等を抑え込む様は……輝いて

見えた。

「それにいつまでも幼稚な空想に浸ってる俺なんかよりずっと現実見てる……敵わない

よ」

陸だけじゃない。周囲もどんどん、未来を置いて先に進んでいく。

そんな皆に置いていかれまいと走れば走るほど、その差を認識させられるようで。

「…別世界じゃ俺はウルトラマンだって話聞いた時さ、滅茶苦茶嬉しかったんだよ。実際は俺の話をしてる訳じゃないのに、なんか俺まで特別な力があるように思えてさ……舞い上がった」



その折に春馬達と出会い、憧れであったウルトラマンや別の世界の自分のことを知った。

彼等から聞く雄姿のみならず、この世界に迫る危機に立ち向かう勇者などと言われた時にはどれほど好い気になったことか。

「だから陸も別の世界でウルトラマンって知った時はちよつと焦ったし、あくまでも別の世界の話だって言われた時には、急に一人はしゃいで俺が馬鹿みたく思えてきた」  
陸が博樹に対しやつかみがあつたように、未来にも陸に対する羨望が少なからずあつた。

だから陸にそう言われたあの瞬間、ハッキリと自分との差を突き付けられたような気分になった。

「……結局俺は何もない自分から目を逸らして、都合のいい妄想に浸ってただけなのかなって」

言葉は止めどなく溢れてくる。

口を動かせば動かすほど胸が締め付けられていくようなのに、今の未来にはそれを止める術すら見つけ出すことは叶わなかった。

「……お前が自分自身をどう思ってるかは知らねえけどよ」

数拍の後、殆ど一方的に垂れ流していたそれを陸が遮る。

照れとも呆れとも取れない微妙な表情をした彼は少し言葉を探すように天を仰ぎ、そして続けた。

「…少なからず俺は、お前ほど敵わねえって思った野郎はいねえぞ」

「…………え？」

先程と同じだ。その言葉に嘘がないことはわかる。

だからこそ、陸の言っていることがわからなかった。

「…なんでだよ。お前強いじゃん。料理だって上手いし、俺よりよっぽど現実だって…………」

「現実見てる…………か。バカ言え、俺あただ何かと言いつけて逃げてるだけだ」

問い返した未来に、己を皮肉るように彼の口角が上がる。

「お前にはなんか変に美化されて映つちまつてるみたいだけど、そんな立派なモンじゃねえよ。実際はいざ踏み出すのが怖くて、現実だとか便利な言葉言い訳に逃げ続けてんだよ…………夢からも、アイツからも」

勿論ウルトラマン云々の話からもな、などと低く漏れる。

わかつていても変化に踏み出す勇気が持てない。そんな心情が伺えるようだった。

「さっき言ったよな？ 何にも言い訳せず夢や目標と向き合える奴はカッコいいって。あれ別に博樹さんだけに言った訳じゃねーんだわ」

どこか悲し気に未来へ向けられた彼の顔。

幼い時から飽きるほど突き合わせてきたその顔も、この時ばかりは違つて見える。

「確かに高校生にもなつてウルトラマンだとかヒーロー云々つてのに思うことはあるけどよ。………そんな夢にも真つ直ぐ向き合つて悩めるお前はカッコいいよ」

何故、どうして。彼の方がよっぽど立派なはずなのに。

幼稚だ、馬鹿らしいなどと卑下し続けた己は、そんな彼にとつて羨望の対象だという。変わらぬその意味を理解出来ぬまま歩みだけが進み、やがて数人の声で賑わう広場に出る。

「まあどう思うかは人によりけりだとは思うけどな。………けどお前のそれに関しちゃ、割とすぐ近くに答えはあるんじゃないの？」

そう言い残したのを最後に、着々と形になりつつある舞台の上で予行演習を行う少女達と二人のウルトラマンの下に駆けてゆく陸。

直前の言葉の意味を模索するようにその背中を見やりつつ、未来もまたすぐにその後を追いかけた。

## 12話 孤独な旧懐

声が鳴り止まない。

雑音と呼ぶにはあまりにも尊く、甘美と呼ぶには少々沈痛な響き。

一体どれほど進んできたのか。それすらも臍気になるような時の中でも色褪せることなくその声を向けてくるのは、記憶の中で咲く親友の笑顔だった。

「カエデ……」

馳せるように届かぬはずの声を漏らす。

その中に確かな望みを含ませながら、覚束無い足取りのまま薄暗い林道を進んだ。

そんなはずはないのに。

☒あの子☒が再び自分の前に姿を見せてくれるはずなのに。

それなのにあの刹那に見た彼女の表情は、あれほど強く刻み込んだはずの誓いすらも

風化させてゆくようで――、

「っ……」

差し込んできた陽光を前に思わず目を眇める。

鬱蒼とした林床を抜けた先で触れたのは潮の香りと、どこか懐かしいような、人々の賑わう声だった。

「……どうしたの？」

その中の一つが自分に向けられていることに気が付く。

いつの日かの記憶を呼び起こすような、混じり気のないあどけなくも透き通った声。

「大丈夫……？ もしかして気分悪かったりする？」

陽の光を背負ったみかん色の髪が揺れる。

釣られるようにして見上げたその先は、ただひたすらに眩しかった。

「梨子さんまだ調整するんですか？ 舞台明日なんじゃ……」

「どうせやるならとことんこだわりたいの……それに何か掴めるかもだから」

目で見る以上に厚く感じる戸を隔てた向こうで届く声と音色。

弾む旋律や会話の反面、それを耳にする己はどんな底へ沈んでゆくような感覚がした。

「ごめんねギリギリまで付き合わせて。春馬君も用事があつてこつちに来てるでしょうに」

「いえ！ 俺は梨子さんや皆さんの力になれてるならそれで十分です」

☒あの日☒から時が経つほど大きくなっていたこの痛みは、彼が現れてからより加速した。

自分に奪われたものを、姉はこの場所に来て、彼等彼女等と出会って取り戻しつつある。

喜ぶ資格はなくとも、それを願う義務があつたのは自明のことだった。けれどいざそれを目の当たりにし、心苦しく思っている自分があることが何よりも嫌で、受け入れ難い。

「もう少しで終わりそうだし、一旦休憩しようか。何か飲み物持ってくるね」

一度区切られた会話と共に室外へ向かう足音が聞こえ咄嗟に戸から離れるも、身を隠すよりも一足早く姉の視線が自分を捉えた。

「遙……？ 友達とお祭り周ってくるんじゃないの？」

「ああうん……その、ちよつと忘れ物しちゃって取りに戻ってきたんだ」

二重についた嘘にまた嘘を重ねる。

呼び起こされる昨夜の痛みをぐつと飲みこみながら、内心を悟られまいと姉より早く二の句を継いだ。

「姉さんの方は、順調？」

「うん……久々に触れるから少し心配だったけど、皆が協力してくれてるから。いい曲ができそう」

「……そっか」

言葉を選んだような姉の返答に数拍の沈黙が生まれる。

遠慮するような笑みは何を意味するのか……もはやそれすらも理解の外にあった。

「……最近、姉さん楽しそうだね」

ふと漏れたその言葉。

そこに思惑も詮索もない。ただ純粹に一つの事実を表したもの。

「……そうね。霽が晴れたというか、なんだか初心に返れたような気がする……うん、楽しんで」

それもまた純然たる本音であり事実であることは疑う余地もない。

だからこそ、これまでになくそれは刺さる。

「……だからね、遥。遥も——、」

「……ごめん。友達待たせてるから、また今度でいいかな」

姉がその先を紡ごうとした途端に走った悪寒に弾かれるようにして存在しない友人の元へと急ぐ。

走ったその先に待ち受けているかなど、何も見えやしなかった。

「遥……」

階段を駆け下りる音と共に何か別なものも遠ざかってゆく感覚がした。

届いたはずの手は伸ばさなかった。今引き留めても何も変わらないのは目に見えている。

「……」

寸刻前まで音色を奏でていた手に視線を落とす。

自分が踏み出すだけじゃダメなことはわかっている。これは一人の問題ではないから。



だから伝えなくちゃならないんだ。証明と共に、これまでの想いを余すことなく。

そのためにまた作曲をすると、あの舞台に立つと決めたんじゃないか。

「梨子さん……？　どうかしました……？」

再び静かに固めた決心の傍らで春馬が顔を覗かせた。

姉弟間の事情も自分個人の信念だって彼は、勿論皆も知る由はない。それでも力を貸してくれている……失敗は出来ないだろう。

「……いい舞台にしたいなって、そう思ってたの」

弟の去って行った方を見つめながら一人零す。

脈絡のない発言に春馬は首を傾げているが、声に出したそれはより強く、心の糸を結び直した。

「この辺の人じゃないみたいだけど……観光か何か？」

「え、ええ……まあ、そんな感じ」

どうしてこうなったのだろうか。

謎のウルトラマンの襲撃によりあの空間が崩壊してからはや数日、現状を知ろうと散策していたはずが、気付けば偶然出くわした少女に連れ回される形で雑踏の中にいる。

「あの、私別に一人で……」

「あんなところ見たら放っておけないよ」

そもそも☒彼☒は何をしているのだろうか。

単独行動はいつものことだが、こうも姿を見せないのは初めてだ。それもあんなことがあった直後となると尚の事に掛かる。

「別に平気だから。そもそもあなたが気にするようなことじゃないで——」

だからこんなところでこんなことをしている暇はないというのに。

久しく触れた様々な感覚は、肉体で眠っていた余計なものまで呼び覚ましてしまう。

ぐうぐ。

「ほら、お腹鳴ってるじゃん」

先々まで並ぶ屋台から漂ってくる芳香に抗い切れなかった小腹が乾いた音を上げる。気恥ずかしさよりも意外や恨めしさが勝った。まだこんなものが残っていたことが驚きだ。そして何故このタイミングで。

大体この少女は何なのだろうか。

見ず知らずの自分を助けているつもりだろうか。親切心なのだろうか鬱陶しいことこの上ない。

「いいからついてきてよ。別に変なことはいらないからさ」

誤魔化そうとする度、逃げようとする度に彼女のペースに飲み込まれていつてしま

う。  
嫌味のない笑顔で強引に事を進める様は、不思議と☒彼女☒と重なった。

「陸ちゃんー!」

やがて目的の場所へと着いたのか、手を振りながら駆けてゆく少女。

その進む先へ視線をやれば、丁度彼女と同年代だろうかという少年が屋台を構えているのが見えた。

「おー千歌か……つて、なんだその子」

「こつち来るときに会ったんだ。なんかフラフラしてるみたいだしお腹も鳴っててさ、陸ちゃん何か作ってくれない?」

「……お前猫拾ってくる感覚でどこの誰とも知らない子連れてくんよ。その子も事情あんだろ。てか、こつちだつて商売で出してんだしな我儘通せるかってんだ」

「えー、いいじゃん別に。お客さんいなくて暇でしょ」  
「はっ倒すぞ」

ある程度親しい間柄らしく、千歌と呼ばれた少女は甘えるような声を向ける。ここへ連れてきたのはそういうことらしい。

余計なお世話だと抵抗の意を示そうとするも、またもそれを阻んだのは正直な腹の虫だった。

「……しゃーねーか」

間が悪そうに頭を掻いた彼が冷めた鉄板に油を引いてゆく。

直後に広げられた生地が焼ける音と共に香ばしさが鼻腔を撥る。長らく離れていたその光景に自然と身体は魅入っていた。

「流石にそこまで腹鳴らされちゃ無視出来ねーしな。簡単なもんだけどこれでいいなら食ってけよ。感想もくれると嬉しい」

そうして差し出されたのは白い紙皿に乗せられた円形に広がった黄金色のタネにソースや青海苔等でトッピングと味付けが施されたもの……所謂お好み焼きだった。

「おおー、ありがと陸ちゃん！」

「気にすんな。支払いの方は後でお前に請求すつから問題ねえ」

「え」

渡されたままに手に取れば、その香りがより強く触れた。

どうすべきか。その回答を求めるように視線を巡らせた先で、食べてみてと言うような千歌の笑顔が向けられた。

「……」

再度手元のそれに視線を落とす。

何かを口にするなどいつ以来だろうか……そこまで考え、既にそれを食することを決めている自分があることに気が付く。

本来の目的を思い出せ。どうして自分はここにいる。そう強く気を保とうとするも、目の前で自己主張を増してゆくその魔力には既に抗いようもなく――、

「お、中々いい顔して食ってくれるじゃねーの」

吸い寄せられるようにして含んだ一口。

知らぬ間にその口には笑みが零れていた。

「…あ、そういうえばまだ名前聞いてなかったっけ。私高海千歌！ あなたは？」

既に知った名前が挙がると共に求められる称呼。

名乗る必要はない。これまでも、勿論これからも、彼女達と関りを持つことはないはずだ。

だから今こうして自分が口を動かしているのは、ほんの気まぐれ。

「……ユリ。相墨あいすみゆりユリ」

間もなくこの戯れも文字通り闇に消える。その事実に変わりはない。

けれどただ一つ、この少女にかつての居場所を重ねた。それだけは、誤魔化しようのないものだった。

## 13話 決壊

妙な感覚だった。

失ったもの、取り戻そうとした温もりが、形は違えど目の前にある。

勿論今ここでそれに甘んじているべきでないのは理解の上だ。けれど求めていた旧懐を思わせるその温度に、孤独な心は抛り所を求めたのかもしれない。

少なからず今この瞬間を——久しく楽しいと感じた。

『カエダー!』

取り零してきた数多の欠片の中、微かに残った泥濘の底で今も瞬く声。

忘れもしない。あの日、彼女と共に夢へ……後に後悔とへと変わる道を踏み出した瞬

間だ。

『あとはここ押せば私達も正式にスクールアイドルになれるのよね?』

『興奮しすぎだつてユリー。パソコン壊さないでね?』

期待に満ちた目をしていた。決して平坦な道だとは思わなかったけれど、それでも輝かしい未来を想像していたんだ。

『そう言うカエデだつてそわそわしてるじゃない』

『そうかな……そうかも』

鏡映しの想いでないはわかっていたんだ。

だから、あの道に誘ったのは紛れもない自分自身。

『学校、守れたらいいな……』

例えこの時に気付いていようとも、あの未来は免れないものだろう。

けれども少なからず、あんな思いはしなくて済んだ。させずに済んだはずなんだ。

『…一緒に押そつか』

『え?』

『これから一緒に進んでくんだもん。踏み出す時も一緒にしょ?』

『……うん!』

輝かしい未来を信じ、共に押した扉。



その先に待ち受けていた未来が、暗く冷たい破滅とも知らずに。

「ユリちゃん……どうかした？」

「え……」

呼ぶ名は同じなれど、本質的に違う声に現実へ引き戻される。

空目した慕情の夢の続きはまた輝かしい夢物語。されどそれは前者と異なり、悲痛な後悔すらも呼び起こしてしまう夢。

「もしかして迷惑だったかな……？ 強引に色々連れ回して……」

「ううん、そんなことない。ただちよつと………思い出してただけ」

もし、今も彼女が自分の傍にいてくれたのなら。

こうやって、また近くでこんな笑顔を向けてくれたのだろうか。

「ええ、何それ聞きたーい」

「……話すほどのものでもないわよ」

触れる度に込み上がってくるのは、そんな想いとかつての思い出。

浸っているべきでないのはわかつていのに、一度それを求めてしまった心は縋るように手を伸ばし続けている。

「ところで今、どこに向かつてるの？」

そんな衝動の要因……高海千歌に問う。

友人の立つ屋台を経た後、彼女に手を引かれ進む先に佇むのは装飾の施された舞台。

木造の骨組みを基盤に簡素ではあるが古風な装飾の施された様は、水平線に沈む斜陽を受けて幻想的な雰囲気すら纏っている。

「ユリちゃんって、明日もまだここにいる？」

「え、ええ……どうかしら……」

「もし明日の夜もいるなら見に来てよ、私達の舞台」

少々高揚した様子で語られたのは彼女の夢……なのだろうか。

古くからこの地域で行われてきた伝統行事。その一環である舞踊の舞台に今年彼女は立つらしい。

大勢の前で歌い踊る。性質こそ違えど似偏ったその形式は、意図せずともあの存在を彷彿とさせた。

「……ねえ、千歌」

「ん？」

「……千歌は何で、その舞台に立ちたいって思ったの？」

だからこそ、問う。

直接彼女が口にしてた訳じゃない。表面上はあくまでも選抜されてという形のはずだ。

「うーん……まあ、元々私が立つって決まってたって言うのもあるけど……」

けれど彼女からは確かに、あの舞台に立ちたいそんな意思を感じたから。

「私は——」

「千歌——！」

その答えが紡がれるよりも早く、舞台の足元から投げかけられた声がそれを遮る。

「どこで道草食ってたんだ？ もうリハーサルの時間とつくに………つて、なんだその子」

屋台の彼とはまた別の友人なのか、千歌を待つようにそこで待機していた少年の顔が向く。

そんな彼に、心なしか先程よりも上機嫌に思える千歌は紹介する形で言った。

「ユリちゃんって言うんだって。さつき仲良くなっただんだ」

「あー……、そう言えばさつき陸がそんなこと言ってたような……」

未来君。千歌にそう呼ばれた彼と軽く会釈を交わす。

中性的な顔立ちということもあるが、先程屋台の彼を見た後だどこか頼りない印象を覚える。

「…無理矢理連れ回したりとかしてないよな……？」

「む……なんで私が迷惑かけてる前提だあ！」

開口一番にそういった未来へと千歌が嘯みつくも、そこに険悪な空気はなくむしろ微笑ましいもの。

やはり先程の彼との間に流れていた雰囲気とは少し異なる空気が流れていた。

「それより急げ千歌。だいぶ時間押してるし全体通して練習する時間なくなるぞ」

「ああうん。じゃあまた後でね二人共！」

手を振りながら千歌が壇上へ向かってゆく。

渦巻く胸騒ぎの正体を悟ったのは、この直後だった。

「…………えつと……」

揃って見合わせた顔に微妙な空気が流れた。

千歌が連れてきた彼女……ユリとか言っていたか。どういう経緯で知り合ったのかは知らないが、こうして仲介役が消えた今どうすべきかわからないのが常というもので。

「なんか…………ごめんね？ 千歌が色々…………」

「気にしないで。私も楽しんでたから」

一先ず千歌の滅茶苦茶を案じ声を掛けるが、当の本人は気にしていないようで胸を撫で下ろす。

「あの子昔からああなの？ さつき会った彼もあなたと似たようなこと言ってたけど」

「まあ…………うん。たまに暴走するということかなんと言うか…………」

けれどあの勢いに多少なり驚いていたのは事実らしい。

幼馴染の未来達でも振り回されることは多々あるというのに、それは初対面の彼女からしたらどう映ったかなど想像に難くない。

「…あ、さつき千歌に紹介はされたけど、俺は日々ノ未来。そっちはユリさん…………でいいんだっけ」

「ええ、相墨ユリ…………もつと砕けた呼び方でいいわよ。なんか慣れないし」

「そっか。じゃあユリは旅行か何かでこっち来てるの?」

「…まあ、そんなところ。なにか賑やかだと思つて来てみればお祭りがやってて、そこで千歌に捕まったわ」

「あはは……」

千歌が旅行に来た子と仲良くなるのは幼い頃から何度かあつたが流石にこのパターンは初めてだ。

聞けば最初千歌がユリを心配する形で声を掛けたそうなので完全に無理矢理という訳でもなさそうだが、それでも申し訳なさはある。

「予定とか大丈夫なのか……? ほら、観光で来たなら他に回りたい場所もあるだろうし、家族とか友達のこと……」

「……その辺は問題ないわ。それより、千歌のことなんだけど」

ある程度会話にリズムが生まれてきた頃、ユリの顔色がわかるのがわかつた。そしてその様にどこか、既視感を覚える。

「あの子は、どうしてあの舞台に立ち上がったの?」

その正体を探ろうとするが、直後に紡がれた彼女の言葉にそれは妨げられる。

「家庭のことがあつて元々立つことが決まつたとは言つてたけど、それ以外にも千歌にはあの舞台に立つ理由があるみたいだつたわ……それが知りたくて」

何かに突き動かされるようにユリは言う。

そしてそれは、未来自身も求めている答えでもあった。

「……俺にも、その理由はよくわからないんだけどさ」

千歌には見えていて、未来には見えていないもの。

同じ空想の産物を追いかけた者達であるからこそ、よりその差がハッキリと浮かび上がるようだった。

「……でもなんか、明日のアイツの舞台見たら、わかるような気がするんだよね」

すぐ近くに答えはある。陸のあの言葉が千歌を指していたかどうかはわからないけれど。

きつと自分はその答えを見届けなければいけない……そんな気がした。

「だからさ、無理にとは言わないけど、明日の舞台、見てやってくれないかな。その方がアイツも喜ぶだろうし」

ユリが何を思っつてその答えを求めているのかは知らないし、それを知ることでもユリの求める結果に辿り着くかもわからない。

でも少なからず明日の舞台を見て欲しいと思っっている……それは未来も千歌も同じはずだ。

「そうね……考えておくわ」

直後に点灯する舞台の灯り。

その中で執り行われる催しは、例え予行と言えど、輝いているのだろう。

\*\*\*

「——うん……だから、待ってるよ」

舞台に関わる者以外は予行の場に立ち会えない。そう言った理由でその場から離れ千歌を待っていたその折。

直前に触れたばかりの声が再度耳朵に触れ、自然とその方へ向け身体は舵を切っていた。

「……あれ？」

人目のつかない木陰の脇道へと差し掛かったところでその主と出会う。

「えつと……確か千歌ちゃんと一緒に来てた……ここで何してるの？」

「……あなたこそ。予行、もう始まるんじゃないやなかったの？」

確か桜内梨子……だとか未来に紹介されたか。

言葉の通り彼女は千歌と共に舞台に立つ側の人間、本来ならとつくにあの舞台にいるはずだが。



「ああうん……ちよつとわがまま言つて抜けさせてもらったの。やらなきやいけないことがあるから」

直前まで誰かと交わしていた通話がそういうことなのだろうが、深く問うことはしなかった。

けれど恐らく彼女も千歌と同じだ。あの舞台を通して果たさんとしている何かがある。

「大変だったでしょ？ 千歌ちゃんに振り回されて……」

「そうね……あなたも苦労してそう」

「まあ……確かに千歌ちゃんと出会つてから振り回されっぱなしね」

その訳には当然触れたいが、敢えてこの場では避けておこうと考える。

ここで問うのは何か違う気がする。答え合わせは多少遅れてたつていいはずだった。

「けど悪いことばかりじゃないわ………おかげで少しずつだけど、進めてる気がするから」

言葉を交わすのは当然初めてだが、互いの体験もあり思いの外会話は進む。

けれどその結果至ってしまったのは………もしかすると触れなくなかった事実なのかもしれない。

「でも振り回されてるつてことに変わりはないからね。今回の舞台だつて、まさかス

クールアイドルの真似事をするだなんて思ってたし——」

「……………え？」

直前まで存在していた熱が、一気に引いてゆく。

「……………今、なんて……………」

「え……………スクールアイドルの真似事をする事になったって……………」

再度梨子から発されたその単語に、奥底から形容しがたい何かが入み上がってくるのがわかった。

自分じゃない何かに切り替わっていくような感覚によって、理解する。

この世界に来訪した際に感じ取った瞬き。

あの不快な光の正体は………これか。

「………そっか」

そうだ。初めからそうだったじゃないか。

どうして自分はこの世界を訪れた。どうしてこれまで数多の世界を滅ぼす片棒を担いできた。

全てはコレを———スクールアイドルを消すためじゃないか。

「え……な、なに………?」

沸き立つ情動が形を成したように、黒い瘴気が自分を中心に広がってゆく。

☒彼☒がないからなんだ。

これを望んだのは自分自身………私がやるべきことなんだ。

「……………きつとあなたは、その選択をしたことを後悔する」

闇夜すらも塗り潰す黒が手のひらに集約し、やがて小さな人形を形成する。

「だからその前にあなた自身の手で……………終わらせてあげる」

悲鳴すらも黒に染まる。

埋め込まれたそれは身体の中ですらもその闇を膨れ上がらせてゆき——彼女を飲み込んでいった。

堤防に打ち付ける波の音だけが耳を撫でる。

そんな波打ち際の静けさに反し、遙の内心は決して穏やかなものではなかった。

「……………」

姉に呼ばれてここにいる。

明日に迫った舞踊の予行があるにも関わらず、姉は自分と話がしたいとここに呼びだ

したのでった。

正直、来たくはなかった。

ここに来るということは即ち、現状から前に進まなければいけないということだ。

勿論踏み出さなければいけないことはわかっているし、これ以上姉を縛り付ける訳にもいかないのも理解している。

それでも、怖いんだ。

現状から変わろうとすることが……その結果、また悪い方へと事が進んでしまうことが。

何もかもそうだ。姉のことも、自分のことも、寄り添ってくれる友人にでさえ。

考え、気付くほど、己という人間が嫌になつてくる——姉が姿を見せたのはそんな折だった。

「……姉さん？」

けれど、どこか様子がおかしい。

足取りは覚束ず、日頃から整えられていたはずの髪ものたうち回ったかのように激しく乱れている。

「……………遙……………」

「姉さん……………どうしたの……………?」

流石に不安と危惧が勝り、姉へと駆け寄る。

「……………遙のせい」

「え……………」

けれど、その足が止まるのも間もなくだった。

「続けたかったのに……………あんなことで終わりたくなかったのに……………」

「姉……………?」

刺さるような痛みが胸に生じる。

垣間見えた姉の瞳。

黒い光が宿ったその目に映された怨嗟が向けられた先は……………自分なのだから。

「全部……………全部遙が……………!」

今の姉が普通でないことはすぐに理解できた。

けどそれと同時にその言葉が紛れもない本心であることも……………理解できてし

まった。

「う……………ああ……………ッ!」

「姉さ……………」

狼狽えながらも胸を抑えて藻掻きだした姉に手を伸ばした途端。姉を中心に膨れ上がった黒に跳ね飛ばされ、真つ逆さまに海中へと沈む。

冷たい闇の中で反芻する怨念のような姉の言葉。

それは遥を海中へ引き摺り込むかのように浮上を拒ませるが、僅かに勝った憂いに水面へといずる。

「ツツツ

!!!」

その刹那に双眸が捉えた景色の中に姉の姿はない。

代わりにそこにあつたのは本来この世界には存在し得ないもの——大地をも揺らす咆哮を上げる、巨大生物の姿だった。

## 14話 暗雲の序曲

その瞬間は唐突に訪れた。

これがあの少女の示した破滅なのか、来るべくして行き着いた運命なのかは定かでない。  
い。

けれど少なからず、今日の前に広がる光景は世界の終わりを連想させた。

ヨウテツカイジュウ

熔鉄怪獣

キングデマーガ

『ツツツツ』

!!!!

陽の沈みきった空を照る紅。

舞い降りたはずの夜の帳を切り裂いたのは万物を震撼させる咆哮と、それに伴う周囲の火災だった。



「あ……」

陽炎の向こうで巨大な影が揺らめく。

その挙動一つ一つの度に大地を揺らし、自分達の町を蹂躪してゆくその巨大生物は怪獣と呼称するに他ならない。

「怪……獣……?」

「うそ……なんで……」

空想の産物に過ぎなかった存在が文字通り現実へ進撃する様を目の当たりにし、瞬く間に恐怖と混乱の渦に飲まれた人々の群れが悲鳴と共に流れてゆくのが見えた。

無論千歌と曜も例外でなく、明日華やかに舞うはずだった舞台の隅で寄せ合った身を震わせている。

「……春馬、これって……」

「あの女の子が言ってたこの世界の危機……?」

地獄絵図を思わせる事態の中、未来は幾分か冷静だった。

先んじて触れた怪獣やウルトラマンの存在。それらを介しこの世界に迫る危機を把握していた分、まだ周りに比べ余裕はある。

けれどよりもよって……どうして×今×なんだ。

「お前等ッ!」

「陸……!」

逃げ惑う人々の間を抜け出で、離れた場所で屋台に立っていた陸が顔を見せる。

「一先ず親友の無事に安堵するも、そこで完結する訳にいかないのは全員の共通認識だ。」

「ぼさつとしてねえでさつさと逃げんぞ!」

あまり広いとは言えない港町の道は既に押し寄せた人々で渋滞寸前。このままでは道が塞がり逃げ道を失うのも時間の問題だろう。

春馬と翔琉もまずは安全の確保が優先だと判断したのか避難を促し始めるも、ここで千歌から声がかかる。

「……待つて。梨子ちゃんがない……ユリちゃんも!」

「はあ!」

そう言えばと二人の姿が見当たらないことに気が付く。

梨子がかどうかは知らないが、ユリは舞の予行が終わるまで付近を散歩すると言っていた。まだそう遠くには行っていないはずだ。

「俺……ちよつと探してくる!」

「え……未来君!」

「おいバカ! やめろ未来!」

自然と動き出していった身体は友の制止も聞き入れることなく、人波へ逆らいながら二人の姿を求め進んでいった。

「未来君！ 未来君ッ!!」

「落ち着け千歌ッ……！ お前まで行ってどうすんだ……！」

飛び出して行った未来により波紋は広がる。

その後を追おうとする者にそれを諫める者。着々と状況は悪い方向へ向かっていると判断せざるを得ないだろう。

「……春馬、もう行くしかねえぞ」

『翔琉の言う通りだ。見た限り避難も間に合いそうにない……俺達で食い止めるんだ』  
「……わかった」

戦いに巻き込む危険性を鑑みて彼等や他の人々の避難を優先していたが、こうなった以上悠長なことは言っていられないか。

短くついた深呼吸の後に覚悟を固め、翔琉と共に地を蹴り飛ばす。

「陸さん、二人をお願いします」

「未来は俺等で何とかする……頼んだぜ！」

その返答を待たずして飛び出した両者に光が灯る。

熱を帯びた灰燼が舞う中向かう先は、絶望を齎す巨影。

《カモン！》

「光の勇者……タイガ！」

方や絆の手甲を。

「お、なんかカッコいいなそれ。んじゃ俺も」

方や宿光の機工を。

各々の形で携えた輝きをその身に纏い——開放する。

「バディイイイ……ゴ——ツツツ!!!」

「エックス——ツツ!!」

絶望の暗雲に一筋の希望を差し込むように立ち昇った光の柱。

それらは己が輝きを増大させながら一点へと集約してゆき……やがて二体の巨人の形を成した。

《ウルトラマンタイガ!》

《X UNITED》

「え、ほッ！ ゲホッ……！」

岸辺まで流れついた重い身体を陸地へ上げる。

呼吸器に残留する塩辛さに顔を顰めながら見上げた先では、既に市街部まで侵攻した怪獣が唸りを上げているのが見えた。

「姉……ッ……！」

引き摺るように身体を進ませ、咆哮を上げる☒姉☒の元を目指す。

人であるはずの姉が怪獣に変貌した。科学的な論証も意味を成さない今、その理由や原理は全く見当もつかない。

けれど、直前に姉に向けられたあの言葉。

姉の様子は明らかに普通でなかったが、あれは紛れもなく彼女の本心なはず。つまりこの事態を招いた原因は……遥だ。

「……………」

余力を絞って全身する最中、ふと町中で上がっていた悲鳴がぴたりと止んでいることに気が付く。

それと共に身体が覚えたのは眩しき。怪獣の行く手を阻むように、空へと伸びた光の柱が立ち並ぶ。

「あれって……」

程無くして光の中から姿を現したのは巨人の姿だった。

両者の様に違いこそあれど、全てを見通すような双眸に胸に宿った蒼の輝き。それは恐怖の渦中にある人々とあるヒーローの名を呼び起こさせる。

「ウルトラマン……」

誰が言ったか、感嘆に近い声が零れる。

その小さな雫はやがて人々に波紋として広がってゆき、次の瞬間には爆発的な歓声が上がった。

「ウルトラマン……本物のウルトラマンだ！」

「怪獣を倒しに来てくれたんだ……」

一昔前に放映された作品のヒーローとさえど、広い認知度を誇るその存在を前に人々に灯ってゆく希望。

だがそれに反し、遙に募っていくのは危機感ばかりだった。

「姉さん……」

ウルトラマンがああ怪獣を倒すために現れたとしたならば、迎えるのは遙にとって

最悪の結末なはずだ。

それだけは絶対に回避しなければならない。その想いに突き動かされた身体は疲労感も忘れ、火蓋が落とされようとするその場へと駆けた。

「これが……」

自らも同等の体躯へと姿を変えつつ、春馬が見やるは共に降り立った巨人——ウルトラマンエックス。

電子的な光彩を纏う姿はどこかメカニカルであり、その中心で名にも冠しているX字のカラータイマーが輝く。

そのこれまで見てきたウルトラマン達とは異質な姿に、彼が別の世界の戦士であるということを改めて実感する。

『光の国やU40、O—50のウルトラマンでもない……本当に俺達とは違うんだな』

「特別感あってカッコいいだろ……でもまあ、その辺の話はアレが片付いてからにしよ



うぜ」

静かにエックスが視線を向けた先で正反対の騒々しさを纏う巨獣が唸りを上げる。

自分達が出現したことにより目標が変わったか。ともあれ町への侵攻を食い止めるという点では一先ずクリアらしい。

『デマーガ……なのか……？』

「確かに前戦つたのと似てるけど、なんかもつとずんぐりしてたというか……こつちのがゴツゴツしてんな」

タイガの思考を介し怪獣の情報が伝わる。

溶鉄怪獣デマーガ。肉体の大部分が溶けた鉄で形成された地底怪獣……このことだが、彼等の言葉の通り眼前で猛る奴は何かが違う。

頭部の角や一直線に並んだ鋭利な背びれという特徴こそ共通しているが、その肩や両腕からはそれらを遥かに凌駕する巨大な刃が伸びている。

「人んところから盗っていきやがったモン改造しやがって……そのセンスは好きだけだな！」

翔琉の世界で盗まれたスパークドールズという代物がデマーガであつた以上何かしら関係があることは確かだがまだ不明瞭な部分は多い。

だがそれでもとにかく戦って見ない限りにはわからないと言わんばかりにエックス

が突撃。打ち出した拳に続いて高く硬質な音が上がる。

「いつつで……ッ!? そんで熱ッ!？」

その強固な表皮によって弾かれた彼の拳からは焼けるような蒸気が昇っていた。

どうやら肉体の大半が鉄で構成されているというのは伊達ではないらしい。攻撃が通りづらいう上にその熱量で逆にダメージを受ける物理攻撃は得策でないか。

なら——、

『×スワローバレット×ッ!!』

瞬時にタイガと思考を共有。十字に組んだ腕から打ち出す光の刃がデマーガへと迫る。

だがそれらは振るわれた両腕の斬撃により容易く打ち砕かれ、それにより生じた熱波が逆に身体を焼き付けてくる。

『やっぱり普通のデマーガじゃないな……恐らくコイツも強化改造を施されてる』  
「ヘルベロスの時と同じ……」

ウルトラマンのいない世界に送り込まれる、ウルトラマンをも凌駕しかねない怪獣達。当然この世界の人類に対抗する術はないだろう。

何が目的でこんな行為に及んだのかは定かでないが、ただ一つ確かなのはここで負ければこの世界に、ここで出会った人々に明日はないこと。

その結末だけは阻止しなければならぬ。それが□彼女□に託されたやるべきことであり、自分の願いだから。

「…ねえタイガ、翔琉君。前にデマーガと戦った時って、どう倒した？」

『え、いや俺は訓練学校で習った程度で実際に戦ったことは……』

「俺も教えられる程のモンじゃないぞ。とりあえず殴りまくって倒したし……まあ仲間の力もあつたけど」

「じゃあそれでいこう」

「は？」

「俺達も力を合わせようってこと！」

そう言いながら相棒の身体を動かし、今度は自分達がデマーガへと突っ込む。

奴の間合いに入った途端に膨大な熱気が全身を包むが、充滿するそれらを切り裂くように放った回し蹴りが横腹を捉えた。

「えく……そんな単純にいく？ てか共闘ってそういう意味じゃないの？」

横目で伺った先でエックスが頭を掻く。

続けて吐き出されたため息の後に、その眼力はより力を増した。

「……けどまあ、嫌いじゃないぜそういうとこ！」

タイガが小刻みに連撃を入れる最中、文字通り横から割って入ったエックスのドロツ

プキックがデマーガの側頭部へ炸裂。

高い防御力こそあれどその衝撃までもは受け流し切れないか、雨のように散った火花と共に倒れ込んだ奴の体軀が大地を揺らす。

「よ、い、しよおッー！」

起き上がり様にデマーガの剣が薙がれるが、その一閃を搔い潜ったエックスにより首元へ叩き込まれるラリアット。

戦闘……というよりは本当に殴りまくる喧嘩に近いスタイルだが、互いの目配せさえ欠かさなければ連携自体は難くない。

『ウルトラフリーザーッー！』

立て続けにタイガから冷気が放出され、デマーガの纏う熱気と触れあい蒸発。一面を白煙が覆う。

視界すらも奪う白の世界、全てを染める白の中でも己が光を誇示するのは、虚空に描かれた交差する軌跡だった。

「エックスクロスチョップッ！！」

刻まれたX字の光が着弾に少し遅れ起爆。

規模こそ小範囲なれど爆発は爆発だ。生半可な攻撃は通さない奴にもダメージは入る。

『ツツ——！』

『ぐあッ……』

とは言え鉄の皮膚の前にはそれも決定打には至らない。

悲鳴を上げながらも堪えたデマーガの尾が空を切る音と共に振り抜かれ、直近のエツクスはおろかタイガすら巻き込み薙ぎ払った。

「あつっ……づいなもう！ 体温何度あんだテメエインフルとかそういうレベルじゃないだろ！ こつちまで熱上がってきたじゃねーか！」

あれだけラツシユを叩き込んだ反動により蓄積された熱とダメージに加え今の一撃。体温はオーバーヒート寸前にまで至らんとする。

そんな熱気と共に上昇してゆく苛立ちを隠すことなく、エツクスは奴の背後から両腕を回し——、

「病人は家帰って……寝とけッ!!」

ふわりと持ち上がったデマーガの体躯が頭から地面と激突する。所謂バックドロップというやつだ。

今度の一撃は流石に応えたか。起き上がりこそしたものの半ばグロッキーな様はまさしく隙だらけと見た。

『一気に決めるぞー！』

「つしやあッ！」

好機を逃すまいと両者共にエネルギーを増幅。爆発的な光が集約してゆく。

「☒ザナデイウム——！」

「☒ストリウム——！」

七色の光が舞い、散華した電子の軌跡が夜空を彩る。

人知を超えた存在達が衝突する最中でありながら幻想的な雰囲気醸した直後、この戦いに終止符を打たんとエネルギーが解放され——、

「姉さんツツ!!!」

——真下から上がった叫び声によって妨げられる。

「……?」

「遥君……? どうしてこんなところに……」

ウルトラマンとして強化された視力がデマーガの足元にまで駆けらんとする遥を捉える。

逃げ遅れたのか、はたまた未来同様に梨子を探しているのか……その答えはすぐに判明した。

「はあっ!?!」

『……どうした?』

「い、いや……さつきデバイザーで解析かけておいたアイツのデータが出ただけ……」

遅れて翔琉から上がった驚嘆の声。

その訳を問うたタイガに返ってきた答えは……信じ難いものだった。

「アイツの体内から、人間の生体反応がする……」

『なに……!?!』

「……え、じゃあ……」

逃げる気配もなく、足元でデマーガに対し叫び続けている遥の姿に答えを悟る。

デマーガの体内にいるという人間の正体、それは――、

「梨子さんが怪獣に……?」

どういふ経緯があつたのかは春馬の知るところではないが、少しでもその可能性が浮上した以上これ以上の攻撃は加えられない。

だがここでデマーガを放置する訳にも……、

(どうすれば……)

纏まらない思考ばかりがぐるぐると回る。

必死の呼び声が何度も木霊する中、それを蹂躪するような咆哮が再度轟いた。

「梨子ーッ！ ユリーッ！」

町が焼き付く臭いが漂う中、二人の少女の姿を求め未来は叫び駆ける。

怪獣が放つ熱波が原因か、至る所で起こる自然発火により辺りは今にも火の海と化さんとしている。

もし二人が逃げ遅れこの火に飲まれていたなら……最悪の方向に傾く想像を振り払



い未来は何度も叫んだ。

「ッ……！ ユリッ！」

紅蓮の中に一ヶ所、不自然に火の手の及んでいない場所にユリの姿を見つけ駆け寄る。

だがそこにいた彼女の姿は、直前まで談笑を交わしていた相墨ユリとはまるで異なる。

「……未来」

黒が翻る。

炎の中で佇む彼女の様は恐怖すら覚えるほどに異質に映った。

「何してんだよこんなところで……ほら、早く避難するぞ。千歌だって——」

「……未来は」

千歌。

その名に反応するように眼光の質を変えた彼女は、別人のような威圧感を纏って言った。

「未来は知ってたの？ 千歌が、スクールアイドルをしようとしてること」

問われた意味がわからなかった。そして同時に恐怖する。

一体どうしてここで、こんな事態の中それを問うのか。熱気に反して冷や汗が伝う。

「そうだけど……今はそんなの関係ないだろ。早く逃げないところも——」  
「……そう」

直後、迸った闇に身体が浮き上がるのを感じた。

紙のように宙を舞い、地面を転がる。何が起こったのかわからぬままで見上げた先では一転して黒い花卉のような装束姿となったユリが衝突する巨人と巨獣に掌を向けていた。

「あなたにも、まして千歌にも恨みはないけれど……」

底の知れない瞳で渦巻く憎悪と殺意。

放出されたどす黒い波動はタイガ達と対峙する怪獣へと注がれる。

その刹那に膨大な熱波と闇が怪獣を中心に吹き荒れ、二人のウルトラマンを薙ぎ払った。

「……スクールアイドルを生もうとするのなら、消す……それが、私の使命だから」

## 15話 陽が沈む

「スクールアイドルを消す……?」

紅蓮の中で揺れる黒。

己の眼前。常闇を纏う少女の眼光に対し、未来は見上げる形で視線を重ねた。

「……な、何言ってるんだよ……。ほら、早く逃げないと……」

滲む脂汗は炎による熱気のせいでない。感情よりも先に理性が理解してしまっているんだ。

この世界に迫る脅威……その根源が彼女であることを。

「……逃げてても無駄よ。もうこの世界は終わる……終わらせるから」

未だにそれを拒む心の反面、理性の出した結論を裏付けるように増大した邪気が猛る怪獣と同調する。

直後に発生した黒雷はウルトラマン達はおろか周辺の木々や家屋すらも薙ぎ払い、爆音の中に人々の悲鳴が掻き消えていくのが聞こえた。

「……なんでだよ……!」

壊れる音がする。何か大切なものが失われていく。

そんな光景を目の当たりにしてなお、未来の心は彼女を悪として、敵として認識できないでいる。

「なんでだよユリ……！ お前笑ってたじゃん……楽しくなかったのかよ！」

「ツ……！」

脳裏に過る笑顔のままに身体を起き上げ叫ぶ。

だがその声にユリは一層の不快感を滲ませ、波のように生じた闇は再度未来を吹き飛ばした。

「もう話しかけないで……あなた達といると、揺らぎそうになる……！」

苦悶の表情の中に垣間見えた救いを求めるような色。

正反対であるはずなのに、その黒はどうしてかかかってに触れた白を思わせた。

「触れるんじゃないかった……！ こんな想い、もう感じなくなかったのに……！」

目尻から舞った輝きがどちらの彼女のものであるかはわからない。

ましてその雫の中に何が映るのかなどわかるはずもないけれど。

「焼き付いて、離れない……！」

でもそれは紛れもない、彼女の心が上げた叫びなんだ。

「……だから消えて、未来。千歌も、スクールアイドルも………この世界と一緒に」

「ユリツツ……!」

この世界にいてはならない存在なのはわかっている。でも、それでも見過ごすことができなくて。

遠ざかる彼女に差し伸ばした未来の声——届くことはなかった。

『ぐツ……?』

「なんだよコイツ急に……!」

大地から昇る黒い稲光。

天変地異、世界の終わり。不穏な単語を想像させるその光景の中心にあるのは戦いの最中で突如藻掻きだしたデマーガだった。

『ツツツ——』

!!!

「梨子さん……!」

爆音に続いて上がる悲鳴に混ざるかのような少女の声タイガの足を動かすが、デマーガを囲うように昇る黒雷によってそれも叶わない。

それどころか徐々に雷はその範囲を広げ、何もかもを蹂躪しながら全方位へと侵攻を続けてゆく。

「最後っ屁つてやつか……? よくわかんねえけどこのまま一気に——」  
「待つてよ……そしたら梨子さんはどうなるの?」

「わかんねえけど……それでも今コイツをほっとく訳にもいかねえだろが」  
静止の声を掛けるも、エックスは構わずデマーガへと猛進してゆく。

確かに彼の言うことにも一理ある。春馬がこうして立ち止まっている間にも奴により町は破壊されその数の悲劇が生み出されかねない。

《CYBER GOMORA ARMOR》

《ACTIVE》

怪獣の鎧、とでも称するべきか。

両腕から胸部にかけて蒼い装甲が形成され、備わった巨大な爪が黒雷ごとデマーガを切り裂かんと迫る。

『ツツツ——!!!』

感情と論理が合致せず、ただのその成り行きを眺めていたその時。

渦巻いていた闇の瘴気が一気にデマーガへと集約してゆき、一際大きく轟いた咆哮と共に赤黒い光線と化して放出される。

「がッ……ああああッ……!!?」

「翔琉君……!」

両腕を交差し防御態勢に入るも、迸った熱線は鎧ごとエックスを飲み込み爆ぜる。

更にその余韻は一度の爆発に収まらず、残留した熱は大气すらも燃やしやがて生じた二度目の爆風はタイガの肉体をも吹き払った。

『ツ……マズいぞ……!』

なおも黒雷と熱量の増幅は止まず、狂ったように両刃を振るうデマーガによる破壊が周囲の悉くを粉碎してゆく。

確かに一瞬外的なエネルギーの流れを感じ取りはしたが……まさかそれによる暴走とでもいうのだろうか。

「……春馬、お前アイツの動き止められる?」

「え……？」

「祓える保証はねえけど、動きさえ止められれば浄化技が叩き込めるかもしれねえ」

「ツ……！ ほんと!?!」

胸の輝きも点滅を始める中、不意に翔琉から持ち掛けられた提案。

以前脅威が膨れ上がっていることに変わりはないが、それでも差した希望に頻りに頷いた。

『もしかしてお前、そのためにその鎧を……？』

「攻撃は最大の防御つつーだろ。アイツをどうするにしろ、本気でやらねえことにはどうしようもねえだろうし……多少荒っぽいのは堪忍な！」

突撃を再開したエックスの鎧とデマーガの刃により硬質な衝突音が上がる。

春馬自身、梨子への影響を鑑みるとあまり荒々しい攻撃は好ましくはないが、ここは彼の言う通りか。

腹を括れ。心中でそう反芻した後、タイガとの同調を高める。

『動きを止めるって……タイタスもなしにどうするつもりだ春馬』

「さあ……でも、やるしかない！」

身を屈めたエックスの背を転がる形で前へと出で、そのままデマーガの脳天に踵を落とす。



表皮の堅いデマーガの性質上、打撃攻撃で攻め続ける限りは同化している梨子にもダメージは届きにくいはずだ。

反動を考慮すると得策とは言えないが、今は地道に叩き込んでいくしかない。

『ハンドビームッ!!』

地面に散らした光線が粉塵を舞わせる。

視界を包む煙幕に互いの姿すらも覚束無くなるがただ一つ、中央に位置する熱源へ狙いを定めた。

「おん……どるあッ!」

アーマーの巨大な爪により繰り出されたアッパー攻撃が地面もろともデマーガを擲き上げる。

その直後に装甲を解除したエックスの姿を確認しつつ、奴の尾に腕を回したタイガは力任せにその巨体を放り投げた。

「よし……ピリファイウエーブ!」

エックスの掌から照射される螺旋状の光。

浄化光線。彼の言葉の通り、包み込むような光を受けたデマーガはやがて両腕を下げ

『ツツツ——!!!』

即座に放射した熱線で周囲を焼き払う。

効いていない訳でないのはすぐわかった。闇を払ったその瞬間から、また新たな闇が湧き出ているのだ。

「くっそ、ダメか……」

『邪気が強すぎる……!』

もつとその根底、奴を構成する闇の根源から被わない限りこの悲劇に終わりはない。だがそんな光をどうやって——いよいよ最悪の事態を覚悟したその時だった。

「ツ……!」

ふと灯った温もり。

その温かさに引き寄せられるように腰元へ伸ばした腕が掴んだものは、春馬に最後の望みを抱かせる。

「……一か八かだ!」

これが最後の可能性。

ならば、賭けるしかないまい。

《アース！》

《シャイン！》

「輝きの力を……手に！」

次元を隔てたこの場所で手に入れた光。  
受け取った想いや輝きはきつと時空だつて超える……そう信じて。

《ウルトラマンタイガ！ フォトンアース!!》

黄金の鎧を纏い顕現する。

大切な人から受け取った、様々な想いの籠った力。

「翔琉君！」

「わかつてらあッ！」

力強く大地を踏みしめたエックスに再度形成されるゴモラアーマー。

間髪なく集約されてゆく光の粒子を鎧を介し増幅させてゆき、やがてその一撃が黒い巨獣へと向けられる。

「**ゴモラ超振動波**アッ!!!」

再び熱線を放射せんとするデマーガに一步先んじてゴモラアーマーのクローが着弾。同時に衝撃波が辺りを疾走した。

「オオオオオオ……!!」

翔琉が最後の力を振り絞って作った、正真正銘のラストチャンス。

絶対に無駄にはしない。その誓いすらも光へと変換し——解き放つ。

「**オーラム**……ストリウウウウウム**ツツツツ!!!**」

オーロラを纏った黄金の奔流が疾走。デマーガを飲み込むと同時に奴の黒い肉体が光を帯びてゆく。

『ツツツ——……………』

春馬の祈りが通じたか、またあの学校に救われたのか、それはわからないけれど。

やがて全身を包んだ光が変化した海のような水色は弾け、霧散したその跡には横たわる少女の姿があった。

「やつ…………た…………！」

爆発的な歓声が上がる中、疲弊し切った視線を翔琉と重ねる。

纏っていた鎧は既に霧散した後だった。激しく点滅するカラータイマーも示す通り本当にジリ貧だったらしい。

『…しかし、途中デマーガの放った邪気は一体……』

「一旦それ後にしない？ この世界、なんか変身してるだけでも疲れるし」

「…それもそうだね。ありがとう、翔琉君」

「なーに言ってるの。最終的に決めたの春馬だろ……まあでも、次は任せとけよ」

「…………うん！」

突き合わせた拳を重ねる。

脅威はまだ不明瞭だけれど、彼等となら退けられる。そんな根拠もない確信を抱いたその時、

「……悪いけれど」

「『ツツ……!?!』」

未だ止まぬ歓声の中でも確かに触れた声。

直接頭の中へと流れ込んでくるようなその響きに警戒体制へ移ろうとするが、それすらも早く、強烈な脱力感が全身を駆け巡った。

「なっ……ん……!?!」

『何だ……これ……!』

力が、光が、抜け落ちてゆく感覚がする。

重くなる身体に抗い必死に動かした視線で見回した景色の中に一つ、宵闇に浮かぶ影を認識した。

「…女の、子…!?!」

「お前はツ……!」

翻る黒を身に纏う少女。

偶像の衣を塗り潰したかのような装束を揺らす様は、かけ離れたものでありながら近しい輝きを思わせる。

「あなた達に次はない………消えて」

「う……ああッ………！」

少女を中心に闇が渦巻いた途端に加速した虚脱の覚えに思考すらも乖離してゆく。朧げな視界が最後に映すのは、色を失ってゆく相棒の肉体だった。

「……あ………！」

灯火が消える。

実像を保ったまま□空□となった肉体は無機質な硬質物へと変換され、やがて意識もろとも暗闇の底へと沈んだ。

## 16話 心の在処

「——聞こえますか！ 聞こえますか!?!」

「先生！ 至急急患の処置を——」

「先生！ 脈拍血圧共に低下しています！ 先生!」

「クツソ……………全然手が足りない!」

耳に入ってくるのは焦燥に満ちた音吐や不吉な機械音ばかりだった。

「…翔琉と春馬は?」

「…………聞かなくてもわかるだろ」

「…………まあ、な……」

息苦しきすらも覚える逼迫した喧騒に包まれる。

怒号に悲鳴、すすり泣く声が満ちた光景は、現実のものとは思ひ難かった。

「…………怒ってるか?」

「…それなりに。でもまあ、お前だけでもちゃんと戻ってこれてよかったのかもな」



白い病室の戸枠に背を預けながら、その奥、隅のベッドに寝かされた少女に視線を流す。痛々しい包帯姿のまま目を閉じた彼女を囲うのは幼馴染達と後輩だ。

意識が戻るかわからない。失意の中で未来が聞かされたのは、希望とは程遠い梨子の容態だった。

『——数時間前、静岡県沼津市に出現した巨大生物は、続けて現れた二体の巨人との戦いの末に爆散。現在にまで被害が拡大する事態には至っていませんが、毎年現地で開催されている漁港祭と重なったこともあり、周辺家屋の倒壊に加え死傷者も多数いるとの報告が——』

同室の別患者の流すラジオが不快な触りで耳を撫でる。

事務的に、淡々と羅列される無機質な言葉。

自分は被災してない、所詮は外野で起きた他人事。未来自身ニュース等に何度も感じたことだが、いざ自分がその立場になると気分の良いものではなかった。

『なお巨大生物を倒したと思われる二体の巨人についてですが、こちらはかつてテレビ放送された特撮番組、ウルトラマンに登場する巨人と酷似しており——』

「……ホントにいたんだな。ウルトラマンも、怪獣も」

ラジオの句を継ぐように、普段よりも低い響きで陸が零す。

「正直、春馬達の話聞いてもいまいち信じ切れてなかったけど、こう目の前で暴れられる

とそうせざるを得ないっつーか……………受け入れるしかないのかもな」

その言葉が向けられているのはウルトラマンの存在だけではない気がした。

迫りくる破壊が回避しようのないものである……………絶念に近い靄は、彼だけでなく、病院全体に充満していた。

「…ユリ」

数刻前の光景を思い起こす。

この町に襲い掛かった厄災、その全ての根源である少女。

もしあの時、未来の声が届いていれば何かが変わったのだろうか。

「……………」

いいや、きっと何も成すことなんて出来なかったはずだ。

だってこの世界の日々々未来は英雄でも、ましてウルトラマンでも何でもない。どう

しようもなく非力な……………ただの高校生なんだ。

「俺は……………」

幽霊のような足取りで病室を離れる。

「おい、みら——」

「ごめん……………ちよつと一人にしてくれ」

親友の声すらも撥ね退けた自分は今きつと——酷い顔をしているのだろう。

降りしきる雨は、さながら零れ落ちる涙のようで。

打ち付け広がってゆくそれら拭うこともしないまま、未来はずぶ濡れになった身体を堤防まで運んだ。

「……どうすればいいんだよ」

曇天を見上げる。

その中に映る物言わぬ彫像と化した二体の巨人の姿が歪み揺らいで見えるのは、きつと雨粒のせいではないのだろう。

「…俺さ、これでも、結構頑張ったんだよ。俺なりに、普通なりにも何かできないかって……」

置いて行かれるような疎外感、劣等感に身を焦がしながらも、それでも答えを模索しているつもりだった。

春馬達と出会った意味、勇者と呼ばれた所以……そして未来自身の行く末を。

「……でももう、俺がどうしたいのかもわかんねえよ」

けれど、立ち塞がる現実と虚構はそれすらも許してはくれなくて。

進むことだけに必死になり過ぎた末、いつの間にか歩む方向も、戻る道すらも見失ってしまった。

「教えてくれよ春馬………俺は一体、どうすればいいんだよ………」

立たされた断崖の端で、擦れた声がヒーローへと縋る。

でも彼から返る声はなかった。地面を叩く雨音だけがいつまでも耳に障る。

「……あの子はもう、忘れちゃったのかもしれない」

水滴の音が変わって触れたのはそんな声だった。

耳だけじゃない。頭の中にも直接響くような声。

近しいはずなのに随分と遠く感じるようなその感覚は、未来の脳裏にとある少女を呼び起こさせた。

「君は……」

「……夢見る想い……始めは、それだったはずなのに」

麻色の髪と純白を揺らす、赤い靴の彼女。

ウルトラマンに怪物、そしてこの世界の危機。その全てに未来が触れる切っ掛けとなつた、始まりの少女だ。

「……なあ、教えてくれ。君とユリは一体、なんなんだ？」

「……友達……ううん、それよりももっと、大切な子」

あの時よりも遥かに近くに感じる彼女は、今にも泣き出しそうな顔色で語る。

「追いかけてたんだ。同じ夢を、一緒に」

「君達は……スクールアイドルだった、ってこと？」

「うん……でも、叶えられなかった」

滲んだ瞳に映る景色は、あの時のユリと同じものなのか。

苦しうに、心を痛めるように俯いたまま彼女は続ける。

「……そんな時に、私達の世界は滅んだ」

「……え……」

「奴等が来たの。そしてユリは……」

あの光景を見た未来には、聞かずともその続きは理解できた。

経緯までもはわからない。けれど事実なのは、ユリが奴等に加担しているということ。

「……一緒に、やってたんだよな……スクールアイドル。なのに、なんであんな……」  
向けられた表情は鮮明に焼き付き離れようとしない。

スクールアイドルを消す。本来それが存在しないこの世界においても、ユリは狂氣的なまでにその渴きを果たそうとしている。

「……わからない。確かなのはユリのスクールアイドルを消そうとする情動が、奴等のウルトラマンのいない世界を滅ぼそうとする目的に利用されてるってことだけ」

何が彼女をあそこまで歪めてしまったのだろうか。

始めはただの小さな、夢があっただけなはずなのに。

「でも、ユリがあ那时的想いを取り戻してくれたら、きつと……」

再び臍氣にその姿を翳ませる中、深厚な願いが口にされる。

彼女自身どういう状況にあるのかはわからないが、もうあまり時間も残されていないのが伺える。

「……無責任なのはわかってる。でももう、あなた達しかユリを救えるのは……」

昔から困った人や頼まれごとを放っておけない性質だった。それが緊急を要すれば猶更だ。

けれども今の未来には彼女の願いを、受け止めることはできなかった。

「……無理だよ」

彼女へ震える声音で返す。

「……確かに、春馬達の世界じゃ日々ノ未来は世界を救った英雄で、沢山の人を助けた勇者なのかもしれない………けど！」

捲し立てる語彙が強くなる。

歪む表情のまま悲痛な心だけが独り走りし、突き放すように未来は零した。

「……俺はヒーローなんかじゃない………そんなに、強くないんだよ………」

雫が頬を伝い、雨粒と共に地面を叩く。

幼き日の自分が、春馬に出会い舞い上がっていた頃の自分が今の日々ノ未来を見たらどう思うだろうか。

呆れたと失望されるか、意気地なしと罵られるか………でも仕方がないじゃないか。

だってこれが紛れもない——未来自身の現実なのだから。

「……私には、何も言えない」

言い切った末に上げた視界の先にあつた彼女の顔は……とても、悲しそうに見えた。「この答えは、あなた自身が見つけなければいけないことだから……でも、あなたの心を否定するようなことはしないで」

初めて触れたあの日とは反し、揺らぐ彼女の白が黒に溶けてゆく。

「思い出して……あなたの、夢を——……」

やがて残響していた声すらも翳み、消えた。

一層勢いを増した雨天が冷たく身体を打ち付ける中で見上げた空は暗い。

夜明けはまだ——遠かった。



## 17話 隣り合う者

「……つたく、派手にぶっ壊しやがって」

焦げ付く臭気が未だ残留する、昨日まで賑やかな催しがあつたはずの場所。

黒に焼かれ粉碎された一夜限りの城の残骸を握り、陸は沸き立つ感情を言霊として散らせた。

「……ちつたあ夢見させてくれたっていいじゃんかよ」

怪物と呼称された巨大生物。その襲撃から一夜が明けた。

ただじつとしていてもどうにもならないと参加した瓦礫の撤去作業だったが、そこで見た景色は心を抉る。

「やっぱりここだった」

「……曜か」

親しんだ気配を感じ取りその名を呼ぶ。

辛気臭い顔ばかりしても仕方ない。せめて自分だけでも前を向くような顔をしてい

たい。そう言っていたはずの彼女の笑みはどこか悲し気に映った。

「……いいののか？　梨子んとここにいないくて」

「……うん。ずっと私達がいても、家族の人に迷惑だろうし……」

それでもなお笑みを保つ曜はそのまま陸の隣にしゃがみ込み別な破片を手取る。

殆ど炭と化した中、微かに残る文字は指をなぞらせた途端に崩れてゆく。小さく、一時とは言え形になったはずのそれが壊れて行く様は胸に突き刺さるようだった。

「……やっぱり、諦めきれないじゃん」

「…………うっせ」

絞り出したような声に、それ以上の苦悶を滲ませて返す。

幼馴染……いや、最早そんな言葉も当て嵌まらない関係が故か。

口にせずとも、伝えずとも互いの考えていることがわかってしまう。本当に面倒くさいものだ。

「嬉しかった？　屋台出せて」

「……そうに決まってるだろ」

聞かずとも知り得ているだろうに、それでも敢えて問いかけてくる彼女の真意を陸は知っている。

何も変わらない。諦めているのはいつだって陸一人だ。

「こんな小つちやい屋台だったけどさ、それでも俺には自分の店持てたみたいで嬉しかった……夢でも叶った気分だったよ」

料理が好き。既に幼馴染達には認知されている通り、それは紛れもない陸の本心だ。

その道を歩みたいという願望も常の事で、だからこそ漁港組合から屋台の枠を譲って貰った時は心底舞い上がったものだ。

「……けど結局これだよ。なんもかんもぶつ壊されて、零れていった」

無意識に力の籠った手の中で黒化した木片がまた崩れる。

「いつまでもタラタラ未練残してつからこうなんのかもな……こりやばつぱと家業継いだ方が——」

「私は」

心境を代弁するかのように零れ落ち砕けてゆく屋台夢の残骸。

その勢いのままに流れ出る無機質な声は、相反するような熱を帯びた声により焼き払われる。

「……私は、諦めてほしくないな」

漲る想いが触れ、熱くなる。

わかっつていつつ目も背け続けた。彼女からも、自分からも。引き延ばし続けた返答は時が経つほど難解に膨らんでゆく。

「陸！」

そんな折に駆けてきた親友の存在は救いだっただのか。

話題を、視線を逸らすように彼へ顔を向けると、努めて普段通りに振舞う。

「おう未来。丁度いいところに来た、ちよつち片付け手伝つて——」

「やっぱりやるしかないんだよ！」

「あ……？」

だが寄せられたのはそんな平静を瓦解させてくるような剣幕で。

自虐を孕んだ、絶るような様は、どこか哀しきすら覚えさせた。

「翔琉達の話だよ。見ただろ？ 本当にウルトラマンが存在するのを………だったら

陸だつて——」

「……まーたあの夢のことか」

ちらりと曜を一瞥しつつ小声で返す。

二人のウルトラマンが倒されて以降、翔琉と春馬は一切姿を見せていない。それが何を意味するのも理解している。

「……悪いけど、今それどころじゃないんだよ」

伸びた手から逃れるように、手当たり次第に瓦礫を抱えては足早に距離を作った。

「……俺にや無理だ」

ふと、脳裏を過る▯別の世界の自分▯の姿。

特別な力とか、それ以前に。きつと彼は自分よりも強いのだろう。……理解せずとも変われずにいる。そんなもどかしさも、いつの間にか苦しいものではなくなっていた。

絶望と共に空を覆う▯蝗▯いなしの群れ。

文字通りの暗雲が世界を包む中、天を駆け集約してゆく光が瞬いている。

—— 『来たぞ遙……』

—— 『うん……行こう！』

その真下。降り注ぐ光の柱を受け止めるように手を掲げる二人の少年。

性別も、種族の垣根すらも超え、共に歩んできた全ての者の想いを受けて立ち上がる。

—— 『………』  
—— ツツ!!!

全てを震わせる響きで□その名□を叫ぶ。  
 途端に舞い降りた光は形を変えて空へと昇り——顕現した。

赤い大地の巨人と、蒼い海の巨人。

轟音を上げて復活を遂げた二体の□ウルトラマン□は、数多の声と共に大空へ飛び立ち——、

「……………ん」

暗い世界から一転、開いた眼に一面の白が映る。いつの間にか寝ていたらしい。

一縷の希望を抱き見上げた先には、未だに瞼を閉じたままの姉の姿があった。

「……………」

妙な夢だった。自分がウルトラマンへと変身し世界を救う夢。

未来の話を聞いたからか、はたまた否定した本物のウルトラマンをこの目で見たからか。ともあれ遙の頭は妙な現実逃避に走ってしまっているらしい。

「…馬鹿馬鹿しい」

自分自身に辟易とする。

世界を救う英雄にでもなるつもりなのだろうか。奪って、逃げ続けることしかない自分が。そんな烏滸がましいこと許されるはずもないのに。

「…あ、起きた」

握る拳に力を込めたその時、不意に背後に気配と声を感じ取り振り返る。

「国木田さん……？ それと………」

「…津島つしまよ。クラスメイトの名前くらい覚えときなさいよね」

風に靡くカーテンを背に佇むのは同級生二人。

どうしてここに。その意を問うよりも早く、彼女達は自ら弁を継ぐ。

「勝手に来てごめんね？ 遥君、昨日からずっとお姉さんに付き添ってるって聞いたから……」

「心配でたまらない、って感じだったから私が連れてきたのよ。今病院もてんやわんやで検問も何もないしすんなり入れると踏んでたけど、思った通りね」

得意気に語る彼女を花丸が不謹慎ずらと諫める。

見慣れたはずの幼馴染コントも今はばかりはぎこちなく見えた。

「ま、倒れてるんじゃないかって心配してたけど一応大丈夫そうね。ずら丸あやすのも

楽じゃないんだから」

「善子よしこちゃんは一言多いすら。……それで、どうなの？ お姉さん……」

三人揃って梨子に視線を落とす。

包帯姿のまま目を閉じ横たわる姿は昨夜となんら変わりない。

「……外傷は別に、大したものじゃないけど……何か、精神的な要因が覚醒を邪魔してる……もしかしたらこのまま目を覚まさないかも、つて」

一気に重苦しい空気が充満するのがわかった。軽く花丸を抛揃っていた善子でさえも今は言葉を飲み込んでいる。

「……僕……せいなんだ……」

ズシリと押し掛かってくるような重圧が自然と口を動かす。

「……僕が、姉さんから何もかも奪ったから……」

「遥君……？」

伝えるべきでない。話してはいけないとわかっているのに、一度堰が切れた感情は構わず言葉を羅列した。

「……逃げてきたんだ、僕。向こうじゃ天才だんだ色々言われてたけど、それが重くて、全部ほっぽり出して逃げてきた」

自慢じゃないが昔から周りよりも頭がよかった。



夏休みの宿題で提出した自由研究がどこだかの学会の目に付いたのはいつのことだったか。最早覚えてもいないが、それが地獄の始まりだったのは忘れもしない。

若すぎる天才。次世代を担う天才の一角。一部で囁かれ始めたその称号と期待に心を蝕まれ続ける日々。

俗世離れた肩書きに中学では孤立し、いざ君の本領が発揮できると誘われるままに入學した高校からは一月と持たず逃げ出した。時を同じくして騒がれていたもう一人の天才との合同研究とやらがあつたらしいが、当時の遥に周りを気にする余裕はもはやなかった。

ただ一つ、ずっと慕ってきた姉の存在を除いて。

「……………それで、家族でこっちに越してきたんだ……………姉さんも巻き込んで」

投げ出すように己の過去を吐露した後、眠ったままの姉に懺悔するように零す。

「姉さん、中学の頃にピアノで全国大会に出るくらいでさ、結構注目されてたらしいんだ……………だからきつとあのまま続けてたら凄いピアノリストになってたはずなのに……………それなのに僕のせい……………」

ピアノのことだけじゃない。学校や友人、東京には姉にとって大切なものが沢山あったはずなのに、全て己の身勝手に奪ってしまった。

それに関して直接梨子が遥を責めたことはない。きつと姉としての優しさだろう。

けれど昨夜、怪獣と化す前の姉に向けられた黒い憎悪は……紛れもなく彼女の心の内にあつた感情だ。

「…で、でもそれが原因つて決まった訳じゃ……」

「じゃあ他になんだつて言うんだよ！」

感情のままに吐き出した後にハツとした。善子だけでなく同室にいた他の患者の視線までもが遥に向いている。

最低だ。更なる痛みが胸を抉った。

「……ごめん。でももう、何にもわからないんだ……」

耐え切れなくなり、また視線を落とす。

「……のままじゃいけないのはわかっているのに、進むのが、変わるのが怖くてずっと逃げてきた。自分からも、姉さんからも、国木田さん達からも……そしたらもう、何も見えなくなった」

視界が橋から滲んでゆく。

もう先が見えない。映るのはいつだって、視界を埋める白だ。

「…もう歩けないよ。進むなんて、僕にはできない——」

その白を雫が打った時、顔全体を包んだ温もりに言葉を遮られる。

抱かれる形で自らが花丸の腕の中にある。そう気付くのに時間は掛からなかった。

「ずら丸……？」

「……大丈夫だよ」

気恥ずかしさの反面、すつと何かが晴れてゆく感覚がする。

穏やかに囁く彼女の声は、いつになく遙の奥へと浸透してゆく。

「……ごめん。まる達は当事者じゃないから、大丈夫とか、気にしないでとか、軽々しくそんな無責任なこと言っちゃダメだよね」

抱くのはまた、あのシンパシーだ。

触れているのが怖くて、何度も遠ざけたこの熱が、今度は彼女から伝わってくる。

「……でも、まる達は遥君の味方だよ」

見上げれば朱を差した彼女の顔があった。

これまで何度も冷たく接してきたはずなのに、返ってきた熱はいつになく温かく、氷を融解させてしまう。

「……アンタ意外と大胆よね」

「ツツ……！」

割って入った声にようやく彼女の腕の中から解放される。引いてゆく熱に代わって妙な喪失感が込み上げてきた。

「…長居するのもアレだし、ずら丸がオーバーヒートしそうだからそろそろ連れて帰るけど、私も概ね同意よ。ぼっち同士のシンパシーってやつ？ まあそういうことだから、また今度ね遙」

呆れたように溜息をついた善子に花丸が連行されてゆく。

背中を戸枠の奥へと消す寸前、こんな独り言を置き去りにしながら。

「ああそれと、アンタがよく一緒にいる日々ノ先輩……だっけ？ 今度会ったらお礼言つといってくれない？ あの時言い損ねちゃったから」

破壊された町並みを見下ろす。

ここに至るまでに幾度となく見てきた光景のはずだ。今更感じるものなど何も無い……そのはずだったのに。

「……」

胸の疼きが止まない。

蠢く度、痛む度に思い起こされるのは……この世界で触れた少年と少女の顔だ。

「……やっぱり、触れるんじゃないかった」

この痛みはきつと己が願いに支障をきたす。これ以上存在してはいけない痛みだ。

だからこの世界ごとそれは忘れ去らなければいけないのに……自分の心はどこかでそれを拒んでいる。

『……舞台は整いましたね』

渦巻くものを抑え込むように胸へ手を当てた時、離れていたはずの声が舞い戻るのが感じ取る。

「……今までどこ行つてたの？」

『なに、少し準備をしていただけです。ウルトラマンの存在が気掛かりでしたので………けれど今となつてはその必要もなくなりましたね』

黒いローブをはためかせ、甲冑を纏つた☒☒は巨人達の彫像を眺め嗤う。

ウルトラマンは既に封じ込めた……もうこの世界に、絶望に抗う術はないということだ。

『始めましょう———終わりの刻を』

## 18話 光立つ時

鳴り響くサイレン。至る所で上がる悲鳴。そしてそれらを掻き消す咆哮。

絶望とは、きつと終わりが無いからそう呼ばれているのだろう。地獄以外の何物でもない光景を前に人々は悟る。

ザンテツウチユウカイジユウ  
斬鉄宇宙怪獣

キングデイノゾール

ウチユウセントウジユウ  
宇宙戦闘獣

キング  
皇コツウ

悪夢と言いつつ表す他ない惨劇から一夜が明け、未だ深々と傷跡の残る町に☒それら☒は再び現れた。

大海を震わせ、大地を割き、大切な町を壊してゆく。逃げ惑う人々の中に最早希望など残されてはいなかった。

シヨツカクウチユウジン  
触覚宇宙人

スーパーバット星人

『…人間に未来はない。滅べ……!』

黒い竜巻に乗り、舞い降りた悪魔の嘲笑が渦巻く。

甲冑のような装甲に覆われた肉体は燃ゆる火災に照り映え、爆風によつて靡くロープは翼が如く黒を広げる。

自らもまた路傍の雑草を踏み躪るように命を摘み取りながら、奴は終わりゆく世界への侵攻を開始した。

「うええ……ままあ…………!」

「君、大丈夫?!」

騒ぎの中で逸れたのか、我先にと避難する流れに突き飛ばされた少女を宥めつつ未来は顔を顰める。

宇宙人が一体に怪獣が二体。何もかもが昨夜を上回る事態を前にただ逃げることしか出来ない。

『ツツツ——!!!』

程無くしてどこかの軍と思しき戦闘機が隊列を成して攻撃を仕掛けるも、瞬時に壊滅。

爆散したそれらが火の粉となって降り注ぐ様は、より一層人々の恐怖を駆り立てるようだった。

「春馬……！」

叶わぬ祈りを捧げるように物言わぬ巨人の名を零す。

ピンチの時に現れるウルトラマンはもういない。

少女の真意も、その言葉の意味も、何も掴めない自分達が行き着く先はもう……破滅しかないのだろうか。

漂うものは昼間となんら変わらない。鼻腔を焼くような焦げ臭さと、置き去りにしたままの未練。

「……避難勧告、出てるんだよ。」

阿鼻叫喚の波が寄せては返す中、ただ一つ、静かな声が耳を撫でる。

最早振り返らずともわかる。行く先も、情動も何もかも、仙道陸という人間を知り得ている者など渡辺曜の他に存在しない。



「…なんか、そんな気も起きなくてよ。未練ついでにここで死ぬのもアリなんじゃねえかって」

「…そっか。じゃあ……」

燃え切らなかつた夢の残骸に腰掛ける身体は重い。逃げることも抗うことも諦めた心が重石となるかのようである。

何もかもが沈む感覚のままに口を動かしていれば、小さな気配が隣に鎮座した。

「……………おい」

「あんまりスペースないしこうでもしないと座れないじゃん」

「いや、そうじゃなくてだな……………」

悲鳴と共に咆哮が聞こえる。間もなくこの場所も火の海と化すだろう。

それなのに身を寄せて体重を預けてくる馬鹿を突つ撥ねようと動かした腕は、直後に発された一言によって撥ね退けられた。

「……………動かないから」

揺るがぬ意思を醸す語気。

これまで彼女のワガママに振り回されてきたのは一度や二度ではないが、今日この日に映るそれからはまた別の何かが含まれている。

そしてその正体を知るのもまた陸一人のはずだ。

「……夢を見るってのと現実から目え逸らすってのは違うんだよ。俺はずっと現実見てるフリして都合のいい理想に浸ってただけ……いつかは覚めなきやいけない夢だったんだよ」

「だったらなんで、今陸はここにいるの？」

向けられた二の瞳が嫌に痛く、顔を逸らした。

「…カツコ悪いよ。今の陸」

そんなの自分が一番わかっている。そう言いかけて飲み込む。

斜に構えて現実を見ている自分はカツコいい。そうやって己を誤魔化していたのは事実だ。

その様は彼女にはどう映ったのか……そんなものは想像に難くなかった。

「……………逃げないでよ」

より重く押し掛かってきたのは曜の身体だけではない。

これまでで手放そうとしたもの、目を背け続けたもの。その全てに押しつぶされるような感覚がする。

「……………今更どうしろってんだ」

それでもまだ逃げ場を探すように視線を上げる。絶望の巨影はなおも破壊の炎を広げ続けていた。

断続的に飛来する戦闘機も撃墜されてばかり。いよいよそれが抗いようのないものだ。と告げているようだ。

「どうしようもねえだろ……なんもかんも、もう」

情けないのだったってわかっている。カツコ悪いのだったって承知の上だ。

けど向き合う術なんて知らないから。結局最後までこうやって、背を向け続けてしま  
う。

「だからもういいよ。俺なんざほつといて、お前はさつさと——」

「……一人じゃないよ、陸は」

そんな背中に寄り添ってくるのはいつだって彼女だ。

どれだけ気概が無かろうと、期待を裏切ろうと、この熱だけはいつまでも傍を離れよ  
うとしない。

「……バカなのか？ こんなところにお前まで付き合う必要ねえだろ」

「こーらこーら、早とちりするな」

またそれに甘えた先にある結末を想像し、今ばかりは突っ撥ねる。

けれど隣り合う少女は頑としてそこから動こうとせず、揺るがぬ眼差しを陸に向け  
た。

「…陸はさ、基本的に人のことばっかりだよ。最近だつてずっと人のこと気に掛けて

るし」

「…未来のことならそんな大層なモンじゃねえよ。昔がどうだったかは知らねえけど、アレに関しちや俺自身から目え逸らしたかっただけだ。進路調査あったのはうちも同じだしな」

「……それでも、私は嬉しかったよ」

「はあ……？」

繋がらない言葉に対する間抜けた声は悲鳴と爆音に掻き消される。

それでも彼女の心だけは耳に届き、心を打つようで。

「実は……さ、今年の踊り子、引き受けるかどうか迷ってたんだよね」

「…いやお前、引き受けるも何もだいぶ前からやるつもりでいたんじゃ……」

「そのつもりだったよ。……けど、だんだん周りからも期待してるーとか、沢山言ってもらえてさ。そしたらなんか急に、怖くなっちゃって」

きゅつと、小さな手が握られるのが見えた。

完璧超人ヨーソロー。陸達幼馴染間でもたまに用いるその肩書き。

それは誇張でも嘲りでもない。実際、周りからいればそうなのだろう。運動に勉強その他諸々、曜はソツなくこなす。

「結構歴史のある行事だっというじゃん、漁港祭の踊り子。去年の果南ちゃん達のこと

もあつて気が立っててる人もいたからさ……期待通りにできるか不安だつたんだ」

「…ほんと、なんでパンクロックなんて選んだんだろなあの人等」

けど本当のところ曜はそんな器用な奴じゃない。

人並みに失敗だつてするし、隠れて悩んでいることだつて少くない……それは幼馴染である自分達が一番知っている。

「……で、そこに千歌のワガママか。そら不安にもなるわな」

「……うん。でもさ、陸が言ってくれたじゃん」

「え？」

「千歌ちゃんは私のこと信用してるから、そんな無茶苦茶なこと頼めたんだつて」

そう言えばと思ひ出す。

陸にとつては記憶にも残らないくらい何気なく口にした一言らしいが、彼女にとつては大きな意味を持つていたようで。

「上手く、言えないんだけどさ。私にはそれがすごく嬉しくて、頑張ろうつて気持ちになれたんだ」

真つ直ぐな瞳が向けられる。揺れる蒼はどこまでも深い。

「あの時だけじゃないよ。私は何度も、陸に背中を押してもらつたから……」

その蒼の中に映る景色など、最早覚えてもいないことだけだ。

少なからずそれらは今の渡辺曜を形作っていると、重ねた視線は語っていた。

「……だから今度は、私が支えるね」

だからこれは、そんな彼女であるからこそ口にできる言葉。

無責任でも押し付けでもない、誰よりも仙道陸を知る曜が語るのはいつだって陸の本心であり真実だ。

その曜を拒むことは即ち自らの心を否定すると同義であることも、とつくの昔に知っているはずだ。

「……簡単に言うなよなお前。俺一人の問題じゃねーし。家業が関わってくる以上親父達にはまあ………渋られるだろうな」

それでもまだ、逃げ続けてきた心は踏み出し切れずにいて。

情けなくも彼女の優しさに甘え、わかりきっているはずの答えを求めてしまう。

「……それでも、お前は——」

最後の逃げが言葉に成り切ることではなく、それよりも早く押し掛かる熱と重みに遮られる。

怪獣の火焰が近くに着弾したのはすぐにわかった。その衝撃と振動で腰掛けていた屋台の残骸は崩れ、陸を押し倒す形で覆い被さった曜の顔が視界いっぱい映る。

「……大丈夫か？」

「……………うん」

温もりも、柔らかさも、鼓動も、何もかもを鮮明かつダイレクトに感じる。

背も伸びた。髪型や顔つきだって多少なり変わったし、野郎の無骨さも女の子の膨らみだって立派に表れてきている。けれどそんなこと、ずっと互いを見てきた自分達からすれば気に留めるようなものでもなくて。

だからこそこうして直に伝わってくる互いの身体の感触は……まだ遠いはずの結論を急がせる。

「……………」

徐々に、何よりも見慣れた顔が近づいてくる。

紅潮するほどに朱を差した頬に潤む双眸はいつになく扇情的に瞬く。受け入れればきつとそれは自分のものになるし、彼女も拒みはしないだろう。

「……………やめだ」

でも、だからこそ、今は拒んだ。

重なりかけたそれらの間に挟んだ手で彼女を押し返し、起き上げた身体を小さく震わせた。

「また逃げることになるのはわかってる。…………でもさ、今のままのお前等でいてくれな  
いと、踏み出せる気もしないんだよ」

その先へ進めば、きつとこれまで通りの関係ではいられなくなる。

それはいつかは迎えるはずのものだ。けれど、今じゃない。

「簡単にや行かねーだろうし、また逃げたくなるようなこともわんさか待ち構えてんだろうけどさ」

千歌、果南、未来……そして曜。隣り合う温もりはいつだってそこにあつた何でもないものだ。

曜がそうであつたように、何でもないからこそ、それはふとした時に力をくれる。

「……お前が、お前等が今まで通りでいてくれんなら、なんか頑張れそうな気がするんだよ」

だからこれは逃げだ。踏み出すための、前に進むための逃げ。

背中を押された夢がある。もう逃げないと決めた道がある……その道を進むためにも、今はまだこのままでいたいから。

そしてそれを壊しかねない脅威はまだ、眼前に一つ残っている。

「……だからちよつと、行つてくるわ」

「え……？」

自然と口にした言葉に続き、再度想い起される☒彼☒の姿。

彼があらゆる理不尽も運命もぶつ壊し突き進んでこれたのは、案外こんな、何でもな



い温もりを守りたかつただけなのかもしれない。

だって、それこそが――、

「あああゝゝゝ……もう、結局俺もあの馬鹿と同じだよ」

ここにはいない友に思いを馳せながら愚痴のように吐き捨てた。

恐怖がない訳じゃない。でも進む勇気をくれた奴等がいるから、ここで逃げる訳には  
いかないんだ。

「…馬鹿みてーだよな。いくら本物のウルトラマンにそう言われたからって、別の世界  
じゃ俺もウルトラマンって話まで鵜呑みにするなんざ」

「ウルトラマン……?」

「そ。この年になつて何言つてんだって感じもするけど……でも信じちまったから  
な」

自分の答えは決まった。やるべきことだつてはつきりしている。

あとはあの時間きそびれた、彼女の答えを聞くだけだ。

「…だから、信じてくれねえか。俺のこと」

「……信じてるよ。昔から、ずっと」

逃げ続けてきた自分に対し、彼女はただ、穏やかに笑った。

普段と変わらない温かさのまま、その一言に全ての想いを乗せて。

「……帰ってきてね」

「……当たり前だ」

髪を撫でる手を離し、その場所へと向かう。

終わらせやしない。本当の戦いは……ここからだ。

——まる達は遥君の味方だよ。

身体を包んでいた温もりはとうに引いている。残留していた喪失感も既がない。

けれど胸に灯ったこの熱だけは、収まることなくじわじわと広がっていく。

「姉さん……僕は、どうしたいんだろう」

白の中に置いた手を、その世界も巻き込み握る。

触れるのが怖かった。だから遠ざけてきた。それなのにその温かさは、否定しようもないくらい奥底にまで触れてしまつて。

「……どう、したらいいんだろう」

依然心は迷子のままだ。

求めてしまったからこそ、不明瞭だった行く先は更に立ち込める霧を深くする。

「……いいんだよ、遙は。遙のしたいままで……」

「姉、さん……?」

その濃霧の中に差ししたものは、光だったのだろうか。

失いかけていた声の気配に顔を上げれば、閉じられていたはずの瞳と視線が重なった。

「……心配させてごめんね。でも、教えてくれたから」

「え……?」

これを奇跡と呼んでもいいのか。医者ですら匙を投げた容体は見る影もなく、包帯や病服姿を除けば普段通りの梨子の姿がそこにはあった。

だがその余韻を感じさせる間もなく、目を覚ました姉は言葉を紡ぐ。

「赤い靴の女の子が言ったの、遙が苦しんでるって。だったらいつまでも寝てる訳にもいかないでしょ?」

姉の言う現象が、胡乱の中で見た妄想なのかは定かではない。空想であるはずの存在が現実に現れた今だ。神に救われたなどと言われようとも信じるだろう。

「私は、お姉ちゃんなんだから」

けれどただ一つ確かなのは、根底にあったその使命感が姉の意識を呼び戻したということ。

お姉ちゃん。きつとその言葉は呪いだ。

姉だからなんだって言うんだ。だからと言って弟に巻き込まれていいはずがない。奪われていいはずがない。

そんな言葉があるから、自分は姉を苦しませてしまうというのに。

「……姉さんはピアノ、続けたかったの？」

あの日は問うた自分を呪った。でも今は己の意思で口にする。

姉の本心はもう知った。だから何の介入もない姉自身の言葉で言ってもらえれば、楽になれる気がしたから。

「……そうね。続けたかったんだと思う」

姉も何かを決しているのか、あの時はぐらかした答えを迷わず口にしてくれる。

「……僕のこと、恨んだ？」

その勢いのままにアクセルを踏み切った。

これを問うことが即ち何を意味するかもわかっている。

こうするしか知らないから。先を見失った心は、いつそ楽になることを求めていた。

「……うん」

姉の答えは、求めていたものだった。

でも予見していた感覚は一向に訪れない。膨らんでゆくのは違和感ばかりだ。

「実はね、東京を離れる少し前から、スランプ……つていうのかな？ ピアノ弾いても全然楽しくなくて。そんな時に転校が決まったの」

何故なら姉の表情はすごく……悲しそうだったから。

「……あの時遥に言ったことは、私の本心で間違いないと思う。実際、続けたいって気持ちはどこかにあったから。でもわかったの。それはピアノから逃げた自分が嫌で、その理由を誰かのせいにしたかったんだって……最低だよね」

姉にそうさせるのは、昨夜怪獣に変貌する直前の記憶だけではないのだろう。

それよりもっと前。不甲斐なさに押し潰されそうな様子は、どこか自分自身と重なった。

「それがずっと遥を苦しめてたのに気付きもしないで……ううん。気付いてたのに、目を逸らしてたの……ごめんなさい」

「なんで……、姉さんが謝るんだよ……」

滲む何かで歪む視界が映す姉の顔は悲し気で、それ以上に真っ直ぐで。

向き合うと決めた瞳だった。逃げることなく、正面から。弟と、他でもない自分自身

のために。

「元はといえば僕が……僕が逃げたから…………！」

「じゃあ、おあいこだね」

遮るように抱き寄せられた胸の中でまた熱を感じる。花丸のそれとは違う、ずっと昔から知っている温もり。

「…ホントはね、漁港祭の舞台が終わったら言うつもりだったんだ。ここに来て私は変わった、前に進めたんだって、ちゃんとそれを見せてから伝えたかった」

その熱に包まれようと、痛みはまだ胸の中にある。きつとこの先もずっと、この痛みが消えることはないだろう。

「……すっぱり忘れるっていうのは無理だよね、お互い。多分これからも苦しくなる時はあると思う」

だから逃げてきた。これ以上傷付くのが怖くて。

いつしかそれは人と関わる怖さへと変わり、寄り添ってくれる者まで遠ざけてきた。「けど遙も私も……もう一人じゃないでしょう？」

だからこそそれを受け入れた先にあるものなんて、想像もつかなかったんだ。

「遙には私がいるし、皆がいる………もう、一人で抱え込まなくていいんだよ」

その答えを示すように、また胸に熱が灯る。

触れる温かさは別質のもの。でも奥から広がってゆくのは☒彼女☒に抱いたそれと同じもので。

「だから遙……………一緒に、進んでいこうよ」

ああ、そうか。これだったんだ。

ここへ来てから何度も感じた熱の正体。遙がそれを心地よいと感じたのは、胸に掛かる痛みが和らいだのは、そこに居場所があったから。

それを作ってくれたのは他でもない。ここで遙が出会い、拒み続けてきた人達だ。

「……………姉さんは、ここにきてよかつたって思う?」

またわかりきったことを問う。求めるのは姉の答えじゃない、自分の声に出す機会。

「勿論。ここによかつたって、心の底から言える」

「僕も……………今ならハッキリ言えるよ」

……………ここでなら進んでゆける……………自分でいていいんだ。

「僕はもつとここにいたい。皆と一緒にいたいって」

紛れもない心からの言葉に、姉もまた、心から笑って見せた。

こんな顔を向けてくれたのはいつぶりだろうか。そんな感慨に浸る間もなく病室を揺らす咆哮が轟いた。

「……………行くの?」

「……………うん」

どこに、とも、何をしにとも聞かれなかった。

ただ一つ歩み出した背中で感じ取るのは、変わらずそこにあつた信頼だけだ。

「……………見てて、僕の答え」

確証はない。でも確信があつた。

夢の中で触れた自分ではない自分。何が作用して彼と繋がつたかはわからないままだが、自分が歩み出す動機と彼が進んでこれた理由は同じ。

だったら自分にだって、出来るはずなんだ。

「この世界は滅んだりしない……………滅ぼさせないから」

「……………正直言うと、陸さんのこと結構苦手でした。斜に構えて達観した顔してるのが自分を見てるみたいで気に入らなくて……………あと怖いし」

崩れ行く世界を並んで進む。



どうしてここにいるかなんて聞かなかった。やるべきことなんてわかってるから。

「……普通このタイミングで言うかお前。泣いていい?」

「……まあ、そうかもしれないね」

交わす声音は穏やかだった。取り繕う必要はない。ありのまま、普段通りでいいんだ。

もう何度もこうして会話を交わしたはずなのに、今この瞬間を流れる時は新鮮だった。

「それでも僕には大事なことだったので言わせてください。……それと、これからもよろしく願います」

「これからねえ……もう勝った気でいるなんざ大したことだ」

「勝ちますよ……終わらせませんから。陸さんだつてそうでしょ?」

「……当然」

想いを交える度に瞬く景色がある。

これまでの自分を培ってきたもの、重ねてきた記憶……そして別世界の自分から伝播する光。

それら一つ一つが蛍火となり、オーロラのような軌跡を描いて手の中へ収まってゆく。

「……行こうぜ」

「……はいー」

これまでを踏みしめ、これからへ踏み出すために。  
形を成した戦士の証を着装し、掲げ——全てを込めて☒その名☒を叫んだ。

「ゼロオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ  
!!!!」

「ガイアアアアアアアアアアアアアアアアツツ  
!!!!」

直後、絶望の夜闇を切り裂く煌めきを伴って光の柱が昇る。  
やがて集束したそれらは方や閃光を散らし、方や大地を轟かせ——二体の巨人  
が降臨した。

『なに……………?』

絶大な光、そして希望の気配に、バット星人は計画の綻びを悟る。

馬鹿な、どうして。渦巻く戸惑いは意味を成さない……………なぜなら現にそれらは目の前にあるのだから。

『……………ウルトラマン』

胸に宿る輝きは巨人達が紛れもないその存在であると物語っている。

ウルトラマンゼロ、そしてウルトラマンガイア。

受け渡された想いが時空を超え——輝きが降り立った瞬間だった。

## 19話 日々の

「ありがとうステラ。助かった」

「…いいわよ別に。偶然あの子を探してるお母さん見かけてただけだし」

手を振る少女と、頻りに頭を下げるその母親が人波の中に消えてゆくのを学友と共に見送る。

ステラと会えたのは運がよかった。反射的に助けてしまったが、未来一人ではきつとどうしようもなかっただろう。

「…それにしてもあなた、こんな時でもブレないわね」

「え？」

「おせっかい。私と初めて会った時とか、一昨日不良みたいなのと揉めた時とか……ほんと困ってる人のこと放っておけないのね」

数日の行動が思い起こされる。考えてみれば今回も同じ。

考えなしに首を突っ込んで結局最後に解決するのは巻き込んだ誰か。定式と化した流れに不甲斐ないの一言だ。

「…(めん)」

「……なんで謝るのよ。誰も責めてなんかいないでしょ」

反射的に出た言葉にステラの怪訝な顔が向けられる。

「まあ危なっかしいって思わない訳じゃないけどね、それでも誰にだってできることじゃないでしょ。少しは自信持つてもいいと思うわよ」

違和を感じ取ったのか、励ますように彼女は語を紡ぐ。

？ 偽りのない言葉だった。微かに混じる憧憬がそれを教えてくれる。

「……………それにあなたのそういうところ、私は好きよ」

最後に零された声にも成り切らないようなそれが未来に届くことはなかった。

代わりに耳を劈いたのは轟音と、それに伴うどよめき。

「え……………」

咄嗟に見上げた先で立ち昇る光に言葉を失う。

現れたのはもう存在しないはずのウルトラマン達……………だが注視すべきはそこではなかった。  
かかった。

その片割れ、目付きの悪い赤と青のウルトラマンは——親友の姿と重なった。

「……………陸……………？」

『シエエアツ!』

奇跡に他ならない変身の余韻を噛み締めることもなく陸——ウルトラマンゼロはエイリアン然とした形状にメタリックブルーの装甲を持つ双頭の怪獣——キングデインゾールへ突撃。

嵐のような荒々しい連撃に乗り殺到する拳や蹴りは幾度となく奴を捉える。

「小さい頃はよく未来に付き合わされてウルトラマンごっこかやったもんだったな………まあ大体怪獣役だったけど」

慕情、渴望、思い出……攻撃に籠る想いは数知れない。

その一つ一つを糧とするように、繰り出される連技は拳動の度に洗練されてゆく。

さながら別世界の自分……そしてその相棒と重なる感覚を全身に走らせながら、振り抜いた蹴りはデインゾールに更なる打撃を加える。

「ようやく回ってきたヒーロー役だ………まあせいぜい引き立ててくれや怪獣さんよ」

反撃に転じたデインゾールの双頭は肉を噛み千切らんと同時に開いた罅を迫らせるが、ゼロはそれを予見した形で回避。即座に側頭部を殴りつけその暇すらも封じる。

『ツツ——!!』

「……つと」

超高速で射出された刃のような舌が迫るが、強化された五感はそれすらも察知し身体を回避行動に切り替える。

飛翔。ウルトラマンに成ったからこそ行使できる力をフルに発揮し移した次なる舞台は——空。

「……いやいやマジかよ……」

それでもなおも射程範囲から逃れてはいないのか、その勢いは衰えぬままにデインゾールの舌刃は空気を切り裂きながら上空のゼロに迫る。

距離を空けたのが裏目に出たか。加速を続けたそれは既に視認が困難な域へと到達しており、もはや回避は不可能と悟った。

なら——、

『シユアアッ!』

虚空を走らせた両腕の軌跡に沿って投擲されたのは頭部に備わるゼロスラッガー。

銀色の瞬きを夜空に描いた二本の刃は瞬時にデインゾールの舌を両断。

「まだまだアッ!」

ゼロスラッガーの軌道は陸の意思に準ずる。

よって舌を切断した程度では止まらぬ双刃は立て続けにディノゾールへと襲い掛かり、幾度となく奴の装甲を切り裂いていく。

『ツツツ——……!』

激しく抵抗するディノゾールの腕がようやくゼロスラッガーを捉えるが、弾いた先はゼロの腕の中。

ブーメランの要領で戻ってきた刃を両腕に握り間髪なく急降下。落下運動の勢いをも相乗し、交差した斬撃は奴の胸元を盛大に搔つ捌く。

『アエエエイヤッ!』

仰け反りながら空きの懐目掛け再度振り抜かんと力を込めた右足に滾る熱。

駆動と共にそれは爆炎へと昇華し、猛烈な衝撃を伴って炸裂した回し蹴りはディノゾールの肉体を薙ぎ払った。

「なんであの人はもうあんなに様になってるんだよ……」



鬼神が如し勢いで一方的な蹂躪を始めたゼロを横目に流しつつ、遥——ウルトラマンガイアは皇コツヴと対峙する。

主な武器は鎌状の両腕に頭部の発光器官、そして体内エネルギーの増幅媒介と思われる胸元の水晶体と考えるべきか。

「……まあ、ともかく僕は僕のやるべきこと………できることを精一杯やるだけ！」

先手必勝。そう言うばかりに大地を蹴ったガイアのタックルがコツヴの侵攻を阻む。

恒常的に二足歩行を行う巨大生物……地球上で例を挙げるならば恐竜だろうが、絶滅した生物の戦闘データなど流石の遥といえど持ち合わせてはいない。

論理的でないのは百も承知だが、情報が乏しい今はただ真正面からぶつかる他ない。

『ツツツ——！』

「うえッ……!?!」

反撃に振り下ろされた両腕の鎌。予測済みだったそこまでは難なくいなすが、その奥から薙かれたコツヴの尾に打ち付けられ地を転がる。

「そっか……尻尾も警戒しなきゃなのか………」

思えば特撮作品等で怪獣が行う攻撃手段の常套手段だろう。目に見える武器を警戒するあまり失念していた。

陸と違い遥にはウルトラマンや怪獣の知識なんて毛ほどもないし、おまけに喧嘩だつ

てしたこともない。

基本的に彼と同じことはできないと考えていいだろう。

「だつたら……！」

重心を低く構え、再び迫った鎌による攻撃を転がり込んで躲してはその□内側□へ潜り込む。

完全に懐の内だ。反撃はおろか防御だつて困難なはず。

『ジューアアッ！』

一点目掛けて突き出した握り拳がコツヴへと刺さる。

遥の戦闘能力では何度このようなチャンスが訪れるかわからない。だから数少ない機会の中で出来るだけ多く——叩き込むんだ。

「う……おおおおおツツ…………！」

右、左、右、左、右。

素早く、無駄なく、そして力強く。振り絞った全力のストレートラッシュを間髪なく打ち出す。

『ツツツ——！』

『デュアアッ！』

強引に振り払いに来た剛腕をバックステップで回避したガイアに殺到する光弾。

頭部から放出されるそれらは断続して襲い掛かるが、その悉くを弾くガイアは徐々に距離を詰めてゆく。

「力技はあんまり得意じゃないけど……！」

やがて射程に入ったガイアを吹き払いにかかった一撃を受け止める形で捉えたコツヴの尾。

重い。その衝撃は完全に入った訳でもないものにも関わらず全身に響くようだ。

けど同時にこれは二度目のチャンスでもある。

『ドゥウウアアッ!!』

俊敏性や機動力では陸の変身するゼロには敵わないが、恐らく純粋なパワー方面で見るとスイングに倣う形でぶん回した奴を高々と放り投げて見せた。

その仮説を裏付けるように振った肉体はコツヴの身体を浮かび上がらせ、ジャイアントスイングに倣う形でぶん回した奴を高々と放り投げて見せた。

一件怪獣を押ししているように見える二体のウルトラマンの奮戦に逃げ惑っていた人々も足を止め感嘆の声を漏らす。

だが、タイガやエックスの時と比べ含まれる期待は薄い。

最終的にはまたやられてしまうのではないか。そんな不安は少なからず未来の中にも存在した。

「ははっ……………」

既に対岸の火事視へと切り替わっている己の思考に乾いた笑いが漏れた。

何を他人の面で不安になんてなっているんだ。本来なら自分が、真っ先にあの場へと立つべきだったのに。

「…………やっぱり変ね、最近のあなた」

握った拳の力を緩めたのはステラの声だった。

拭えぬ恐怖が充満する人混みの中、彼女だけは幾分か落ち着いた様子でその目を向けている。

「正義感と善意だけで突っ走って、いちいち関わらなくてもいいことにまで首を突っ込んでくる…………私の知ってる未来はそんなどうしようもないお人好しの馬鹿よ。でも今のアンタはなんか、弱っちく見える」

「…元から俺は強くなんてないよ」

「知ってるわよ。私より喧嘩弱いんだから」

含みのある物言いをしたと思えば、直後に現実で突き刺される。

未来の心境を知ってか知らずか、醸す雰囲気は鋭く、それでいて温和だ。

「今してるのはそういう話じゃないの。アンタ、今までその行動を後悔したことがあった？」

「え……？」

束の間の痛みを伴った後、後者は急速に広がってゆく。

膨れた風船に針を通すように、張りつめていた心から余計な力みが抜けてゆくのがわかった。

「考えたことないって顔ね、やっぱあなた馬鹿よ……でも未来はそれでいいんじゃない？」

また呆れたように息をついた後、ステラの視線は未来の真後ろへ向く。

「私の話は終わりね。……先客がいたみたいだし」

「千歌……？」

導かれた先で揺れるのは淡い太陽の髪色。

共に笑い、寄り添い、時には劣情にもなった笑顔が、そこにあった。

「……全く、世話のかかる奴……」

直前までであった彼の姿を空目しながら独り言ちる。

何もおかしなことはない。元からあの輪に自分の席はなかった。ただ本来の形に戻っただけだ。

それでも胸に蟠ったこの違和は、否定し難いものだった。

「ホント、馬鹿ね……」

一人に対するものでないぼやきは夜闇の中に消えてゆく。

非日常が交錯する世界の片隅で、七星ステラはそこにある日常をあたりまえ噛み締めた。

## 20話 約束の焰

夜はまだ深い。

未だ夜明けを予見させぬ黒の下、巨大な影同士の衝突はより過激を極めてゆく。

『ジューアアツ！』

建物を薙ぎ払いながら猛進する皇コツヴの突進をガイアの膝蹴りが相殺。勢いを失った巨体に更なる連打を叩き込む。

「はあ……はあ……！」

戦い方のコツは掴んできた。素人目で見てもガイアに分があるのは明らかだろう。けれどどうしてだ……全く押ししている気になれない。

『ツツツ——！』

「うっ——」

込み上げる疲労に足を止めたその一瞬。白刃の如く迫った手鎌が喉元を掠める。違和感の正体。それはこの怪獣の異様なまでのタフネスさにある。

如何なる攻撃を幾度叩き込もうとも、一向にその勢力が衰える気配を見せないのだ。

『デエエエリヤツ!』

横目に確認したゼロは開幕時の勢いを保ったままキンググディノゾールを圧倒しているが、恐らくは同じ状態だ。

元が身体能力お化けの陸だ。もやしっ子の遙と違い体力切れはずっと先の話だろうが、それでもその時までにはディノゾールを削り切れそうかと言えばそうではない。

(……どうする……)

ウルトラマンの代名詞とも呼べる光線技だが、あれは文字通りの必殺技。恐らく何発も打てるような余裕はない。

だから放つのは勝負を決めに掛かるその瞬間だというのに……これでは一向にその時など訪れはしないだろう。

『ツツツ——!!』

『ジュアアア……!』

組み立てていた正解への道建ては今度は直撃したコツヴの突進により瓦解させられる。

「遙……!」

後方の建物も巻き込み転がったガイアにコツヴからの追撃が襲い掛からんとするが、寸でのところで割り込んだゼロが受け止める形でガード。



直後に吹き荒れた空拳の嵐は奴の巨体をディノゾールの傍らにまで押し戻した。

「…陸さん、なにか気が付きませんか？」

「何が？」

「もう少し頭使って戦ってください……コイツ等、削れてる感じが一向にしません」  
すぐさま起き上がりつつ低く構える。

ゼロの稼いだ一瞬が仮説を立てる時間をくれた。怪獣の挙動一つ一つに精神を注ぎながら、遙は隣り合う陸に耳打ちする。

「……なにか裏があるとしたら、恐らくアイツです」

「……なるほど」

ただそこに佇み、無言のまま成り行きを眺める宇宙人が一人。

もし蝙蝠が人型を成したようなアイツが怪獣達に何か作用を及ぼしているとしたら……、

「…つまり、アイツから叩きやいってことか！」

「ちよっ……陸さ——」

しかしまだ仮説の段階。奴の能力等は未だ不明瞭なまま……それなのにも関わらずゼロが突撃を仕掛ける。

『……青いな』

不敵に笑うバット星人。

だが奴自身が何かを成すことはない。代わりに飛来したのは、ディノゾールの射出した弾頭の群れだ。

「ちっ……」

完全に初見なはずの弾幕攻撃に対する反応は舌打ちのみ。流れるような打擲に撃墜されたそれらは黒煙を舞わせるだけに終わる。

——が、

『……所詮はただの子供か』

「ガ……ッ!?!」

砂塵の舞う世界の中、土埃の奥より差し込んだ破壊の光。

バット星人の掌より射出されるレーザー状のそれは連続でゼロを穿つ。

『ツツツ——!!!』

『グアアア……!』

奴に続く形で巨獣達の放った光弾がゼロを飲み込み爆ぜた。

やはりそうだ。この怪獣達、生物的な本能や思考に即しているにしてはやたら挙動が非生物的すぎる。

恐らく単純な命令以上の何かがあるはずバット星人から受け続けている……瞬時に連

携を取ることを可能としているのも恐らくそれが故だ。

『少々驚かされはしたが脅威になり得るほどではない……………消えろ』

つまり奴等は意思のない人形も同然の傀儡……………そこまで搦んだというのに、遂に動き出した第三の壁は容易く理想を屠る。

操る怪獣二体にゼロを抑え込ませたバット星人は一瞬のうちに眼前にまで肉薄し、横薙ぎの一蹴でガイアを跳ね飛ばして見せた。

『……………まずは貴様だ』

くるり。

踵を返したバット星人の掌が定めた標的は再度ゼロ。

「陸さんツツ!!」

狙いを悟り上げた叫びも僅かに遅い。

次の瞬間に放出された漆黒の波動はゼロに直撃。瞬く間にその身体を蝕んでゆく。

「ぐつ……………ああああツツ……………!!」

途端に漏れ出してゆく淡い粒子はウルトラマンとしての肉体を構成する光に他ならない。

奇跡が紡いだ光の力は……………邪悪を前に失われようとしていた。

「陸ッ……！」

黒の瘴気に囚われた巨人の姿に、千歌の前だということも忘れて親友の名を口にした。

あの闇は春馬達を襲ったものと同じ。それはこのまま事が進めば陸までもが彼等と同様の状態になることを示していた。

「……やつぱり、陸ちゃんだったんだ」

焦燥に身を焼く未来に対し、千歌の声は穏やかだった。

「気付いてたのか……？」

「なんとなく。幼馴染……だからかな？」

誘うようにコンクリート造りの防波堤に座する千歌。続く形で未来も腰を下ろす。

「そっかあ……陸ちゃんなんだあ……」

遮るものも何もない。ただ視界の端で暗い海が荒波を立てている。

その奥で奮戦する巨人をどこか嬉しそうに、それでいて少しだけ残念そうに彼女は眺

めた。

「……でも、やっぱりあつちの方は未来君じゃなかったんだね」

その色を映すように、擦れた眩きが直後に漏れる。

明瞭に含まれた落胆はまるで千歌までもが未来の弱さに呆れているかのようで、胸を  
抉った。

「すぐにわかったけどね。……でも最初は未来君なんじゃないかって、嬉しくなっ  
ちやった」

「え……？」

「だって未来君、言ってたじゃん」

けど受け取ったそれと千歌自身の想いとは異なるようで。

記憶の中にあるであろうものを抱き留めるように、屈託なく笑った。

「もし怪物が現れたら、未来君がウルトラマンになって助けてくれるって」

語られたのは幼き日の約束。

もう何年も前の話だ。ウルトラマンに出会って間もない頃、抱いた興奮のままに千歌  
と交わした約束。

でもそれは所詮、想像の中で描いた絵空事でしかないんだ。

「……まだそんなの信じてたんだな」

今更それを持ち出す千歌と、そんな約束をしたかつての自分を皮肉るように口角を歪めた。

もつと別な形があるのはわかっているはずなのに、迷子の心はそれすらも見失つてしまふ。

「……信じてるよ、ずっと」

それでも彼女の瞳は真つ直ぐなままだった。

あの夕暮れと同じだ。直視できないくらい輝いてて、眩しくて……敵わないと思つてしまふ。だからこそ、また卑屈になる。

「そりゃ、こんな状況だし信じそうになるのもわかるけど………陸でも勝てないかもしれない奴等だぞ。今更俺が行ったところで——」

「……じゃあ、助けたいつて思わないの？」

何気ない、日常の風景の中に溶け込むような響きが閉じた扉を叩いた。

何もかもを見透かされているような錯覚すら感じるその目は、直前にあつた級友と重なつた。

「……そんなはずないよね。未来君だもん」

「……だからなんなんだよ」

答えるよりも早く千歌は笑う。

その真意は定かではないけれど、今未来の手の中にある事実が揺ぎ無いことであるのも確かなんだ。

「助けたいとか見過ごせないとか……そんなのただ後先考えずに幼稚な正義感振り回してるだけだろ。……一昨日のことだって、結局解決したのは陸達だ」

いつだって同じだ。

駆り立てられるままに突っ走り、周囲を巻き込み、最終的には自分は何も出来ないまま誰かが解決する。

「……俺じゃできないんだよ」

ヒーローになれはしない。それをやる、やってくれるのはいつだって誰か。

今だってそうじゃないか。未来がやるまでもなく、立ち上がったヒーロー達は戦ってくれている。

「……真っ直ぐだよ。未来君は」

一度重ねた視線を外すと、千歌は羨むようにぼやいた。

終わりの足音が迫るこの時でも夜空は綺麗だ。普段通り、何ら変わらない顔で未来達を見下ろしている。

「……ど、ど、ど」

ほんの少しだけ苛立つように、低くなった声を霧散させる。

「ちよつとしたことで舞い上がって、すぐに現実に挫折して、悟った面して……なのになら半端にそれを追いかけて……どこが……」

「諦めてないってことでしょ？」

「言い方の問題だ。諦めきれてないだけなんだよ。……幼稚だつて、アホらしいつて、そんなことわかっているはずなのに、ずつと……」

「でもそれつて、凄いいことだと思うよ」

それでも彼女の声音に激みはなかった。

体育座りをするように丸めた身体が堅いコンクリートの上で揺れる。見上げる瞳に映るのは、夜空ではない何か。

「こう言ったらアレだけどき、未来君も結構、普通じゃん？」

そうして語られたのは、未来自身も千歌に対して抱いていたものだ。

これと言った特技も能力もなく、普通星に生まれた普通星人。千歌の言葉を借りるそれは、いつの間にか二人の間に生まれていた、自虐に塗れた親近感。

「でも未来君は迷つても決めたことだけは真つ直ぐなままで、こう、芯が強いっていうのかな？」

そして、それはいつしか安心感へと変わっていた。

身勝手に、自分の弱さを押し付けるように、彼女にも普通であり続けて欲しいと願う



自分がいたのは事実だ。

「私はほら、興味本位で挑戦するわりにはすぐ挫折して投げ出しちゃうじゃん？ だから未来君のそういうところは羨ましくて……カッコよかった」

「は……？」

けれど、言葉尻に漏れた感嘆がそれを瓦解させる。

根本的に違っていたのかもしれない。点にした目が再び千歌と重なる。

「……だから、私も頑張ろうって思えたんだよ」

追いかけられていたんだ。その真実と共に更なる情動が重ねられる。

それが何を差しているのか、未来は既に知っていた。

「……どうして、スクールアイドルだったんだ？」

揺れるままに、触れることをしなかった疑念を口にする。

偶像に焦がれたのは一緒だった。けど彼女がそれを追いかける度に差が開くような感覚がして、触れることをしなかった。

けど、本当に千歌が走り出した切っ掛けが未来であるなら。

求めていた答えもきつと、それに通ずるもののはずだ。

「わかんない。ホントにただ、ビビっと来ただけだから……案外今までと同じかも」

たははと笑う千歌。今日に至るまで、彼女に熱弁されたスクールアイドルの、ラブラ

イブの魅力の数々が脳裏を駆ける。

普通だった。何よりも強く焼き付いているのはそう語った千歌の顔。

普通。少なからず良い意味で用いることはなかった言葉は、その時ばかりは千歌に輝きを与えていた。

「……でもやってみたいって思った。これなら私も変われるんじゃないかって、思ったの」

一拍の沈黙の後、秘めていた希求が切り出される。

当たり前だ。未来がそうだったように、千歌にだって変わりたいという願望はずっとあったはずだ。

「もちろんそれだけじゃないよ？ 楽しくなかったらここまでやってないし、そもそも元からやるって決まっていたことだったし……でも、ずっと思ってる」

何度躓いたのだろうか、何度挫けそうになったのだろうか。未来に知る由はないけれど、それはこの数週間ずっと、千歌の根底に在り続けたもの。

「今投げ出したら、絶対後悔するって」

それはいつだって単純だ。

けど、だからこそ見失ってしまう。成長して、変に賢くなるにつれ、染み付いたものに覆われ塗り潰されてしまう。

「……未来君もそうでしょ?」

過去に何度も投げ出してきた千歌だからこそ、ずっとそれを留めておくことができたのか。

だとしたら、それは諦めることをしなかった未来の中にもきつと――、

「……」

もう一度、寸刻前の級友の言葉を反芻する。

これまで何度も正義感と善意のままに突っ込んで、失敗することだって少なくなかった……けどそれを後悔したことなんてあっただろうか。

「……うん」

いいや、そんなことはなかった。

尾を引いていたここ数日のことだってそう。結果的には未来も誰かに助けられることになってしまったけれど、それでもその行動を後悔なんてしてないはずだ。

「そっか………そうだよな」

行動したのはウルトラマンに憧れたから? ヒーローになりたかったから?

………どれも違うはずだ。

善意や正義感。それ以上に、今助けなかったらきつと後悔する………胸の内にあるのはいつだってその思いだった。

「……やっとわかったよ、春馬」

改めて、日々ノ未来に問う。

「今お前は何がしたい。できるかできないかなど関係なく、未来自身は何がしたいのか。」

「……行くの?」

「うん。これは俺がやらなくちゃいけないことだから」

背中を押してくれる人がいた。理解してくれる友がいた。……そして勇気をくれる彼女がいた。

そんな、色んな人達から受け取ってきた想い。それらが形になるように左腕に宿った銀色のブレスレットを握りながら、伝える。

「ありがとう……千歌」

「いいよ、そんなの。だって約束したじゃん……夢とか、やりたいことができたら応援するって」

「…そうだったな」

決めたからこそ交わす言葉は少なかった。

全部、この約束に詰まっているから。

「だから未来君も約束……守ってね」

「守るよ。絶対に」

それ以上は何も言うことはなかった。

いつもそこにあつた真つ直ぐな瞳と笑み。その輝きに背を押されるように、未来は答えの待つ場所へと駆け出した。

焦っていたんだと思う。将来を選択しなければならぬ時が近づいていて、親友への劣等感が加速するようで。だからこそ踏み出す動機ができるできないに置き換わってしまった。

けどやっと思ひ出した。なぜ自分が彼に憧れたのか。

強い力があるからじゃない。正義の味方だからでもない。それよりもっと、大切なもの。

どんなに傷付いても、どんなに無謀でも、大切なもののために戦う姿。………始まりはそこからだったじゃないか。

「……何しに来たの」

盛る炎に包まれる町の中に黒い百合の花が咲いていた。

光と闇がせめぎ合う舞台を背に揺れるその花弁は、やはり悲痛に思えた。

「……守りに来た。この世界を、俺の大切な人達を……ユリも」

「はあ……？」

肩を上下させる未来に怪訝な顔が向けられる。確かな苛立ちが含まれていた。

「余計なお世話よ。何も知らないくせに勝手言わないで」

「確かに俺は君について殆ど知らない……けど、ずっと君が苦しみ続けてきたのはわかる。だから助けない」

「それが勝手だつて言ってるの……いいから消えてッ！」

鬼気迫る声に乗り闇の波動が走るが、それは未来に到達する前に生じた炎の壁に阻まれる。

腕に宿したブレスレット。それは徐々に熱を増していつていた。

「ユリにとつてはそうかもしれない。けど、ここでやらなかったらきつと後悔する。……それだけはしたくない」

これまでと変わらない。言葉を借りるなら、これは正義感と善意で突つ走つただのお人好しだ。

でもそれでいい。それこそが未来だから。皆が信じてくれた、日々ノ未来だから。

「だからここにいます。……それが俺の決めた道だ」

刹那、ブレスレットに走る烈火。

銀色を包んだ熱は徐々に形を生成してゆき、やがて炎そのものを宿したような、深紅を煌かせる新たなブレスレットへと昇華する。

「……見てくれ」

少しは近づけたかもしれない、マシになったのかもしれない。ただそれだけだ。きつと英雄と呼ばれたあの世界の自分をもっと強い。そこに追い付くことはないのだろう。

けどただ一つ。この心だけは……絶対に負けはしないから。

「メビウ————スツツツツ!!!」

託されたその名と共に突き上げた左腕から広がる無限の焔。  
灯った光はその勇気を祝福するように炎へと宿り——最後の勇者を覚醒させた。

『ぐッ……ぬう……!?!』

舞い降りた炎と光に押し戻され、逆流した闇の奔流がバット星人を襲う。

浮遊するその陽はやがて巨人の形を成し、先んじて立ち上がった友の肩を支えた。

「……遅いですよ」

「まあまあいいじゃねーの。主役は遅れて来るって言うしな」

「どよめく人々に対し、巨人達に驚く様子はなかった。☒彼☒は必ず来る。そう信じていたから。」

「けどまあ、遅刻した分はしっかり働いてもらうぜ………未来!」



「……………ああ」

無限の勇者——ウルトラマンメビウスを中心に据え、三人の巨人が並び立つ。

封じ込めたはずの光が伝播し、また新たな光が立ち上がる。その様をバット星人は隠すことの無い憎悪を込めて睨んだ。

『何故だ……………何故お前達は立ち上がる。この光も希望も消えた絶望の中で！』

「消えないからだよ。どんな絶望の中でも、人の心から光は消え去らない」

もう一度追いかける夢、これから探す夢、ずっと焦がれ続けてきた夢。その全てが未来へと続く光の軌跡だから。

今はただウルトラマンとして、人として……………それを守り抜くだけだ。

「これが俺達の光……………即ち、無限の輝きだ!!」

## 21話 無限の光と影

『光……………そうか、光か』

三体の巨人と三体の巨獣。人々が見上げる戦場を満たすのは張り詰めるような緊張感だ。

永遠にも感じられた、束の間の沈黙。その糸を断ち切ったのは、今なお不可解そうに首を捻るバット星人だった。

『ここまで抵抗されたのはこの世界が初めてだ……………計画を狂わされたのもな』  
ゆつくりと、立ちはだかる巨人一体一体に視線を注ぐバット星人。

やがて諦観にも近い息を吐くと、言った。

『この恥辱は払拭すべきだ。貴様等の存在と共にな』

文字通り、奴の目の色が変わる。

遂に未来達を計画を阻む脅威だと認識した……………そんな目だ。

「あの宇宙人は俺が——」

「アイツあ俺がやる」

名乗り出た未来の声を遮る形で陸が一步前に出でる。

変身前と同様に良いとは言いがたい目付きが映す中には、単純なりベンジ以上の何かがある。伺えた。

「昔からあの手の小賢い野郎の相手すんのは俺の役だしな……だから他は任せる」

三人共に視線を重ね、同時に頷く。

語る言葉など不要。互いに互いを信じあっている……それだけで十分だ。

「……いこう」

「おうよ」

「はいー」

直後に切って落とされる火蓋。

覚醒したメビウスを加え、舞台は最終局面へと移ろうとしていた。

「よお……さつきはまあよくもやってくれたなオイ」

『報復のつもりか？ そのためにわざわざ一対一に持ち込むなど愚かしい』

「言っとけ蝙蝠野郎が。地球にやお礼参りつつ一言葉があつてだな……この分はキツチり返させてもらうぜ！」

周囲が激突を始めてもなお睨みを利かせ合つていたゼロとバット星人にも遂にその瞬間が訪れる。

眼光に揺れる闘気が開戦を告げる合図。その刹那、信念と野望が——吹き荒れた。

『デエエエエリヤツ!!』

『オオオオオツ!』

競り合うのは互いの空拳。どちらかが攻撃に移ればもう片方がそれを弾き反撃に移る。その身一つの打ち合いは果てしなく続く。

だが僅かに——ゼロが勝る。

『ダアラッ!』

『がッ……!?!』

宇宙拳法。神域に至る業が奴の連撃を弾き、その間を縫うような蹴りが突き刺さる。

無論こんな武術用いるのはおろか触れることすら初めてだが自然と身体に馴染む。まるで昔から染み付いていたものかのように、ここにはいない誰かの加護を己が身で実感する。

「どうしたどうしたア!? でけえ口叩いた割にはその程度かよ!」

『グッ……凶に乗るなア!』

すかさず反撃が返ってくるが、強化された身体感覚はそれすらも見切り逆にカウンターを叩き込む。

「喧嘩ってなあ……こうやんだよッ!!」

更には後退した奴の胸元へ腕を伸ばすと掴んだ胸倉ごと手元に引き寄せ、そのまま渾身の頭突きをお見舞いした。

『ぬっ……ぐ……、出鱈目なあ……!』

ここからは飛び道具も解禁か。先程不意を突かれたレーザー状の光線が横腹を掠める。

見た目以上の貫通力を持つ攻撃だ。喰らえばまた一定時間行動を制限されることになるだろうが……二度は通じない。

『シエエラアッ!』

捻った身体が紙一重で光芒の網を潜り抜け、勢いのままに裏拳をめり込ませる。

もんどり返り大地を跳ねる奴の巨体。瞬時に追尾し真上を取ると、立て続けに豪炎の爆脚を突き刺した。

『舐めるなアッ!』

「ごあツ……!」

だが直前で力点をずらし致命傷を避けた奴の掌が鳩尾に叩き込まれ、殴打の衝撃と共に熱線が腹を貫く。

『下等生物の分際でこの私に土を付けるなど……ふざけるなツ!』

張り付いていた紳士面などとうに剥がれ落ちていた。

目の前にあるのはどす黒い悪意と憤怒、そして邪悪。猛烈なまでの殺意が迫ってきていた。

「へっ……偉そうに踏ん返り返ってただけの奴がよく言うわ」

昔から俗に言う☒悪い奴☒と関わるのを避けてきた。冷静ぶって達観していたけれど、結局のところ逃げていただけだ。

今でこそ狂犬扱いされてはいるが、それは未来や果南に巻き込まれて首を突っ込んだ結果だ。自分から関わることなんてありはしなかった。

けど——今は違う。

『ダアアルアツ!』

『がふアツ……!?!』

殺気に満ちる奴を沈める右ストレート。続け様の二段蹴りが蝙蝠を宙に舞わせる。

もう逃げはしない。それが誓った夢を阻む壁だというのなら、何だろうとぶっ壊して

やる。

『こんな……こんな下賤な小僧共にイ……!!』

「俺達は手前テメエの決めたモン貫いてんだ。そこに高尚も下賤もありやしねえだろ」

答えなんて見つからなくて、結局ずつと情けないままで。

けど、それでもアイツ等は、彼女は傍にいてくれた。

「これが俺達の道だ。テメエがそれを阻むなんざ……二万年早いぜ」

もうそれを裏切らない、逃げないと決めた。

だからまた飛べる。もう一度この遙かなる空ゆめへ……何度だって。

『オオオオオオ……!!』

腹部に走る痛みを堪えながら、滾る熱意を光へと変換してゆく。

遠慮はいらない。これが先へ進む示しだというのならその全てを込めて——ぶち

かませ。

「**ワイドゼロショット** オツ!!」

し字に組んだ両腕から伸びる光の束がバット星人を飲み込む。

やがてその野望を灰燼に帰すように、怒号すらも焼き払う爆炎の柱が吹き上がった。

「……………ホント味方でよかったよあの人」

感心半分呆れ半分の息を付きつつ、背後で上がった轟音を合図に皇コツヴへの攻撃を再開するガイア。

あの仮説が正しいのなら、恐らくこれで――、

『ドウアアアッ!』

『ツツツ――……………!』

振り上げられた大鎌を拘束し、カウンター気味に胸元へ膝蹴りを差し込む。

直後に鋭く体重移動。前転の形で背後へと回り込むと、その尾っぽを掴み上げては彼方へと放った。

「…やっぱり」

明らかに先程までと比べ動きにラグがある。恐らくバット星人がゼロに圧倒されることで命令が弱まり、抑え込まれていた奴自身の本能と衝突しているのだ。

決めるのならば――今だ。

『ジャアアッ!』



立ち上がるも未だロクな行動をとれずにいるコツヴの首元へ水平に薙いだ手刀を切り込む。

見た目以上の鋭さを持つ一撃に遅れて上がる火花と悲鳴。瞬間にコツヴの目の色が変わるのが伺えた。

『ツツツ——！』

バット星人が打ち倒され命令が途絶えたか。はたまた生命が危機に瀕し本能が勝ったのか。どちらにせこれでコツヴが本来の挙動を取ることになる。

「うっ……！」

そしてそれはよくない方向へと転がるようで。

ある意味機械的だった動きが一遍。その風貌に相応しい荒々しさを持った野性的な攻撃は予測がつかないものだ。

なら——、

「ああもう……誰かさんの脳筋が伝染った！」

愚痴を零しながら大地を蹴り飛ばし、がむしやらに二回りほど大きい巨体へと突進。

攻撃の予測がつかないのなら攻撃させなければいい。降って湧いた頭の悪い発想のもと絶え間なく右左のラッシュを打ち出し続ける。

『ジュアアアッ！』

それでも収まらない奴の猛りごと抑え込むように首元をホールド。渾身の力を以って持ち上げては地面へと打ち付ける。所謂背負い投げというやつだ。

『ツツツ——！』

起き上がり様に射出された光弾を払う、叩き落す。

凝縮されたエネルギーの塊を弾く腕はやはり痛むが、これ以上の痛みを自分は知っているから。

「う……あああああッ!!」

更に激しさを増す光弾の群れ。そのど真ん中を突つ切るようにガイアが突撃する。

痛い。正直怖い。できることなら今にだつて背を向けたいくらいだ。けどこんなものさしたのではない。

胸に蟠っていたあの傷は……もつと痛かった。

『ダアアアッツ!!』

ここで逃げればまたそれを繰り返すことになる。

それだけは絶対にさせない。その誓いと共に振り上げた右足が再び奴の巨体を薙ぎ払った。

『ンンン………！』

何度も悲しんだ。何度も苦しんだ。けどその度に見えてきた何かが導いたものがこ



眼前では燃ゆる炎に蒼の装甲を照らすキングゲイノゾールが吠える。

ずっと画面の向こうに見續けて、寸刻前まで見上げるだけだった怪獣と対峙している。自然と強張る身体に緊張感が走った。

(落ち着け……………やってやれないことはない)

未来も巨大化しているとはいえ、相手もまた巨獣。人間で言えば熊と戦うのとそう変わりないサイズ感だ。当然恐怖はある。

けど決して背は向けない。ここにいる理由……………それを貫くために。

「今は俺が……………ウルトラマンなんだ！」

身体を奮い立たせ勇猛に駆け出すメビウス。だが先手を取ったのはゲイノゾールだった。

それぞれ独立して動く双頭から同時に射出される何か。それが舌による斬撃だと察知するや否や、メビウスは飛び込み前転の要領でそれを回避しては奴の懐にまで潜り込む。

『セヤアツ！』

起き上がる勢いのままに右ストレート。硬質な衝突音が夜闇に溶ける。

『ツツツ————！』

「うおおっ……………!?!」

渾身の一撃をお見舞いしたつもりだったが、強固な装甲を持つディノゾールへのダメージは薄いらしい。

反撃に振るわれた剛腕を側転で距離を取りつつ回避するが、間髪なく連射されたミスイルのような弾幕に吹き飛ばされる。背後にあつた建物を巻き込み転倒したメビウスの巨体が大地を揺らした。

「はは……キッツいなあ………！」

瓦礫を散らしながらゆっくりと起き上がる。大丈夫だ。大したダメージじゃない。だがそれは向こうも同じだろう。

陸……ゼロとの戦闘の中で何度も切り裂かれていたはずの装甲には未だダメージの通る気配が見受けられない。

『ツツツ———！』

「くっ………！」

音速で襲い掛かってくるあの舌も同様だ。切断されたはずのそれは今もなおこうしてメビウスを攻撃するまでに至っている。恐らく再生したというよりは切断されたのはまだ長い舌の一部でしかなかったということだろう。

改めて、目の前にいる存在が既存の常識が適用されない相手であると思ひ知らされる。

(どうする……?)

砲弾に斬撃。次々と迫る攻撃を往なしつつ必死に思考を巡らせる。

ゼロのような俊敏性やガイアのようなパワーはメビウスにはない。けれど何かある筈なんだ、メビウスだけの何かが――、

「ツ……」

ふと、天啓の如く差し込んだ光。

導かれるままに左腕に備わった☒メビウスブレス☒へ手を添え念じるように意識を集中させる。するとブレスから伸びた光が刀身を構成する。

メビウムブレード。如何なる悪をも切り伏せる、光の剣。

「よし……」

直接腕に備わった形になるメビウムブレードを構えながら再度突撃。雨のように殺到する弾幕を切り落としながら突き進む。

『セヤアアアツツ!!』

すれ違い様の一閃。片頭の舌と共に深々と刻み込んだ斬痕。遅れて劈くような悲鳴が上がる。

確かに感じた手応えのままに何度も光剣を振り抜いた。少しずつ、剥がされた装甲が宙を舞い散華する。

『ハアアッ!!』

斬り上げると同時に身体を捻り、突き出した右足に乗せて力を開放。低い唸りと共にディノゾールが後退する。

装甲を刻んだ結果か、打撃攻撃も格段に通りやすくなっている。効いている証拠だ。

「ぬん……ぐあああッ………」

ブレードの解除と共に左拳をめり込ませ、同時に頭部を掴み上げた右腕と共に上手投げ。

力なく転がったディノゾールの姿を確認すると、再度メビウスブレスの力を増幅させた。

『ハアアア………!』

今できることを探し、やがて聞こえた心の声の先で掴んだ光。

その光で今、立ちほだかる闇を——超えて行け。

(☒メビューム——)

「☒エメリウムスラッシュ☒ツ!!」

が、メビウスが光線を放つよりも早く。

地面を挟りながら進む熱線が黒い影を追う形で乱入し、それは盾とされたデイノゾールの身体を首元から焼き切ってしまう。

『ツツツ——……………!』

デイノゾールが真後ろに倒れ込み、そして爆散。

吹き上がり、やがて晴れた黒煙の向こうから姿を見せたのは……………蝙蝠。

「わりい。……………仕留め損ねた」

遅れて並び立ったゼロと共にバット星人を見据える。

全身は焼け焦げ、翻していたマントも既に原型を留めていない。ゼロとの戦闘で相当のダメージを負っていることが伺えた。

「まさかあれで倒れんとは思わなかつたわ……………ウルトラマンの光線浴びたら普通爆発すんだろ。空気読め空気」

『黙れえツ! 下等生物の分際で……………ツ!』

体力や装甲と共に余裕まで焼け落ちたか、憤るバット星人は正に怒髪衝天と言った様子だ。

だが怯むことなく、真正面から言い放つ。



「……終わりだな。お前の野望もここまでだ」

「……そうね。終わらせるわ」

ガイアも揃い、いよいよ終局へ差し掛かったと思われたその時。

未来の声に応える形で舞い降りる声。その主である少女は、伺い知れぬ何か渦巻く双眸をウルトラマン達に向けた。

「それがあなたの決められた道だっていうの……？ 笑わせないで」

揺れる装束が翼のように夜闇に広がってゆく。

以前映るのは憎悪と殺意。けれどその中で確かに、誰かへ救いを求める声がある。

「あなたも、スクールアイドルも、この世界と一緒に消し去る。それが私の——」

今一度手を伸ばそうとした、その刹那。

誰かへ届く瞬間を待ち望む声を覆い隠すように、更なる闇がユリを包んだ。

「え……………」

『……調子に乗るなよ。小娘が』

万物を吸い寄せるような影の発生源はバット星人。

奴から伸びる黒がユリを絡めとり、少しずつ、されど着々と、彼女の身体を蝕んでゆく。

『目的のため仕方なく付き従っていたがもう限界だ。……元はと言えば、貴様が影法師

様を取り込んでさえしまわなければこうはならなかったのだッ!」

「影、法師……………」

利用されている。詳しいことまでは把握していないが、赤い靴の少女の言葉が真実ならば、今日の前で起きていることは奴がユリを切り捨てた、ということに他ならない。

外的な要因で彼女に宿っていた力。それがバット星人に還元、ないしは付与されるとなれば……、

『始めからこうするべきだった。であれば貴様に従うこともなく、剩え影法師様の力まですて手に入るのだからッ……………!』

「ユリッ……………」

手を伸ばすよりも早く、ユリの姿が闇の中へと溶ける。

瞬間、溢れ出す瘴気はバット星人をも包み込み、瞬く間にその体躯を何倍にも膨れ上がらせてゆく。

『……………次は貴様等だ、ウルトラマン。愚かにも立ち上がったことを地獄で後悔するとい』

い』  
変化はそれだけでなかった。

轟いた複数の咆哮に視線を散らせれば、今しがた倒されたばかりのコツヴとディノゾール。デマーガやヘルベロスでさえもが怨念となつて蘇り、宙を舞いながらバット星人へ

と集約してゆく。

『ハハハ……ハハハハハッツツ!!!!』

「なっ……!!?」

晴れた瘴気の中から姿を見せたのは、ゆうに500メートルは超えているであろう怪物。

形状だけならば神話で言うケンタウルスのようだが、四本の手足が蠢く様はそれとは似ても似つかない異質さを醸していた。

なによりもその異形さを引き立たせるのは全身にある六つの頭部。

ヘルベロスとデマーガで構成された双頭のみならず、胸にはバット星人、下半身にコツヴ、そして二本の尾にはディノゾールと、それぞれの頭部が唸りや奇声を鳴らし続けている。

『改めて言おう。人間に未来はない……滅べ』

唐突に現出した最後であり最大の悪夢は、見る者全てに、抱えきれないほどの絶望を齎した。

## 22話 願いを繋ぐ

世界の終わりは突然だった。

前触れも、そんなもの一切なく出現した怪獣達は瞬く間に世界を破壊しつつ、大切なものを全て、摘み取っていった。

「う……」

崩れ行く世界の中、煤や傷に塗れた身体を瓦礫に隠れる親友の前まで引き摺った。

伸ばした指先が触れた彼女の腕は冷たかった。辺りで燃え盛る炎の熱に反し、ずっと昔から感じ続けていたはずの温もりが存在しない。

『ツツツ——！』

「ああ——う……！」

それが何を意味するのか理解する間もなく巨影が吐き出した何かが近くに着弾し、爆発。

巻き起こった熱風は容易く自分の華奢な身体を吹き飛ばし、同時に覆い被さっていた瓦礫と共に親友が宙を舞う。

「カエ、デブ……？」

痛みも忘れ這いずった先で、遅れて現実を悟る。

校舎の破片。大切な思い出の詰まったそれによって隠されていた彼女の顔は、最早誰かと判別できるようなものではなくて。

「あ、ああ………」

けどわかる。ずっと隣にいたからこそ、それが紛れもない親友の身体だと心は理解してしまふ。

「嫌……あんなのが、最後だなんて………」

赤黒い色に塗り潰された、焼け焦げ拉げた顔に最後に移した表情を重ねる。

手を伸ばした輝きに届かず、救いたいと願ったものさえ救えずに流した涙……いくら思い返しても、焼き付いたその顔が離れない。

「なんで……！　なんでこんなッ……！」

辛うじて形を留めていた友の手を抱きながら、泣き喚くように声を吐き散らした。

冷酷な世界を恨み、理不尽な現実を憎み……何より自分自身を呪う。

きつと世界の運命は変わりはしなかった。けど、自分達にこの顛末を迎えさせたのはなんだ。

自分が☒スクールアイドル☒になんてさえ誘わなければ、彼女との記憶は、楽しく美

しいまま終われたはずなのに。

『……ニクメ』

「え……」

何度も打ち付けた腕から滲む朱が広がってゆく最中、絡みつくように耳に触れた声。

それを認識した時には既に、どす黒い何かが身体の、意識の奥底で渦巻くようにのた打ち回っていた。

『ウラメ、ケシサレ、ワレヲハバムスベテヲ……』

意志を感じぬ声音に反し、沸き立つような憎悪が胸の奥からせり上がってくるのを感じた。

そうだ。

あんなものが存在していたから、こんな結末を迎えてしまうんだ。

「……スクールアイドル……」

『……ホロボセ、ヒカリ……ヲ……』

低く漏らした声が囁きを掻き消し、飲み込む。瞳が映すものは最早夢でも希望でもない。

崩壊する景色の中に凜と、黒い百合の花が咲いた。

闇夜の空にもハッキリと映る異形の影。

歪に、禍々しく、あり得ないほどに巨大な体軀を蠢かせる様はまさに絶望の体現者……とでも言い表すべきか。

——キユウキヨクガツタイカイジンユウ究極合体怪獣

テラキマイラ

『……滅びの運命は覆らない。絶対にだ』

複数が入り交じった咆哮と重なり、直接語り掛けてくるような声が頭の中に響く。

奴の言う滅び。それは驕りであり宣言だったのか、テラキマイラの全身が淡く発光した直後に世界は——一変した。

『ツツツ——！』

閃光が走り、同時に町を覆う爆発の群れ。

防ぐことも、まして回避も間に合いはしない。理不尽なまでの厚さと火力を伴った砲弾の束が三人のウルトラマンを襲った。

『この世界に未来はない。消えろ』

人々の悲鳴やどよめきをも掻き消す爆音が幾度となく上がる。

衝撃波に焼かれ揉まれる街並みの中に巨人の身体が崩れる。その力の差が歴然であるのは明らかだった。

「なる……バカスカ打ち込みやがってッ!」

ここである程度のパターンを見切ったのか、砲撃のインターバルを突いたゼロが一気に飛翔。

『アエエエリヤッ!』

撃墜に放たれた光弾を掻い潜り、極限まで速度と勢いを増したゼロの豪脚が爆炎と共にテラキマイラの胸部に突き刺さる。

部位を構成するバット星人の顔面が歪む。反撃の狼煙が上がった。そう思われた次の瞬間、その理想は容易く打ち碎かれることとなる。

『ツツ——!』

「な——んツ!?!」

一撃を見舞ったゼロの上。唸りを散らすヘルベロスの罅が彼の足に喰らい付き、そのまま胸部から引き剥がしては真下へ放る。

間髪なく光弾の雨が降り注ぎ、ゼロを飲み込み巨大な火球と化したそれは地上へ着弾すると同時に大規模な爆炎を吹き上げた。



「陸——」

攻撃の行く先はそれだけに収まらず。

隕石の如く流れ落ちるそれらはメビウスをも強襲。咄嗟にバリアを展開し防御を図ろうとするも——、

「がッ……あああああッ……！」

障壁を容易くブチ抜いた光は絶えずメビウスを射止め、熱波に薙ぎ払われる形で膝を折る。

立ち上がるにも全身に走る痺れのような感覚がそれを許さない。ただ力なくその巨体を地面へと投げ出した。

『ドウアアアッ!!』

翳む視界が光線を打ち上げるガイアの姿を収めた。

だがそれも間もなくして爆炎の中へと消える。如何に光の巨人が放つ光線と云えど、不条理の化身である奴の砲撃には太刀打ちなど敵わない。そう物語るように。

「くっ……そ……！」

時間にして、ものの数十秒だろうか。

絶望の暗雲を前に立ち上がり、闇を晴らさんと立ち上がったウルトラマン達……それらは圧倒的なまでの悪意を前に倒れ伏している。

『ツツツ——！』

終焉の鐘を鳴らすように、膨大な熱量が奴を中心に集約してゆく。

文字通りの終止符であるのは明らかだった。膨れ上がった破滅の光は残酷に夜空を照らす。

「ツ……い」

これまでかと視界を閉ざしかけた瞬間、解放された熱線の行く先が自分達ではないと悟る。

破壊の魔の手が狙いを定めたのは、未だ動かぬ彫像と化したままの——二体の巨人だ。

「春——」

赤黒い光は悉くを焦がし融解させる。通過した跡に伸びる溶岩の一本線がそれを告げる。

地表すらも溶かすほどの熱量だ。硬化している二人はおろか、メビウスだって受ければ欠片も残さず消滅するだろう。

バカなことを考えるな。それよりも見ろ。この熱線を放っている間の奴は完全に無防備。今なら有効な攻撃だって叩き込めるはずだ。

救うべきはこの世界なはず。だったら元々関係もなかった奴等のために賭けに出る

よりも、確実に奴を倒す方がいいに決まって――、

「いいわけ……ねえだろツ!!」

過った邪な声を払い、弾かれるように飛び出した。

『ゼアアアアツ!!』

全身、全霊を込めて、形成した光の盾で熱線を向かい撃つ。

また踏み違えるところだった。

この世界を救いたい。大切な人を守りたい。その想いに二言も嘘もない。だから、もしかしたらこの行動はそれに反することなかもしれない。

けれどここで背を向ければ☒日々ノ未来☒を裏切ることになる……それだけは絶対にしたくないから。

「う、ぐ……あああああツ………!!」

熱い。熱いあついアツイアツイ。

バリア越しだというのに、貫通してくる熱気は許容範囲を遥かにオーバーしている。

「未来ツ………!」

亀裂の走った壁が綻び、地に伏したままの陸から飛ぶ声が危機を告げる。

防ぎきれないことなど最早明白だったが、それでも込める力を緩めはしなかった。

「諦め……るかア………!」

憧れてきたヒーロー。その背中が教えてくれたもの。

一時とは言えその存在になったのだ。ならばやるべきことは一つなはず。

『ンン……アアアアアア……！』

踏ん張れ、ひり出せ。

この場に立つたというのならやって見せる。

「……最後まで諦めず、不可能を可能にする……」

皆の信じてくれた自分を貫くために。

あの時の自分に——恥じないように。

「それが……ウルトラマンだ！」

「……思い出して、くれたんだね」

未来の叫びに呼応するように、メビウスを中心に光が溢れる。

けれどその発生源は自分ではない。もっと淡く、弱々しく、それでいて揺るがぬ意志を秘めた光。

「君は……」

瞬く熱の中に浮かぶ、深紅と純白の花。

「ううん。ずっと、あなたの中にあっただよね。夢見る想いは」

初めて、彼女の笑顔を見た。

名も知らぬ花が咲かせた最後の灯り。それは翳みかかった希望を、再度無限の輝きへと昇華させる。

「……だから、応えてくれた」

メビウスの光は彼女の願いに乗り、封じられた戦士達に宿っては蒼い二つの煌めきとなり雄々しく広がってゆく。

『ツツツ——……!!!』

直後に迸った金光が熱線を押し戻し、テラキマイラを穿つ。

撃墜された数多の視線、そしてメビウス達の銀色の眼が映したのは、再び光に満ちたその身体を躍動させる二体の巨人の姿。

「ちよつとちよつと……面白そうなことやってんじゃねーの」

『まあともかく、役者は揃った……ってどこか?』

バリアの消失と共に脱力し、膝をついたメビウスに差し出された赤い腕。

二角の影に灯る、勇ましくも穏やかな双眸。初めて彼等と出会ったあの日と変わらな

い眼がそこにあつた。

「やりましょう未来さん。この世界と……あの子達の想いを守るために」

「……ああー！」

交わす言葉はそれだけだった。ただ手を伸ばすことすら諦めかけていたその腕を、掴む。

ついで集結した五人の勇者。見上げた先でなおも蠢く強大な闇との戦いは……終局を迎えようとしていた。

「……やっぱり、ここに来たね」

復活した勇者も加えた巨人達と、未だ衰える様子を見せない悪魔の対峙。更なる衝突を予感させる光景をただ人々が見守る最中、同じ光を宿す少女が三人、集う。

「梨子ちゃん……病院にいないの？」

「うん……元々大した怪我じゃなかったみたいだし、病院のベッドも足りなかったから」

轟音が耳を劈き、閃光と爆炎が再度夜空を満たしてもなお、少女達に流れる空気が変わることはなかった。

「それに……頼まれちゃったから」

「赤い靴の女の子に？」

「曜ちゃんも？」

「うん……まあ、ただ頼まれたから、っただけじゃないんだけど」

託された願い、誰かへの想い、そして自分自身の心。

抱くものはどれも、これしきの事じゃ挫けはしないから。

「……やろっか」

ほの暗い舞台に立つ。ホントいなら今この瞬間、最も輝いていたはずのステージ。けど終わりやしない。何も終わってない。

伝えたかった気持ちも、自分達の想いも、全部、全部ここにあるから。

「……そう言えば名前、決めてなかったね」

「……名前？」

「そう。スクールアイドルなんだから、何か必要じゃない？」

「ほんつと、形から入るわね……」

「名前かあ……」

一瞬、曇り顔を互いに向け、嘖き出すように笑う。  
ああそうだ。自分達はもう知っている……この☒名前☒を。

「——Aqours」

円陣を組み、遥かな輝きに重ねた声を馳せる。

「——サンシャイン!!!」

垣間見た輝きにはきつと、程遠いものだろうけど。

それでもきつと無二のものになると信じて——精一杯、輝くんた。



## 23話 ウルトラの奇跡

戦いの場は街並みすらも伺えぬほどの高度にまで移る。歪な巨獣の周囲を五つの光が飛翔していた。

『☒☒ストーリーウムブラスター☒☒ッ！』

「☒☒ワイドゼロショット☒☒ッ！」

次々に殺到する弾幕を回避し、焼き払いつつ、五人のウルトラマンはテラキマイラへの接近を図る。

人数が増えたといえど依然不利な状況であることに変わりはない。下手を打てば一瞬でゲームオーバーだ。

「ユリッ！ ホントにこれが君のしたいことなのかよ……それじゃあの子の気持ちはどうなるんだ！」

繰り返し、何度も呼びかけるが返事はない。沈黙こそが答えなのか、はたまた届いてないのか。

ともあれこのデカブツをどうにかしないことには何も変わらないというのに……

突破口が見えない。

「赤の他人も同然の奴のために必死になっちゃって……相変わらずあのお人好しっぷりにや敵わねえわ」

「差し詰め囚われの姫を救う王子様ってどこか？ ま、お膳立ては任せなさいよー」

光彩豊かな軌跡を描き、一気に速度を上げる影が一つ。

「何があつたかは知らねえけど不細工なカツコになって……これじゃ高尚もクソもねえな蝙蝠野郎オー！」

乱雑に振るわれる腕を掻い潜り、至近距離からテラキマイラの真正面へ位置取ったエックス。

ゼロスラツガーによる援護を受けつつ、ガラ空きの腹部に向けて解き放つ。

「☒ザナディウム光線☒ッ！」

X字の電子砲がコツヴの顔面に着弾。爆炎と共に紫電が舞う。

他のウルトラマンとは性質の違う一撃に呻きを漏らすテラキマイラだが、それでも決定打には至らず何度目かも知らぬ咆哮が夜空を震わせた。

『硬いな……生半可な攻撃じゃ通用しないぞ』

「生半可って……結構本気でやったつもりなんだけど……」

立ち込める暗雲の黒は未だその深さを保ったままだった。

先行きが見通せぬまま、時間と余力だけが削られてゆく。

「あのー！」

八方塞がりに思われた状況下、導くように一筋の声差し込む。

「考えがあるんですけど、いいですか？」

「遙……？」

声の主は意外な人物だった。テラキマイラの背後を飛ぶガイアからテレパシーを通して遙の意図が伝わってくる。

「……凍結系の攻撃の直後に熱攻撃を加えることって出来ますか？」

『出来なくはないと思うが……それが？』

「分子結合って、急激な温度変化を加えると崩壊しやすくなるんです。あれだけ硬い表皮なら、恐らく鉄に近い分子構造だと思うので……もしかしたら奴の防御を削げるかもしれません」

これまで一步引いた位置で会話を眺めていることが多かった彼からの提案。

首を横に振る者はいなかった。彼なりの踏み出し方、なにより現状において彼の頭脳に勝る信頼はない。

「難しい話によくわかかねえけど……とにかく燃やせばいいんだな？」

「はい……冷やす方は僕達が！」

一度メビウスに視線を重ねた後、砲撃を回避する形で四方に散る巨人達。異物を打ち払わんとする奴の中心核——バット星人が構成する胸部へと攻撃を集中させる。

『ドウアアッ!』

『ウルトラフリーザー!』

ガイアとタイガ。両者の腕より発された吹雪にも近い冷気が奴の顔面を中心にその巨体を凍てつかせる。

駆動部の氷結は桁外れの馬力によって碎かれてしまいが、凍り付いた胸部を中核に霜が張り付いている。

直後、その凍気を融解させん熱量が迸った。

《CYBER ZETTON ARMOR》

《ACTIVE》

金色の光が闇夜を舞い、高熱を従えてエックスへと合着。

宇宙恐竜の名を冠した鎧の生成する火球は瞬く間に膨れ上がってゆき、周囲の空間すらも焦げ付き揺らめかせながら放出される。

「ゼットン火炎弾ッ!」

轟。一兆度を超えるという熱が疾走する。

着弾と同時に爆風が吹き荒れ、文字通りの火力が瞬く間にテラキマイラを染める白を消失させて見せた。

『デエエエエリヤツ!』

温度差攻撃による装甲の劣化。遥の挙げた推測を証明したのはゼロによる一撃だった。

叩き込まれた烈火の豪脚は硬質なバット星人の頭部に亀裂を走らせ、その奥から微かな光を伺わせる。

「未来さん!」

「行けッ! 未来イツ——!!」

道を切り開いた友の声を受けながら特攻。突き出したメビウムブレードを構え、貫くべき□一点□を指す。

接近する未来を拒むように黒い波動が押し寄せるが、その悉くを切り裂き彼女の元へ突貫した。

「君が……までどう藻掻いて、何を抱いたのかなんて俺にはわからない。けどあの子を……君自身を否定するようなこと言うなよ!」

刃が帯びてゆく熱の正体などとうに知っている。

今はただそれを——ブチ込むだけだ。

「思い出せ……君自身を——相墨ユリを!!」

遂に到達したメビウスの刃が深々と突き刺さる。

直後に溢れた光は亀裂を伴い広がってゆき、小さな歌を響かせた。

差し込んだ光に乗り、懐かしい声が出た。

近いようで、果てしなく遠い。もう届かない場所にあるそれは胡乱な心を強く縛り付ける。

「……」

重なった歌声が記憶の中を駆ける。

触れる度に蘇ってくるのは輝かしい思い出だ。あの子と歩んだ大切な、何物にも代え難い宝物。

(あ、れ……?)

暗闇の中、回らない思考が模索する。

違う。聞こえてくる声は、自分達の歌じゃない。けれど本質的には同じ、ただ純粹に、その瞬間を楽しむような音色だ。

(千歌……?)

自分はこの声を知っている。

初めて触れたはずなのに、旧懐すら覚えるほどに強く惹かれた光。

姿は見えない。されど聞こえ、見える。

微かな明かりが灯るだけのステージ上。拙くて、ちぐはぐで、決して完成されたものではない歌声と舞い。けれど眩しいくらいに輝いている。

その輝きはきつと、かつての自分達にも宿っていたもののはずだ。

「……」

視線を落とし、今の自分を見つめてみる。

醜悪だった。かつての光すらも見失い、ただ壊れたブレーキのまま走り続けてきた道化の姿。途端、これまでの自分の行動が虚しくなる。

そもそも取り戻したかったものとは何だ。自分達が、大切にしていた時間は一体何だった。

全部、全部あの輝きに集約していた。そのはずじゃなかったのか。

「……本当、眩しいね」

「……………」

その直後に起こった現象が、果たして現実であったかは定かではない。

でも確かにそこにあつたんだ。共に駆け抜け、笑い、泣き、そして失い、この瞬間まで追い求めてきた友の姿が。

「カエ、デ……………」

「…久しぶり、でいいのかな？ 随分遅くなっちゃったけど……………やっと、迎えに来れた」

どれだけの時間が流れたのかなんて最早わからないけれど、揺れる笑顔はあの日のままで。

黒く、醜く染まった自分とは正反対の純白が闇の中で瞬いていた。

「…私、わたし……………」

「いいよ、何も言わなくて」

「私……………なん、で……………」

靄が晴れるように、明瞭になってゆく思考。

途端に抱えきれなくなった感情は雫となり、零れた。

「確かに許されることじゃないと思う。いっぱい奪って、傷付けてきた。その責任は果たさなきゃ。……………でも私は、ユリがああ時間を大切に思ってくれてたのが、嬉しかった」

記憶の中で反芻するばかりだった声は、痛いくらいに染みた。



認めたくなかったんだ。何かのせいにしたかったんだ。現実には頓挫し、理不尽に摘み取られていった自分達の輝き。

矛盾している。あの時間が大切だったから突き進んできた道の跡に残ったものは、その大切なものの亡骸。短いながらも二人で紡いだ絆の形を、自ら否定した道化の踊りだ。

「……色々、あったよね。ユリから誘ってきたのに何にも決めてなくて、作曲とか、踊りとかでてんやわんや。たまに喧嘩しちゃったりもしたよねえ………ほんと、楽しかった」

在りし日の思い出と共に語りながら、あの日から失われたままの温もりが腕を広げる。

「……ユリはどうだった？」

ああ、そうだ。どうして千歌に惹かれたのか、彼女が進む先を見たいと思ったのか。高尚な理由とか目的とか、それ以前に。もつともつと、単純なもの。だから、思い出させたんだ。

「たのし、かったよ……！」

「うん……私も」

閉じ込めていた感情を吐露し、伸ばした手がようやく彼女に触れる。

途端、崩すまいと堪えていた最後の関すらも決壊し、ただただ、溢れるままに泣いた。「だから否定しないで。私とユリの思い出、私達の輝きを。……あんな形で終わっちゃったけど、私にはもう十分なくらい眩しくて、楽しい時間だったから」

けれどあの日引き裂かれた運命を辿るように、触れた直後から失せてゆく彼女の身体と共にその温もりは失せてゆく。

薄れてゆく存在を離すまいと必死に抱き留めるが、親友はなおも穏やかに言った。

「カエデ……」

「……大丈夫。きつとまた会えるから。だから——」

最期まで変わらぬ笑みのまま、友は泡のように弾け、消える。

「また一緒にスクールアイドル……やろうね——……」

やがて誰もいなくなった虚空を掴んだ手のひらに舞い降りる残滓。

淡い雪のように溶けてゆく最後の温もりを胸に抱きながら、願った。

「……守って」

言えた立場ではないのはわかってる。許されることはないのも承知だ。

けど、まだ願うことが許されるというのなら。

この願いが叶うのなら他にどんな報いを受けたっていい。だから今はただ、心の底

から叫ぶんだ。

手を差し伸べてくれた……………ヒーローに。

「……………お願い、未来。この世界を……………スクールアイドルを守って！」

「ツツ……………！」

声が聞こえた。

歌声だけじゃない。助けを求める、ウルトラマンを呼ぶ声が。

「ユリ……………」

のたうつように藻掻き始めたテラキマイラを眼前に据え、未来は深く息を吐く。

やるべきことは変わらない。ただ一つ、背負う願いが増えただけ。

今やるべきはその願いに応えることだ。

『オオオオオ……………！』

どれだけあの瞬間に心を躍らせたのだろうか。

何度も真似た。何度も練習した。憧れたヒーローの、象徴ともいうべきポーズ。

(……☒メビウム……)

描く軌跡はこの瞼に焼き付いた光景とは違う。でもこれでいい。自分なりの形で、解き放つ。

平和を乱す怪獣や宇宙人との戦い。その終止符を打つ——必殺の光線を。

(——シユート☒)

十字に組んだ腕から伸びる金色の光。

闇を切り裂き突き進む奔流は、凄まじいまでの眩さを以ってテラキマイラへと直撃した。

「うおおおおおツツ!!」

未来一人じゃない。一緒に並び立つ友、支えてくれた皆、託された願いの全てが込められた光線は巨獣の肉体を少しずつ照らし、その闇を晴らしてゆく。

『ツツツ——!!!』

だが奴もただでは撃ち滅ぼされないか、バット星人の怒号に続き轟いた咆哮は僅かにメビウスの光を押し戻す。

光の巨人と闇の巨獣。意志と意地の、文字通りの根競べ。

「まだ……足りない……!?!」

「くっそ、ぶっ飛ばされる流れだろこれ……!」

メビウスの援護に四人も光線を打ち出すが、テラキマイラはなおもその力を衰えさせぬまま実体を保っている。

脅威的なまでの粘り。奴の執念がそうさせるのか、ここまでしてもなお倒しきることができない。

「だ……ああああッッッ!!」

振り絞れ。奴が想定外の力を見せたというのなら、それ以上の力で押し戻せ。

何かを守りたい想いに限界なんてない……ああ言い切ったのは自分だろ。

どんな時でも諦めず、不可能を可能にする。それが――、

「ウルトラマ——ンッッ!」

また声が聞こえた。

出所も、誰のものなのかもわからない声。されど確かにそれは、自分達に向けられたものだ。

「頑張れ! ウルトラマ——ンッ!」

「そうだ！ 負けるなッ——！」

「守ってくれ……この世界を！」

続く声は絶え間なく上がる。

未来達の姿が心を動かしたのか、一度は疑視したヒーローの背中を見上げ、人々は絶え間ない声援を送り続けている。

まるで小さな頃、テレビの中のヒーローを応援していた自分のような声。

その声を受け——何かが湧き上がってくるのを感じた。

（そうか……そうだよな）

今理解した。

初めてその姿を見て、心を打たれたあの日から。プレゼントにねだり、真似事をして遊んだ、時には支えになってくれた。

作り物のヒーローから生まれたものだけど、この気持ちだけは紛れもない本物で。

（……ずっと、傍にいてくれたんだな）

だからこの直後に起こった光景を、自分達は忘れることはないだろう。

「ッ……！」

傍らに灯った暖かさが瞬く間に膨れ上がり、眩い閃光が周囲を照らす。

最後に灯った蒼い輝きが暗雲を払い、その姿を現したのもまた、光の巨人だった。

「え……?」

『アンタは……!』

誰もがその名を知っていた。

人々の声に応え、光と共に駆けつける——赤と銀のヒーロー。

「……!」

未来と視線を重ね、静かに頷いた彼もまた自分達と並び必殺の光線を放つ。

メビウス達の光と融合したそれは際限ない輝きを生み、テラキマイラを消滅させてゆく。

(……アンタにさ、ずっと言いたいことがあったんだ)

断末魔もろとも奴を飲み込む光の中、念ずるように永遠のヒーローへ伝える。

この想いはこの先も消えることはない。いつまでもずっと心に残って、日々ノ未来を支え続けてくれる。

だからただ一言——こう言うんだ。

(今の俺を作ってくれて……ありがとう)

自らもまた光と一つになるように、言葉にした想いは闇の向こうへ、どこまでも伸びた。

暗雲が晴れ、長く続いた夜は明けてゆく。

光に溶けてゆく黒の中、本当の彼女は最期に穏やかな笑みを見せた。

「……ありがとう……未来……」

影に囚われていた魂が、空へと還る。

泡のように消えてゆく白い花弁を見送るように、昇った朝日が暖かく世界を照らしていた。



## 24話 未来の輝き

振り返れば、本当に現実離れした日々だったと思う。

空想の中になしかあり得なかった光の巨人と出会い、自らもまたその存在となつて戦つた。

幼き日の自分に言つても信じはしないだろうけど、それでも確かにそこにあり、駆け抜け、大切なものを見つけた。

そんな——ひと夏の冒険。

「未来くーん！」

朝焼けを背にその場所へと戻つてきた未来達を、太陽にも負けない輝きが出迎えた。

揚々と互いの手を交わす者、無事を喜び抱き留められる者。目の前にある景色はある意味、普段通りのものだ。

けど胸にあるものはこれまでとは違う。進むための試練を、自分達は乗り越えたんだ。

「…おかえり、未来君」

「…ただいま」

自らも眼前の少女と言葉を交わせば、ふと左腕に違和を覚える。

そこにあつたはずの熱は急速に失われていつていた。宿るプレスは光の粒子となつて天へと流れてゆく。

ずっと焦がれ続けてきた光。けど未練はない。ずっとこの胸に残つてゆくから。

『……俺達もそろそろみたいだな』

空へと昇るそれらを見送るように視線を上げれば、共に戦つた別世界の勇者達の瞳があつた。

内の一人——ウルトラマンタイガの身体を包む淡い光が、告げていた。

「…帰るんだな」

『ああ。俺達をこの世界に繋ぎとめていたのはあの赤い靴の少女だ。彼女があるべき場所へ戻つた今、俺達も俺達のあるべき世界に戻る』

「俺は自力で来たから関係ないんだけどな。……でもまあ、結構なこと長居しちゃつたし、そろそろ戻らねえと。それにお前等見てたら、負けてらんねえって思っちゃまってさ」

別れの時がすぐそこまで迫っていた。

奇跡の出逢いから始まり、苦しみ、迷いながらも、大切なものを掴んだ日々。そんな冒険が今、終わろうとしている。

「……ありがとう、ウルトラマン。アンタ等がいなかったら——」

「……掴んだのは、未来さん達自身ですよ」

たかが一週間程度、されど一週間程度。残った時間で語るには到底足りない想いを簡潔に言葉にした未来の声を遮ったのは、それを向けたはずの春馬だった。

映るのはタイガの顔ばかりで、彼自身がどんな顔をしているのかはもう伺うことは叶わない。けれどもそれはきつと穏やかなものなのだろう。

「俺、この世界で見たこと、感じたこと……絶対に忘れません」

「……俺もだよ。春馬達が、皆が思い出させてくれたもの、ずっとここに刻み込む。忘れな  
いよ」

消えゆく巨人の姿を見上げながら口角を上げる。

さざ波と浜風の音だけが揺れる静寂の後、この瞬間を噛み締める者達と代わるように、もう一人の巨人が零した。

「……そんじゃま、最後はウルトラマンらしくいきますか」

『だな。これ以上は名残惜しくなる奴が増えるだけだろうしな』

まだ微かに残滓する熱の感覚に触れながら、改めて彼と視線を重ねる。

これから先、この世界の日々ノ未来が彼等と再び顔を合わせることはきつとない。もう互いの行く先を見ることは叶わないけど、道はまだ、どこまでも続いてゆくんだ。

「…じゃあな」

「はい。皆さんも……………お元気で」

最後の言葉を贈り合うと共に、その瞬間は訪れた。

『『シユアツ!!』』

巨悪を退け、人々の平和と笑顔を守ったウルトラマンは、声援を受け飛び去ってゆく。幼き日は心を躍らせたその背中も、この時ばかりは一抹の寂しさを生んだ。

「…なあ、陸」

「あ？」

その感覚がどうにも心地悪くて。

ついつい心は、思ってもないことを口走ってしまふ。

「俺……………夢でも見てたのかな。凄くぶっ飛んでて、バカげた夢」

「……………いいんじゃないですか？ 夢でも」

返す声は陸のものではない。憑き物がとれたような、これまでよりもすつきりとした

面持ちで遥は言う。

「白昼夢でも、明晰夢だつていいと思います。……ここに、残ってますから」

かつて逃げるようにこの場所へ来た彼の眼に曇りはない。訳までは継がずとも、その心中にあるものは明瞭だった。

「……ま、相変わらず難しい話はわかんねーけどよ」

夢に目を背け続けてきた親友も続く。

彼もまた普段と同じ。醸す空気は見知ったそれだ。けれどこれまでと違う何かが流れている。

「俺もお前も、一応は前に進めたんだ……それで十分なんじゃねーの？」

「……そうだよな」

終ぞ溶けていった熱の感覚から手を離し、三度空を見上げる。

夢の行く先に限界などない。進みだした赤と銀の光は、どこまでも遠く、伸び続けている。

\*\*\*

「ぐっ……ぬぬ……！」

「ほーら、無理しないの」

抱えていた重荷がすつと軽くなる。

ゆうに十キロは超えているであろうそれを軽々と持ち上げた果南に驚愕の視線を注ぎつつ、未来は脱力の息をついた。

「ワンチャン………とか思ってたけど、やっぱりダメか……」

「？ なんのこと？」

「……なんでもないです」

一週間後。突如襲来した虚構の脅威を乗り越えた世界は、再び元の日常を取り戻しつつあった。

怪獣によって破壊された街の復興作業。地元のボランティアに名乗り出たはいいが、正直役に立っているとは言い難いのが現実で。

改めて自分が普通星人であると自覚させられるが……以前ほどの不快感や劣等感  
はなかった。

「お疲れさん」

一通りの作業を終え、投げ渡されたペットボトルを受け取りつつ積まれた材木に腰掛

ける。

疲れた身体に供給される水分は染みる。喉から奥へと流動する何とも言えない感覚を味わいつつ、未来は同じくその場へ腰を下ろした幼馴染へ零した。

「…疲れるな」

「ま、実際人力だけでやるにやちつと重い作業だしな」

「……ウルトラマンなら楽々なんだろうな」

「無いものねだつてもしゃーねーだろ。やれる範囲でやるしかねーべ」

いつになく気の抜けた声音を交わす。

互いに眺めるのは真夏の空。吸い込まれるような深い青は、先日の災いなど感じさせないほど穏やかなものだ。

「…そっちの用はいいのか？ さつき博樹さんに呼ばれてたろ」

「大体済んだ。そもそもあの人の目的俺じゃなくて遥だったしな」

「遥……？ なんかもまた珍しい組み合わせだな」

「なんかアルケ……なんちゃらのことで話があるとかそんな。やっぱ天才様の住む世界はわからんわ」

呆れ半分畏敬半分な含みで陸は言う。そう言えば遥が元いた東京の高校と博樹の学校は同じだったか。

となると何かしらの企画や研究に遙を勧誘しに来た、ということになるのか。

「そつか……やつぱ凄いな。遙、東京戻るのかな」

「いや、断つてたぜアイツ」

「…マジで？　なんでまた」

「なんでも、こつちでやりたいことができたんだとよ……いい面してたわホント」

意外に思う反面、どこか腑に落ちるような感覚もあった。

あの日以降、目に見えて一番変化があったのは遙だ。以前ほど距離はもう感じず、笑い顔を見る機会も増えた。

未来達自身気掛かりにしていたのもそうだが、何より人心地するような梨子を見て安堵したのは記憶に新しい。

その真意を知り得ることはないのだろうが、彼もまた未来達同様、傍にいる者の支えで踏み出すことができたのだろう。

「しつかしま、自分の力が誰かに求められてるってのはいいねえ。こちとら自分のやりたいこと通すだけでも一苦労だつてんのに」

「…親御さんと話、できたのか？」

「いい顔はされなかつたがな……でもまあ、一応応援はしてくれるってさ。高校卒業したら千歌んとこで働かせてもらう」



「え、お前大学受験しないの？」

「それはハナからわかってたことだろうが。今更僻むな」

思い切りの良さには驚かされるが、それでもやはり感心と心弛びが勝った。

大なり小なり差はあれど、周囲は踏み留めていた足で再び歩き出している。

そんな彼等と比較し、自分は、と考えてみる。

「……お前はどうか決めてんのか？」

未来の意を読み取る形で陸がその答えを促してくる。

「……いや、まだ。何になりたいとかはわかんないまま」

「そ」

結論から言うと言えは出なかった。進むべき道、将来の自分の姿なんてまだ白紙のまままだ。

弛緩した時が流れるが、何も掴んだものはそれだけじゃない。束の間の静寂の後、潮風が運び込む夏の熱気を払うように未来は己の句を継いだ。

「……けど、何がしたいかはハッキリ見えてるよ。俺は馬鹿正直なお人好し。そこだけはやっぱ、変わんないみたいだ」

「……だろうな。でなきやお前じゃねえ」

才能も特技も、一途に打ち込んだ何かもない。依然日々ノ未来は普通星人なままだ。

それでもやっぱり、この胸にあるものに嘘はつけないんだ。  
ウルトラマンでも、人であっても、そこだけはきつと変わらない。

「…だからとりあえず、目の前のものに一つ一つ向き合っていきたい。答えはその後からだって、遅くはないだろう？」

「……とか言ってる間に卒業しちまわないといいけどな」

「…貶すか応援するかハッキリしろよ」

「応援してるっつの……ついでに俺の方も応援しやがれ」

揶揄うように笑いながら、陸はゆらりと立ち上がる。

十千万旅館主体の炊き出しを手伝っている、とか言う話だったか。多くのボランティアが集まっているだけあり未来以上に忙しいらしい。

「ま、頑張ろうぜ。お互いな」

「……おう」

小さくなつてゆく彼の背中から目を離し、遠い友人が去っていた方角を望む。  
彼等もきつと掴むべき未来のために、走り続けているのだろう。

「よし……！」

意気込むようにペットボトルの水を飲み干し、その勢いのまま下ろしていた腰を上げる。

「もうひと踏ん張り……頑張りますか！」

追い風が吹いていた。

目指す場所も、世界すら違っているけど、進まないことにその先はない。そこに変わりはないのだから。

重ねた想いは離れない。これからも共に、歩み続けてゆくんだ。

## エピローグ 太陽へ掛かる虹

『クソツ……こんなはずでは……！』

焼け焦げた身体を引き摺りながら、幾重に連なる時空の狭間を敗走する。

恥辱と憤慨に塗れた逃避の中、瞬くのは己が野望を阻んだ忌々しい光だ。

『やはり私一人であの方の意思を継ぐべきだったのだ……！ 何故あんな子娘になど……！』

計算が狂った原因を何度も模索するが、結局はこれに帰結する。

全ては本来あの世界に存在しないはずの光。その発露が全てを瓦解させた。

『許さんぞウルトラ戦士………次こそは必ず……！』

「次だあ……？ 逃がすと思ってるのかよ」

全ての狂いへと繋がった声の飛来を察知し、咄嗟に翻した身体を掠める銀色の閃光。

思考の内では屠るべき憎悪の対象であったそれも、今のこの瞬間に限っては絶望の象徴に他ならなかった。

「よお………借りは返しに来たぜ蝙蝠野郎」

銀翼を携え迫りくる文字通りの白刃。

回避の不可を悟った肉体は無謀な打ち合いへと転ずるが、最期の一撃が奴を捉えることはない。逆に刻み込まれた斬撃は鎧に覆われているはずの身体を深々と切り裂いていた。

『馬鹿、なあ……、こんな……ところでエ……！』

遠くなる感覚と共に暗転する視界が底へと落ちてゆく。

直後に訪れたのは完全なる漆黒。暗闇に沈んだ意識が再び浮上することは二度となかった。

「……つと、いつちよあがりい」

背後で上がる爆発を機に張り詰めていた緊張の糸を解く。

彼等に比べ少し遅くはなったが、これで自分の果たすべきケジメは果たした。

「デバイザーの生体反応が消えてねえからまさかとは思ったけど………一応追尾してみて正解だったな」

もし奴を取り逃したことで更なる悲劇を生んでいたら。そう考えるとあまり気分のいいものではない。

正直別世界のことなどを気に掛けている余裕などないのだが……まあ少なからず、これで妙な心残りを残すことはないだろう。

『……この分じゃ、もう終わっちゃまったみてえだな』

寄り道を終え、今度こそあるべき場所へ帰還しようとした刹那、覚えのある声が耳を撫でた。

忘れもしない。これは自分が初めて触れた、自分以外の――、

『よお。久々……つてほどでもねえか』

振り返った先で見えたものは、自分と同じ白銀の鎧を纏った巨人。

その姿形は直前まで共に戦った者と共通するが、同一の者でないことはすぐに理解した。

『ウルトラマンの存在しない、様々な平行宇宙を滅ぼし続けてる奴がいる。宇宙警備隊の方もやつと尻尾を掴んだとこだったんだが……まさかお前に先を越されるとは思ってたか』

赤と青のツートンカラーの中に走る銀色のライン。象徴的な胸の光に、粗暴な印象な

がらも強い意志を感じさせる双眸はあの時と変わらない。

『おかげで手間が省けた。宇宙警備隊を代表して礼を言うぜ、翔琉』

けどたった一つ、あの時と明確に違うものがある。

装甲を解き、称賛の意と共に手を差し出してきた彼の姿を、生まれた違和を抱きつつ眺めた。

『……ん？ おい、どうしたさつきからぼけーつとしやがって』

「……え？ あ、ああ……わりいわりい」

遅れて重ねた手のひら。その瞬間、やはりと実感する。

目の前の巨人の中に、あの時肩を並べた彼彼の気配はもうなかった。

『しゃんとしろよ。この件については感謝するが、お前の方の戦いはまだ終わっちゃいねえんだろ？』

「……わかってるよ」

けど憂いなどはなかった。感ずるものはむしろその逆とも言える。

彼はあの先も、仲間と共に駆け抜け………掴むべき未来を、掴み取ったんだ。

『……つと、あんま長居してもいらんねえか。俺の方も任務が立て込んでるもんでな』

感慨の間もなく、束の間の再開は再度合着された鎧によって幕を閉じる。

『またどつかで会おうぜ。それじゃあな………シエアア！』

突き出した拳を胸の輝きに当てた後、蒼き勇者は次元の穴の中へと飛び去ってゆく。時間にして数分にも満たない邂逅。けれどこの胸に充ちるものは、時間などでは測れないものだ。

「そっか……やり遂げたんだな、お前は……」

自らも纏う白銀は彼等から受け取ったもの。力だけじゃない。学び、感じた想いは、今も自分の中にある。

「……負けてらんねえよな。やってやるよ、俺だつて！」

その一つ一つに突き動かされた身体は時空を超え、天地翔琉は、守るべきものが待つ場所へと舞い戻った。

瞼を閉じれば思い出す、語るには少々現実味を欠いた、夢のような出来事。

きつと誰に言っても、過去の自分すら信じはしないだろうけど、それでも確かに――



——ここにあった。そんな体験。

『——春馬』

声に引き戻され、身体を離れていたかのようにどこか遠くにあった意識に飛び込んでくる景色。

閑散としつつも温かかったあの場所とは違う、見慣れたビル街を雑踏が行き交う都会の喧騒。ここは自分達の世界だ。

「ごめん考え事してた……どうしたのタイガ」

『信号。とつくに青になつてるぞ』

「……あ」

指摘され、今にも点滅を始めようとする信号機の下を慌てて潜る。

どつと沸き上がってくる疲労に溜息をつきつつ、再び歩み出した足は目的もなく東京の街を彷徨つた。

『おいおい大丈夫かよ。戻ってきてからずっとその調子だぞ』

「ごめん……なんか、ずっと頭から離れなくて」

『ふむ……君達が飛ばされたという世界の話か』

『でもよ、その世界の英雄？ 達と一緒に脅威は退けたんだろ？ だつたら気に揉むこと

もないじゃんかよ』

既にこの世界に帰還してから数日が経つというのに、三者三葉に投げかけられる声音には未だに懐かしさすら感じる。

この世界へ戻ってきた時、別時空へと移ったあの瞬間から時刻が変わっていないどころか、濃霧などを含む一連の異常現象を覚えていた者はいなかった。

記憶が残っているのは自分と共にあの世界へ飛ばされた相棒と、こちら側へ取り残した二人の仲間だけだ。

「そういうのじゃないんだけど、なんかこう、もつと別なものと言うか………」  
『……あの少女達のことか?』

自分の意を読み取ったかのような声に頷く。

「あれでよかったのか、なんていうつもりはないよ。世界だけじゃない。あの子達の心も救った未来さんは本当にすごかったと思う。……でもあの子が初めに助けを求めに来たのは、俺だったはずなんだ」

悠久の時を超え、その魂が薄れつつある中でもなお、友のため時空を跨いでまで救おうとしたその想い。是非はあれど、それ自体は美しいものだ。

だからこそ、思う。

「俺はあの子達に、なにかすることができたのかな………つて」

確かにあの世界の勇者達に触れ、変化を促すことくらいはできたのかもしれない。けれど、結局自ら踏み出し、世界を救うまでに至ったのは彼等自身だ。特別自分が何かを成したという訳ではない。

それがずっと、心に引つ掛かり続けている。

「……未来さんなら、どうするかな……」

「お、春馬——！」

思案の中へ割り込む声の一つ。

雑音に囲まれた街の中でその主を探し辺りを見回せば、自然と、列を成す人々の傍らに身を置いた青年の姿が目に入った。

「未来さん……」

噂をすればなんとやら、とかいうやつか。自分達へ手を振る彼はある意味求めている者。

脳裏へ映し出されていた少年の顔が数年後のものへと更新される。本来自分の知る彼はこちらであるはずなのに、こうして大人となった姿と対峙するのは少し違和感があつた。

「いやー、丁度良かった。ちよつと付き合ってくれないか」

「……はい？」

手招きされるままに寄つてみれば、掛けられた言葉の内容に首を傾げる。

それなりの長蛇となりつつある列の先にあるのはここらでは有名なスイーツ店だ。少し前に姉貴分がこの甘味は美味しいなどと満足げに語っていた記憶がある。

だが自分の知る限り、この場所と彼は結びつかないものだが……、

「実はうっかり冷蔵庫にあつたカレンのプリン食つたら機嫌損ねちまつてな。それで詫びも兼ねて甘いものでも買って戻ろうかと思つたんだが……ちよつと俺一人で並ぶにはハードル高くてな、こー」

語られた理由に再度列を見返してみれば並んでいる多くは若い女性だ。

なるほど。確かに成人男性一人では入りづらい空気感だろう。

「頼む春馬この通りだ！　なんか好きなの奢るから……な？」

重ねた両手を前に頭を下げてくる姿はとても地球を守る……などと声高々に語っていたあの時とは繋がらない。

なんとも情けない様に断りきることは出来ず、結局、かつての英雄と共に甘味を求め、列の一部となるのだった。

「それで何か悩みでもあるのかよ、後輩」

「え……」

並び始めて数十分ほど経っただろうか。

無事詫び入れの品も手に入った折、店内併設の席でコーヒーを呷った彼は不意にそう零した。

「最近春馬の様子が変だって、昨日ノワールの奴から聞いてさ。そしたら丁度見かけたし、いい機会だと思っちな」

「え、何でそれ知ってるんですかノワール先輩」

「深く考えるな………そんで、そこんどこどうなんだよ」

向けられた真っ直ぐな瞳はあの世界で出会った彼と重なった。

澱みも、まして歪みもない。平行世界を隔てた別人だとは言えど、やはり本質は同じなのだ実感させられる。

だからこそ、彼の出す答えが知りたかった。

「……もし、助けを求めてきた人の力になれなかったとしたら………未来さんならどう

しますか？」

促されるままに切り出した問いが生む暫くの静寂。

一瞬考える仕草を見せた彼が次に発した言葉は……意外にも、単純なものだった。

「…次こそは力になれるよう頑張る、かな」

殆ど即答に近い形で出された答えに目を丸くする。

彼の言う次が必ずしも同一の人物に対する次でないのはすぐにわかった。でもそれは何かを守るという道の中で出した答えの一つなのだろう。

「勿論ずっとそれじゃダメなんだろうが、出来なかつたことにいつまでも囚われてもいられないだろ？ 特に、俺達みたいなのはさ」

ラフに重ね着されたジャケットの下で見え隠れする G U Y S の文字。

彼等が地道に紡ぎ磨いてきた翼は今や更に大きな空へと羽ばたかんとしている。それは彼の掲げた答えが正しかった証明ともとれる。

「……それでいいんでしょうか」

「ま、俺の考えが正しいだなんて言わねえさ。あくまで参考程度にしてくれりゃいい……… たつぷり悩んで納得できる答えを見つける若人。それがお前達の特権だろ？」

確かに、考えることはこの先を進む上で自分なりに出した生き方だ。今この瞬間においても考えることを続けるのは、自分で自分に課した縛りでもある。

けれど今の自分が求めてしまっているのはその縛りとは乖離するもの。どうしたらいいのかと言う疑問に対する、明確な結論だ。

「……お、今年ももうそんな季節か」

混雑する思考を引き戻す旧懐を含む声音。

注がれていた視線の先に焦点を合わせれば、街中のモニターに表示された☒Love Live☒の文字があつた。

「春馬のこの子達も出るんだろ？ ラブライブ」

「え、ええ……皆頑張ってます」

「青春って感じていいねえ。俺も是非見届けたいところだが……今回の無理そうかなあ」

どうやら直前までの話は既に終わったらしく、代わりに語られるのはかつての思い出ばかり。

結局答えと呼べるものは得られず、煮え切らぬまま自らもグラスに注がれた飲料を口に含んだ——その時。

「いよいよね……ラブライブ！」

吹き抜けた一陣の風が、白百合の芳香を運び込む。

「はしゃいでいるねえ。そんなに楽しみ？」

「当たり前でしょ。……私達も、いつか……！」

モニターの前に形成された小規模な群衆の中、二人の少女が意識を射止める。

「高校生になったら絶対なるわよ！ スクールアイドル！」

「うん……約束、だもんね」

語られる夢から香る微かな残滓。それが自分の知るものなのかは定かではない。

けれども気付けば口元には、自然と笑みが浮かんでいた。

「……なんか、急にいい顔になりやがったな」

「そうですね？」

やがては雑踏の中へと消えていった二人を見送りつつ、深く息を吸い込む。

（そうだ……俺の成すべきことは何一つ、変わってない）

様々な出会いが灯してくれた心の火は今もここにある。

力強く燃え上がってゆくその熱を胸いっぱいを感じ取りながら、追風春馬は、まだ見ぬ未来へ想いを馳せる。

「……俺も頑張らなきゃなって、思いました」



限りない未来の、その先へ。

ずっと変わらない夢があった。ここから始まる夢を見つけた。その輝きを追い求める道は、これからも続いてゆく。

灯った光は消えはしない。ウルトラの星は今日も——ここにある。

ウルトラのキセキ  
　　＼ One  
More  
Sunshine  
Story  
　　＼



One More Chaos Symposium

特別編 1 暇を持って余した 創造主たちの 戯れ

「…なるほどね。これが、この世界を選択か」

闇が蠢いている。

光の届かぬ深淵を思わせぬ闇の中で、それよりも更に深い闇が、震えている。

「見届けさせてもらったよ。君達の選ぶ道、その行く末を……けど、まだ足りない」

闇の中からいずる声。いや、声とも成り切らぬやもしれないその響きは、明確な起伏を以って黒に溶けてゆく。

「足りないんだよ。この物語には……善も悪も、光も闇も、ご都合主義もメタフィクシオンも！ その悉くを超え内包した、圧倒的な**狂気**が**ツツ**!!」

響きはその波を殊更に膨れ上がらせる。

最早闇にすら抱えきれない何かを伴った**ソレ**は膨大なまでの熱を生む。

「花には水を、人には愛を、宴には混沌を！ 狂気が足りないのならボクが与えよう

……英雄達が時空を超え共演する、この夢の舞台に……!」

刹那、闇の世界に走る亀裂。

「さあ………楽しいパーティーの始まりだ！」

次の瞬間には弾け、溢れ出した波動は——あつてはならない存在を、その世界へと顕現させた。

「………ど(う)だ(い)い(い)」

突然投げ出された摩訶不思議な空間で一人頭を搔く。

水面に浮かぶ油のような文様の中に佇む小講堂程度のスタジオ。円状に形成された座席とその正面に鎮座する立ち台はバラエティ番組のセットを思わせる。

「…あれ、なんで俺達……？」

また妙なことにでも巻き込まれたかと思案する最中、後方から別の声と気配を察知し振り返る。

確認できたのは丁度自分と同年代くらいであろう男女。中性的な顔立ちをした少年と、逆に男勝りな雰囲気すら覚える少女が揃って周囲を見回している。

「……俺だけじゃねえのか」

更に一人、また一人と、この空間に放り出された者達を認識し首を捻った。

知り合いとの血縁を思わせる者や、自分と同質の気配を感じる者。中には以前共に戦った友の顔すら見受けられるこの場所は一体何なのか……その疑念に応えるように、スタジオ中央の立ち台に照明が降りる。

「ふっふっふ……お集りのようだね少年少女諸君」

「けど安心するといいさ。ここは君達にデスゲームを強要する場所でも○○しないと思えない部屋でもない……ただのパーティー会場だよ」

明かり中に映る人影。

万物を照らす光すらも無に帰す黒を纏った二人の男の顔を視認し、最初に確認した少年と共に顔を顰める。

「ノワール……!?!」

「オウガ……化けて出やがったか?」

「やあやあ未来君にステラちゃん。無事この場所に来れたようで何よりだよ」

「久しぶりだね陸君。またボクに逢えてうれしいかい?」

「そんなんでもいいから説明しろ説明。なんなんだよここ」

「傷付くなあ……でもまあ、他の子達のことを考えるとそっちの方がいいかもね。ノ

ワール君」

「よし来た任せたまえ。この場所は名付けるならそう……超ご都合主義空間ツツ  
!!」

「……は？」

未来と呼ばれた彼と共に腑抜けた声を漏らす。

そんな自分達の様子を面白がるような黒尽くめ二人組は気持ちの悪い笑いを上げ――高らかに宣言した。

「さあ、ここからはボク達のターンだよ」

「題して、ウルトラのキセキ特別編 One More Chaos Symposium  
i u m ツ! 闇のゲームの始まりだアツ!!」

夢なら覚めてくれと頬を抓るが、ノリノリの変態共が繰り出す時間はまだまだこれからのようだった。

ノワール「と、いう訳でここからは台本形式で進行していくよ」  
オウガ「こつちの方がテンポよく進むし、それにこうしないとボク等はどつちがどつちなのかわかんなくなつちやうからねえ」

ノ・オ「アツハツハツハツ！」

陸「あーーーーーひつさびさだなこのウザつてえ感じ……」

ステラ「……イライラする」

オウガ「お、どつたのステラちゃん。ひよつとして女の子の日かい？」

ステラ「ぶつ殺すわよアンタ」

ノワール「まーまーそう怒らないでステラちゃん。スマイルスマイル」

オウガ「カルシウム足りてないんじゃない？ 牛乳飲もうよ牛乳。イライラ防止にもなるし、その慎ましやかなお胸も多少は——」

ステラ「ブチッ」

未来「恐れを知らないな……」

陸「すまん。ホントすまん……」

ノワール「このままじゃステラちゃん暴れ出しそうだし、進めちやおつか。未来君、

さつきボクが説明したことを復唱したまえ」

未来「え、あ、ああ……えっと、確か各作品のオリキャラの集う座談会企画……だったか？ 正直訳わからんが」

ノワール「よく出来ました。まあ要するに第三の壁をぶち破って色々メタい話をして欲しいってこと」

未来「うわ、身も蓋もねえ」

オウガ「各々の作品に対する質問等にも答えてもらうよ。まあ仮面ライダージオウの補完計画みたいなもんさ」

陸「せめてウルトラシリーズで例えろや」

ノワール「そしてこの超ご都合主義空間では今作☒ウルトラのキセキ☒に加えて君達の出身である作品が属する時空、そしてそれぞれの作者の記憶が共有される。メタい話をするにはうってつけの場所って訳さ」

オウガ「そう……まさしく君達の脳に溢れ出した、存在しない記憶ツツ……！」

陸「言いたいだけだろ」

ステラ「……で？ 私達に作品の設定や裏話を交えてフリートークでもして欲しいってこと？」

ノワール「さっすがステラちゃん。飲み込みが早くて助かるよ」



オウガ「ずっとこのメンツだけで話してるのもアレだし、ぱっぱと顔見せも終わらせて本題行っちゃおうか！」

ノワール「ボク達は今更必要ないとも思うけど、まあ一応ね。☒メビライブ！ サンシャイン!! く無限の輝きく☒から日々ノ未来、七星ステラ、そして司会のボクと……続編の☒タイガ・ザ・ライブ！ く虹の向こう側く☒からボクの後輩君、追風春馬の四人でお送りしていくよ」

春馬「…なんか昔のお三方を見るようで新鮮でした。やっぱり仲いいんですね」  
ステラ「……これを見てそう思うなら病院へ行くことをお勧めするわ」

オウガ「☒ゼロライブ！ サンシャイン!! ☒組からはボクと仙道陸君の二人だけど……そっちに比べると味気ないね。ハイ次」

陸「すっげえ雑に流したなオイ」

ノワール「ここはお初組かな？ ☒ラブライブ！ サンシャイン!! く大地と海の巨人く☒から桜内遥君」

ステラ「桜内って……」

ノワール「ああうん。遥君は梨子ちゃんの弟……って設定みたいだね」

未・陸「「梨子の弟おッ!?!」」

遥「圧が凄い……」

オウガ「こらこらお二人さん。未来君はともかく陸君は見た目ヤンキーなんだから根暗陰キヤにそんな剣幕で詰め寄っちゃダメだつて」

遙「しかもこの流れで貶される!?!」

未来「へえ〜……梨子の弟かあ……」

オウガ「そつちの世界の梨子ママはお盛んでいらs y——」

陸「黙つてろ」

ステラ「……ていうか、キセキの情報が共有されてるなら、二人が梨子の弟のこと知らないはずはないんじゃないの?」

ノワール「言つたでしょ? 超ご都合主義空間だつて。進行上都合の悪い記憶や情報は共有されてないの。ご都合主義だからね」

ステラ「便利な言葉ね……」

オウガ「まあいいじゃないの。どうせ感慨の欠片もないおまけ企画なんだから。楽しければそれでいいんだよ」

陸「それはそれとしてお前はもうちよつと自重すべきだと思ふけどな」

ノワール「ちなみに最初は湊博樹君も登壇してもらう予定だったんだけど、あまりにも会話に入つてくるビジョンが見えないから存在ごと抹消されたつてさ」

遙「博樹さん……」

ノワール「ともあれ役者は揃ったんだ。いよいよ本題の方へ——」

翔琉「あのー……俺の紹介、忘れないでもらっていいですかね？」

オウガ「あゝ……そう言えばいたね君も」

翔琉「マジで忘れられてましたあ!? おい、お前等もなんか言つて——」

未来「いや、まあなんと言うか……」

遙「一応本時空の僕達全員とも面識あるみたいですし……」

陸「別に今更紹介される必要ねえかなあ……つて」

春馬「あはは……」

翔琉「ひつど!! てかお前等さつきまでツツコむ側だったクセに何いきなりボケる方回つてんの!?!」

ノワール「まあこれもご都合主義つてことで。遅れたけど彼が天地翔琉君。虹タイガを除く三作品とコラボしたこともある☑RAINBOW X STORY☑の主人公

だね」

春馬「俺ともキセキで共闘してるから、実質全員と面会済みってことですね」

翔琉「だからって流す必要なくない？ 酷くない？」

オウガ「ま、高身長好成绩でイケメンな上に運動神経まで抜群な完璧超人に誰も興味なんてないでしょ。ぱっぱと本題入ろうよ」

翔琉「めつちや言われんだけど……俺なんかアンタに悪いことした？」

オウガ「ハイスベックな上にモテる奴なんて無条件に敵だからね」

翔琉「滅茶苦茶僻んでんだけどコイツ!? てかそれ言ったら陸なんて俺以上にモテてんじゃねーか！ グループ全員侍らせてんだろ！」

オウガ「おーっとそこはウチの作者の黒歴史だからそこまで少年。それに陸君はどっちかと言うとダメ人間だし見てて面白いからいいんだよ」

翔琉「露骨なまでの鼻貞！」

陸「俺もちやつかりデイスられてはいるけどな」

ノワール「なんかモテるモテないの話になってきたし、流れでそっちから行っちゃおうか。質問もあつたしね」

翔琉「ああ続くのねこれ……まあ、モテるつつたらやつぱ陸じゃねえの？ さつきも言っただけグループ全員侍らせてんだし」

陸「自分で言うのもアレだが字面だけ見るとんでもねえな……」

オウガ「ま、そのモテモテ二人組は特別触れることもないでしょ。それよりもだよ諸君。ラブトラで恋愛絡みと言ったら外せないビッグでホットなカップリングがあるじゃないか」

遙「ビッグでホット……?」

オウガ「そう……ズバリ☒みら×ステ☒!!」

ステラ「ツ!」

未来「なんだそれ……」

春馬「あ……」

ノワール「最初から飛ばしてくるねえ……で、実際のところどうなのさ未来君」

未来「いやどうと言われても意味がわからんとしか……なあ?」

ステラ「……」

未来「ん……? ってなんだその表情!?! ステラが見たことねえ顔してる!?!」

ステラ「……は? なにがよ」

未来「声ちっさ!?!」

ノワール「えーつと、一応みら×ステを知らない健全なる読者諸君に説明しておくよ、

これはその名の通り未来君とステラちゃんのカップリングのことを差すよ」

翔琉「そう言えばキセキでも少しそんな描写あったよな」

ステラ「か、カツプリングもなにもまず私は本編じゃそんなこと一度も……！」

春馬「あれ、こっちの間章でも少し触れてませんか？ 確か——」

ステラ「春馬うるさい」

ノワール「まあ、発端は作者達の悪ノリと妄想だからね。主にがで始まつてるで終わる人」

オウガ「でもその熱は妄想に収まらず作者の蒼人氏によつて二人がくつついた想定の話とか、キセキ時空での二人の馴れ初めなんかも投稿されてるよ。詳しくは蒼人氏の Twitter を参考されたし」

ノワール「ていうか、作者間じやみら×ステ以前にステラちゃん自体が玩具みたいな扱いになってるよね。☒22歳JKコス性知識小学生レベル甘味好きくつころ女騎士

☒とかいうレッテルもあつたし」

ステラ「最早虐めの領域じゃないのこれ……」

ノワール「愛ゆえだよステラちゃん」

春馬「…結局姐さんって今おいくつなんですか？」

ステラ「…考え方にもよるわね」

陸「確信犯じゃねーか……」

ステラ「私のことはもういいでしょ！　そもそも未来には千歌がいるじゃないのよ！　私のとカップリングなんて必要ないでしょ！」

オウガ「だからこそだよ。 mira×ステは叶わないからこそその美しさが……」  
ステラ「うっさい！」

ノワール「でもまあ、そっちも方も気になるよね。 未来君未来君、一応メビライブ最終話で愛の告白はしてみたいんだけど、今千歌ちゃんとはどの辺まで進んでるんだい？」

未来「……」

ノワール「……未来君？」

未来「……何も進んでないです」

ノワール「……？　ああ、うん。 質問が悪かったね。 虹タイガの時点でのくらい千歌ちゃんとの関係は進展があったのかなあ……って」

未来「だから、その……何も進んでないです」

ノワール「……え？」

未来「一応その……お付き合いは始めました。 けどその先の進展は一切ないです」

ノワール「……マジで？　嘘でしょ？　何年付き合ってるの君達」

未来「仕方ないだろ！　G U Y Sの準備やら何やらで忙しくて全然地元帰れてないん

だから！」

ノワール「いやまあボクも同僚だしそれくらいは知ってるけどもまさかここまでとは思ってなかったよ」

オウガ「これだからヘタレは……ちよつと遙君を見習いなさいよ。結婚するだけに飽き足らずやることやって子供まで作ってんだからね彼！」

遙「いきなり飛び火するのやめてくれませんか!」

オウガ「あの母あつてこの子あり……やっぱり血は争えないんだね」

陸「ホント黙つてろよお前」

春馬「ま、まあ、形は人それぞれですし……ね? その人のこと大切に思つてるなら俺はいいと思いますよ」

ノワール「お、いいこと言うじゃないか後輩君」

翔琉「そういう春馬はなんかその手の話ないのかよ」

春馬「俺はまあ……特には。あんまり気にしたことなかったなあ」

ステラ「…あのセクハラ紛いな行為はノーカウントなのかしら」

春馬「セクハラ……?」

ステラ「無自覚……。けどまあ、そんなアンタでも慕つてる子はいるのは幸せなんじゃない? 当人に自覚はないみたいだけど」



春馬「あ、ありがとうございます……?」

ノワール「…自分のことじゃなければさらつと言えるのにな」

ステラ「そこうるさい」

翔琉「他にもなんかないのそういうの。ほら、好きなタイプとかでもいいからさ」

陸「んだこの修学旅行の夜みてーなノリ……」

翔琉「別にいいじゃんかよ。ほれほれ、陸から陸から」

陸「…いや、別に俺はそういうのは特に……」

ノワール「ちなみに彼は作者の方から『自分のことを好いてくれてそれでいて一定の距離感を持つてくれる子』って正式回答が出るね」

陸「おいしい!」

遥「うわあ……」

ステラ「……クズね」

オウガ「おっと外野はドン引きみたいだね」

陸「これ俺が悪いのか!」

遥「好意を持つてくれてる前提で好きになるとか……流石に他者依存が過ぎませんか?」

陸「お前も似たようなモンだろが!」

ステラ「あくまで自己中心みたいな考え方が腹立つわね。斬っていい？」

陸「だあああ！ だったらテメエ等の方も洗い浚い聞き出してやらあ！ おい遙！」

次お前だ！」

遙「洗い浚いも何も、僕は普通に大人しめで物静かな子が……」

オウガ「そう言いつつ夜の方はしつかりばつちりしてるみたいだけど」

遙「そこまだ擦ります？」

陸「無難に流された感じがまたアレだが……まあいいや。未来は？」

未来「……俺はさつき散々擦られたからいいだろ」

翔琉「それもそうか。んじや春馬、次お前な」

遙「ノリノリですねこの人」

オウガ「まあ洒落でも告白の時に壁ドンするとか言えちやう（作者談）子は強いよね。

そんで春馬君の方はどうなんだい？」

春馬「俺は……優しい子がいいですかね」

ノワール「——とか適当なこと抜かすけど相性いいのは年上のお姉さん。って作者

回答が彼の場合も出てるね」

春馬「これわざわざ聞く必要ありました？」

陸「内容については別にいいんだな……」

翔琉「虹タイガで……春馬より年上……」

オウガ「はる×ステの時間だゴラア！」

ステラ「アンタマジでいい加減にしなさいよ」

ノワール「まあ纏まりはしたからいいんじゃないかな？ 最後にモテる順位をランキ

ング形式でつて話だったから、一応出しておく……こうかな？」

1位 未来

2位 陸

3位 翔琉

4位 春馬

5位 遥

未来「いやなんでこの流れで俺が一番なんだよ。もつとモテてる奴他にいただろ」

ノワール「いやまあ、それはそうなんだけど」

オウガ「みら×ステが尊いから未来君1位でいいでしょって満場一致で決まったらし

いよ」

未来「ちゃんとやれや作者共お！」

春馬「ていうか俺4位なんです。てつきり最下位かと思ってました」

オウガ「まあ同率つちや同率だったんだけど、最後まで子作りネタを擦ろうつてなった結果遥君が最下位になったよ。リア充爆発しろー」

遥「公平性が息してない……」

ノワール「この勢いで次の質問……って行きたいとこだけど、文字数の関係上今回はここまでだね」

オウガ「という訳で次回へ続く」

陸「続かんでいいわ」(続きます)

## 特別編2 何事もノリと勢い

オウガ「前回の！ ウルトラのキセキ特別編！」

陸「語呂悪すぎんだろ」

ノワール「突如謎の空間に飛ばされた未来君達各ラプトラマン作品主人公ズ……………ここで行われるのは第三の壁をぶち破る座談会企画！」

オウガ「大盛り上がりの会場に成功を確信したその時、尺と文字数の関係で突然話が終わってしまった！ この企画、一体どうなっちゃうの!?! (高音)」

未来「盛り上がってた……………か？」

ステラ「あとパロディするならもう少し似せる努力をしなさいよ」

ノワール「さあさ外野のボルテージもそのままに、早速前回拾い切れなかった質問行ってみよう！」

翔琉「あーそれ、ずっと聞こうと思ってたんだけどさ。質問てどんなのが来てんの？」

オウガ「んー…何と言うか、今回のも前回の質問からの引き続きというか……………」

ノワール「質問箱から引用させてもらおうとだね……………」

——モテるキャラ、頭がいいキャラ、曇ってるキャラをランキングで。

あとは他作品間で仲が良かったり気が合いそうなコンビ、もしくはその逆を教えて欲しいです。――

………つていうのが来てるね」

オウガ「幸いなことにこれだけで尺間に合いそうだよ。ありがとう質問者の人」

春馬「これ以外にはなかったんですか？」

オウガ「Twitterとかでも募集してたからあったにはあったんだけど、ちょっと拾いにくいものだったからこの場では省略させてもらうよ。申し訳ない」

陸「まあこの各作品の女子キャラのスリーサイズがくとか聞いてきてる奴のとか絶対拾えないもんね」ダイホンチラミー

未来「誰だよ質問者……」

ステラ「……下衆ね(ガチトーン)」

ノワール「これに関してはペナルティライン以前に答えられない作品もあるから仕方ないね」

オウガ「……そこに関しては一つ不満が」

遙「…そんなに知りたかつたんですか？」

オウガ「いやまあそれも魅力的ではあるけども……ボクの不満はそれ以上のものだよ。スリーサイズに関してはステラちゃんのだけは作者側から発表されてるからそれ

で我慢できるけどこっちは我慢ならない」

ステラ「ちよっと待って今なんて」

オウガ「我慢ならないんだよ……どうしてウチの作品だけ——

——女の子のオリキャラがないんだツツ!!」

陸「はあ?」

オウガ「考えてもみるよ。メビライブ時空にはステラちゃんに始まり続編ではカレンちゃんや闇兄弟の妹達。翔琉君や遙君の世界でも明里やXioの面々にシルビアちゃんといった魅力的な女の子達が登場している。そう、最早女性オリキャラの存在は作品を彩るために必須と言っても過言ではないほどの要素………なのにウチのオリキャラは野郎二人つていうこのむさ苦しさ! 一体どういう見なんだよ陸君ツ!」

陸「知らねーよ作者に言えよ!」

遙「すつごい早口で言い切りましたねこの人」

翔琉「オタク特有の早口ってやつ？ まあでも、キセキの方ではちゃんと女子オリキャラ出してたからいいんじゃないの？ ほら、ユリにカエデだったっけ？」

オウガ「いやボク本編の方出てないし。ボクが直接その子達と拝めないなら関係ないね」

未来「横暴……！」

春馬「そう言えば……。赤い靴の少女に当たるキャラのカエデさんはともかくとして、ユリさんって8兄弟の方にモデルになったキャラクターいませんよね？」

ノワール「ああうん。彼女に関してはスクールアイドルって要素を組み込まなきゃってことで登場させたみたいだよ。ほら、一応この作品の原作、ラブライブだからさ」

オウガ「モデルになったのは☒イナズマイレブNGO VS ダンボール戦機W☒のフランちゃんらしいね。シナリオの方も少しその要素を組み込んでみたい」

翔琉「また意外なところから……」

オウガ「まあウチの作者の青春イナダンで構成されてるからね。続編求む」

陸「ここで言うなや」

ノワール「ちよつと脱線したけど、本題戻ろつか。モテる云々に関しては前回触れたから、今回はこの曇ってるキャラってところからやっつけていこうか。これは先にランキン



グから出した方がよさそうかな？」

オウガ「という訳で、気になるランキングが……………こちら！」

1位 春馬

2位 陸

3位 遙

4位 未来

5位 翔琉

未・翔「ん…………？」

ノワール「おや、不服かいお二人さん」

翔琉「不服つつーか、いやまあ、未完結勢の俺が最下位なのは何となくわかるんだけど……………」

未来「俺で4位なんだな。自分で言うのもアレだけど、俺も結構作者とシナリオに曇らされてきた気が……………」

ノワール「一応解説しておく、未来君は幼少期に襲撃した怪獣によって両親を失つてるよ」

翔琉「その時点でまあ、結構重い気がするんだけどなあ……」

遥「……自分で手に掛けるよりはマシですよ」

未来「……え？」

遥「いえ……すみません。親を喪う悲しみに上も下もないですよ……」

翔琉「え、なに？ 怖いんだけど……」

オウガ「彼は自分の父親を蹴り殺してるよ」

未・翔「はあっ!？」

遥「躊躇なく言いましたね」

オウガ「簡潔に説明するとギマイラっていう他の生物を怪獣化させる能力を持つてる奴がいるんだけど、そいつによつて怪獣化させられた彼のお父さんを遥君は自らの手で

未来「もういいもういい！ 聞いた俺達が悪かったからもうやめろ！」

ステラ「これで3位とか嘘でしょ……」

陸・春「はは………（遠い目）」

ステラ「そもそもランキング付けしていいものなのこれ……？」

翔琉「てか、俺としては陸が2位なのも腑に落ちねえな。前に話聞いたけど相当エグかったぞ」

ノワール「ん、じゃあまあその陸君から開示してこうか」

未来「えー……、俺もう聞きたくないんだが……」

ノワール「これに関しては春馬君にも言えるけど彼等は人間じゃないよ」

未来「この時点で嫌だ」

ステラ「人間じゃないって……私みたいに他の星出身の宇宙人ってこと？」

陸「……だったらまだマシだったよな」

春馬「ええ……本当に」

遥「なんなんですかもう……」

翔琉「え……つと、なんかもう触れる流れっぽいし俺から言っちゃうと、確か陸はベリ

アル？ってウルトラマンの遺伝子を持つてるんだよな」

ノワール「そう。光の国が生んだ歴史上唯一の犯罪者にして最恐最悪の闇の戦士……

それがウルトラマンベリアル」

未来「え、ベリアルって闇のウルトラマンなのか？ エンペラ星人に操られてたん

じゃ……」

ノワール「それはあくまでもボク達の時空だけさ。ゼロライブ時空だけじゃなくて、

本来の時間軸でもベリアルは悪のウルトラマンだよ」

未来「知りたくなかった……」

遥「てことは陸さんはウルトラの一族……ってことですか？」

ノワール「うーん……ちよつと違くて、彼に関してはウルトラマンジードに近い例えなのかなあ。ハイこれ資料」

翔琉「えつとなになに……？ ウルトラマンジード。2017年放送のニュージェネレーションシリーズ5作目のタイトル及びヒーローの名称……」

未来「放送前からベリアルの子息という肩書きが話題を呼んでいたが、その正体はベリアルの復活を目的として生み出された人造ウルトラマン……？」

遥「クローン……ないしはデザインベイビーってことですか……？」

ノワール「そ。ゼロライブはジードの続編……みたいなつもりで書かれた作品らしいから、その辺の要素も拾ってきたみたい」

未来「それで陸の出自ってのは……？」

ノワール「ああうん。そこにはオウガ君の方もちよつと関係してくるんだけど、先と言つちやうと彼等二人は☒ディザスト・スマッシュ☒っていう人造、もしくは改造生物に当たる訳」

ステラ「ディザスト・スマッシュ……？」

ノワール「簡潔に言うとベリアルの遺伝子を持ったウルトラ戦士以外の生命体。まあ人造って言葉の通り、ベリアルの配下によって後天的に埋め込まれたものなだけ」

未来「じゃあつまり陸は……」

ステラ「ベリアルの子を植え付けられた人間……?」

ノワール「まあ陸君の場合は少し特殊で、生まれる前からベリアルの遺伝子を組み込まれてただけ」

遥「ん……? そうなると親とかは……」

ノワール「生まれる前、陸君になる卵細胞を取り出した時点で殺されてるね。しかもその後十七年間傀儡として動かされて、最終的には陸君の目の前で爆散させられる鬼畜っぷり。勘付かせないようにあまり陸君とも会わせてなかったみたいだし」

未来「お……う……」

陸「漁師って仕事の関係上、家にいねえのも仕方ねえと思ってたんだよ……」

思ってたんだけどな……」

オウガ「ああうんなか……トレギアも絡んで来て余計面倒なことになってたよね」

翔琉「急に元氣無くなってんなコイツ」

ノワール「まあ彼も多少なり関わってるから……とりあえず陸君に関してはボクが説明させてもらったよ」

未来「じゃあまあ、次は流れ的に春馬なんだろうが……」

ステラ「これ関しては私も気が進まないわね……」

遙「そんなにですか……」

春馬「……いいんですよ。俺だけ触れないってのは不公平なので……」

翔琉「む、無理すんな……?」

オウガ「じやまあ本人の了承も得たし春馬君の方も振り返っちゃおう」

陸「血が通つてねえのかお前は」

翔琉「さつきまで凹んでた奴はどこ行つたんだろうな」

オウガ「さつききのノワール君から説明が合った通り、春馬君も人間ではないよ。陸君は地球人の遺伝子も持ってたけど、彼に関しては完全に別の生命体みたい」

ノワール「未来君、エンペラ星人は覚えてるか?」

未来「忘れてる訳ないだろ」

翔琉「あ……:そういうやそんなのもいたつけなあ……」

オウガ「春馬君は彼の息子」

未・翔「はあ?!」

オウガ「相変わらずいい反応するね〜」

未来「いやいやいやこうもなるわ! エンペラの!? 息子!」

翔琉「アイツ嫁いたんだな……」

未来「そこじゃねえだろ!」

ノワール「厳密には怪獣墓場に流れ着いたエンペラの魂や他の怪獣、宇宙人達の怨念の集合体である☒ウルトラダークキラー☒って奴がウルトラ戦士を葬るために生み出した5兄弟の長男……って感じだけど」

オウガ「そんな彼がどうして今の追風春馬君になったのか。それを簡易的に纏めてみたから見てみよう」

1 父の命を受けたダークキラーファースト（後の彼）は地球に飛来し本来の追風春馬に出会う

← 2 交流の中で、彼等は互いに友情とも取れる何かを結んでゆく。ある日春馬君の生き方に違和感を覚えたファーストは彼からその真意を聞きだすと同時に使命に疑問を抱く自らの意思も吐露する。ここまでいい雰囲気だったんだよ。ここまではね。

← 3 ところがどっこい、そんな折に変態ボンテージ仮面ことウルトラマントレギアが襲来。

← 4 心に従って生きたい。そう強く思ったファーストは春馬君と共に逃走を図るが

逃げられるはずもなく、トレギアの凶刃がファーストに迫る。その時だった。

←

5 ファーストを庇った春馬君が夥しい量の血を流しながら倒れていた。徐々に生気の薄れていく彼はファーストに対しこう言う。「君が☒追風春馬☒なってくれ」  
……つてね。

←

6 死にゆく春馬君の声を受け、ファーストは自らの肉体に春馬君の魂を移し繋ぎ止める。容姿などをコピーし、記憶や能力といった備わった全ての情報を捨て、彼が目覚めるその時までファーストは☒追風春馬☒を演じ続けることを決めたってことだね。

←

7 でもまあ、数年後とある騒動をきっかけにファーストにその記憶が戻る訳だけど、既に結局春馬君の人格の消失は止まらなくて、ファーストはその後も追風春馬を背負ったまま生き続けることになるんだけどね。アハハ。

遙 「語りのテンションと説明の内容が合致してない！」

ステラ 「これを知った時は流石に困惑したわね」

オウガ 「あと他にも自分が長男としての使命を投げ打ったせいで次男にその責務を背



負わせた結果死に至らしめたり、彼等に感化された妹がラスボス（トレギア）に自爆特攻したりとかもあつたよね」

翔琉「なんでそんな意気揚々と語れんの!? ついさつきまで沈んでたお前はどこ行つたの!？」

オウガ「いやあ、だつてボク関わつてないし」

翔琉「シンプルにクズい!」

ノワール「気付いたら過去の重さを競い始めてたけど……曇つてる云々の方もこれでいいかな?」

未来「いい! いいから次行くぞ次!」

オウガ「おう、ノリノリになつてきたね皆」

遥「ただの命乞いです」

未来「これ以上は耐えられん」

オウガ「んじゃまあ次はこの頭がいいキャラ……つてのになる訳だけど」

未・陸「……」

ノワール「凄い勢いで目を逸らした二人は置いておくとして……皆は勉強の方はどうなんだい?」

オウガ「つてもまあ、アルケミースターズの遥君は言うまでもないし、翔琉君が勉強

できるのは前回ボクがポロっちやったからね。春馬君くらいしか聞く子いないけど」

春馬「特別得意って訳でもないですけど……まあ、それなりには」

ノワール「じゃあまあ……こんな感じかな？」

1位 遙

2位 翔琉

3位 春馬

4位 未来

5位 陸

ノワール「メビライブのエピログからして未来君は一応大学行ってるみたいだし、陸君よりは上ってことで」

オウガ「なんかこう………凄いいつさり終わったね」

陸「…さつきまでが濃すぎたんだよ」

ノワール「じゃあ最後にこの仲の良いコンビとその逆つての答えよつか」

ステラ「やっと終われるのね」

オウガ「正直ここまでで狂気出し過ぎてこれ以上盛り上がれる気がしないよ」

遥「この上ない吉報」

ノワール「これに関しては作者間で少し話したんだけど、ステラちゃんはガイア組と相性よさそうだよねって話になったらしいよ」

ステラ「そう……？」

遥「まあ、この中なら比較的……」

オウガ「ステラちゃんは基本的に一步引いてるもんね。その辺は遥君にとってやりやすいんじゃない？」

翔琉「ようするに陰キヤに優しいと……」

遥「伝染してきた……」

ノワール「逆に陸君とは相性悪いんじゃないかって話だったよね」

未来「まあなんか、キセキでも見事にイザコザしてたもんな」

遥「斜に構えてるのがどうにも……イキつてるとかこういうことを言うのかなって」

陸「お前俺に対して当たり敵しいよな」

ノワール「遥君で言えば明里ちゃんとも相性いいって話にもなったよね。ほら、翔琉君とこの」

翔琉「明里？ ああ……まあ、確かに可愛がりそうな気はする」

オウガ「え、なにになにおねシヨタの時間？ だったらボクはやつぱ——」

陸「ややこしくなるから黙つてろ」

オウガ「君も存外当たり敵しいよね。だから友達いないんだよ」

陸「ほつとけ」

オウガ「いやいや今後またコラボとかの話上がった時にそれじゃマズいでしょ。ていうか、これはボクの持論なんだけど………陸君多分、大抵の子達と相性悪いよ？」

陸「…あ？」

ステラ「……それは何となく私も思ったわ」

オウガ「捻くれているというかなんと言うか、ほら陸君つてさ、自分の大切なものを守れば他はどうでもいい、みたいな考え方じゃん？ その辺が普段の言動にも滲み出てるから、純粋で正義感強い子が多いラブトラの子達とは衝突しそうだなあ………つて」

ノワール「まあ確かに、お世辞にもヒーローつて感じのキャラではないよね。出自も関係してる以上外野があれこれ言うことでもないんだらうけど」

陸「いやいやでもキセキじゃ未来とは全然仲良かったじゃねえかよ」

ステラ「……そこ普通に相性悪いと思うわよ」

オウガ「仲良しだったのはあの世界じゃ幼馴染つて設定があつたからだろ？ その繋がりがない本時空の君達に共有できるものはないし、状況にもよるけど考え方の違いで

衝突しそうだよね」

ステラ「まあ端的に言うとなンタだけ素直に共闘するビジョンが見えないのよ」

陸「アレこれ皆さん俺のこと嫌いですか？」

ステラ「普通に嫌いなタイプ」

遥「好きか嫌いかで言えば嫌いです」

未来「まあ……確かにあんま得意なタイプではないかも」

春馬「右に同じく」

陸「これが四面楚歌か」

翔琉「俺は友達だからな？ な？」

陸「優しさが辛い」

オウガ「ん、なんかオチも出来たしこれで終わろつか」

陸「締め方もひでえ……」

軽快に流れていたBGMがその音を止め、照明の色が切り替わる。

寸刻前に彼等が宣言した通り、この悪夢の時間も終わりを告げる……と言うことなのだろう。

「皆お疲れー。ボクの渴きも満たされるいい座談会だったよー」

「……最終的に俺が虐められただけじゃなかったかこれ」

「まあまあいいじゃないの。楽しかったんだし」

「摩耗した顔で元凶を睨みつける。かつては自分の一部だのなんだの言った記憶があるが、もうこの場に至っては殺意しかなかった。理性が許せば直ぐにでも殺すのに。」

「……最期の我儘だと思つて許してくれよ」

だが自分が手を下すまでもなく、目の前のそれは失われるようで。

ふわりと舞う光。それが眼前の黒から発されるものだと思つて認識するや否や、同時に摩訶不思議な空間もその崩壊を告げた。

「……消えんのか？」

「ボクは死せる者……本来この場にはいてはいけない存在だ。単なる、おまけ企画だけどさ……そんなボクでもこの作品を彩る一因になれてよかったよ」

「……そっか」

目を瞑り、拳を握る。

瞼の裏に蘇るのは、振り返れば懐かしい、黒が映り込む景色ばかりで――、

「——じゃあ遠慮なく殺せるな」

「……え」

直後、そんなものは関係ないと言わんばかりに床を蹴り飛ばし、弾丸が如し勢いで打ち出した拳を憎たらしい顔面に沈める。

全身全霊の力を込めた一撃に対象はもんどりかえって吹き飛ぶ。その間にも肉体は消失を続けているが、逃がさないという硬い意志は即座に己が身を追尾に動かす。

「ちよ、ちよ！ 陸君ストツプ！ もう終わるんだよ!? 最後まで平和にいこう!」

「なーにちよつといい雰囲気出して退場しようとしてんだテメエ！ それで許すか？」

「許すと思ってるのか？ んな訳ねえだろこの野郎オ！」

「待て待てボク等には言葉があるだろ話せばわかる！ それにほら、ボクもう死んでるから！ 故人の尊厳に泥を塗る文字通りの死体蹴りなんて主人公サマがする訳——」

「どうせもう死んでんなら関係ねえ……あと二万回くらい死ねッ!!」

「さーばア！」

内に眠る獣の牙すらも開放し、明確な殺意を込めて振り下ろした漆黒の戦斧は空を切り床を崩壊させる。

命中の寸前で消滅を加速させたのか。瓦解するスタジオの中にウザったい姿は見る影もなかった。

「あの一!? 足場無くなっちゃったんですけどお!?!」

「ああもうこれだから脳筋は!!」

空間の波に飲まれ散り散りになってゆく戦士達からの怒号を受けながら、自らもまた虚空に開いた穴の中へと落ちてゆく。

束の間の出会いや記憶さえもが時空の渦に屠られてゆく中、最後の最後、最大限の感情を込めて叫んだ。

「覚えとけよテメエエエエエエエツツツ!!!」

「うぼあツツ  
!!!????」



「うわっ!? びっくりしたあ!」

現実世界へと帰還した意識は飛び跳ねる形で身体を起き上がらせる。

カーテン越しに差す陽光と尻もちをついた幼馴染を確認し安堵に近い感覚が生まれる。ここは自分のよく知る世界だ。

「お、おはよ……変な夢でも見た?」

「……夢なんかよりずつとタチ悪いモンかもしれん」

朝一番から肩を上下させ、流れる脂汗の不快さに顔を顰める。

またよからぬことが起ころうとしているのかと、今はもう何も無い左腕に触れるが、そんな懸念も目に入った時計が示す時刻を前にやんわりと消えてゆく。

「……なんだかよくわかんないけど……とりあえず急ごう? 朝練遅刻しちゃうよ」

「……あ、ああ……うん」

未だ感覚は狂気と現実の狭間にあるが時間は待つてはくれない。幼馴染に諭されるまま、近頃は馴染んできた制服を手に準備を進める。

「……帰りに墓荒らしてくか」

垂れ幕を除けた窓枠から望む高台の低木。

その根元に眠る者と、最悪の目覚めを齎した変態共に怨嗟の念を馳せながら——今日も今日とて、友と掴み取った日常の中へと駆けた。